№ 02

端気遺跡群 II

—土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

昭和58年度

前橋市教育委員会

序

近年、農地の効率的利用を図るために、大規模な土地改良事業が進められています。前橋市においては、昭和54年度から西大室、富田、清里南部の各土地改良事業が着手され、昭和57年度までにすべて完了いたしました。これに替わり、同年より、端気、小明神の二地区で、新たに土地改良事業を行うことになりました。

前橋市教育委員会では、このような開発事業に対し、埋蔵文化財保護の立場から、工事施工に先立ち発掘調査を行ってまいりました。ここに報告する端気遺跡群IIもその一つで、前年度に引き続き、道水路ならびにやむを得ず削平する部分について、記録保存のための発掘調査を実施しました。

調査の結果、一万年前に溯ると言われる有舌尖頭器や縄文時代草創期の土器片をはじめとして、古墳時代の住居址、中世の大きな環濠などが検出され、前橋の一地域に営まれた人間の歴史の重みに、改めて感慨深いものを覚えます。ここにその成果の一端を報告します。

この調査を実施するにあたり、終始ご協力いただいた農政部土地改良課、端気土地改良区の方々、また、酷暑のなかで直接調査に携わっていただいた作業員の方々に、厚く御礼申し上げます。

本報告書が、斯し学の発展に少しでも寄与できれば、幸いに存じます。

昭和 59 年 3 月 31 日

前橋市教育委員会

教育長　金　井　博　之

例　　言

1．本書は端気土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本遺跡群の略称はＣ２とする。

3．調査主体は、前橋市教育委員会である。

4．発掘調査の要項は、次の通りである。

調査場所　前橋市端気町字西谷492番地他17筆
字着帳507番地他13筆

調査期間　昭和58年８月６日～11月15日

調査担当者　前原照子　岸田治男　井野修二　鵜木晋一　前原　豊
中野和夫　木暮　誠　福田瑞穂

5．本書の執筆および編集は主に木暮誠が担当し、縄文の遺構・遺物は前原豊が担当した。まとめは、木暮、前原の協議により作成した。遺物整理・図面整理・図面作成・遺物写真等は、担当者および整理作業員が分担して行った。

6．遺物観察表は別冊とし、国学院大学学生　須藤宏君の手をわずらわせた。

7．発掘調査および遺物整理にあたり、群馬大学教授　新井房夫氏、群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団　大江正行氏の御教示を賜った。

8．調査ならびに本書作成にかかわった方々は、次の通りである。記して感謝する次第である。

発掘作業員

天田玄市　五十嵐くま　岩木　操　大沢はつ　大沢みさ　加部二生
神野　信　亀井弘美　古松英太郎　佐藤藤衛　佐藤真寿雄　佐藤龍家
下田とも子　下山岑子　鈴木こま　鈴木孝子　高島　康　滝山吉司
角田もと江　渡木秋子　登丸たけ　中島幸重郎　中島つる　野中一七治
野町昌弘　平林　要　平林タカ　平林チヨ子　平林ふさ　槇塚佳子
前田一成　宮石明彦　横堀ます

整理作業員

粟岡エミ子　加部二生　木部理有子　木村真弓　小林敦子　桜井富美子
渋川則子　白井栄恵　下山岑子　須藤　悟　須藤　宏　住谷文彦
千明仁至

凡　　例

1.　遺構の略称は、次の通りである。

古墳時代住居址→H　縄文時代住居址→J　竪穴状遺構→T　溝状遺構→W

土壙→D　落ち込み→O

2.　挿図図版の縮尺は、次を基本としている。

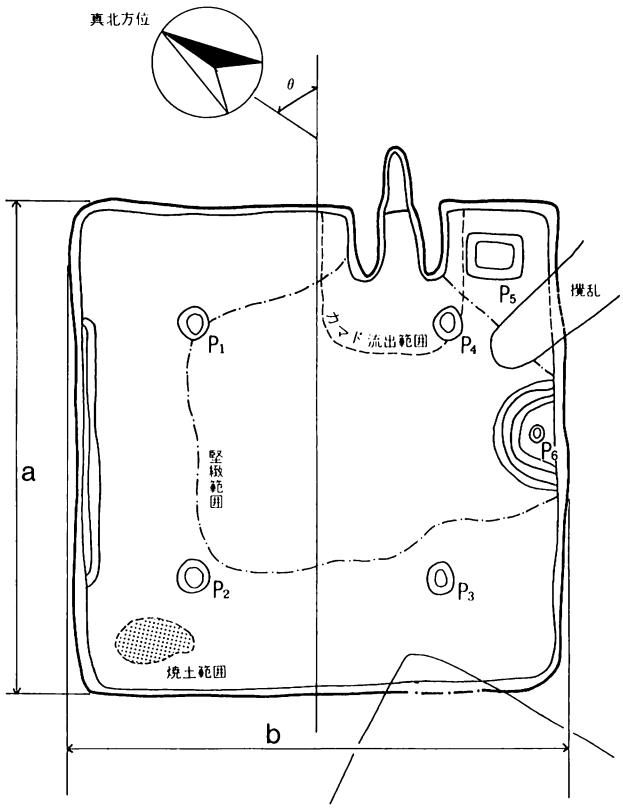
①遺構の住居址・竪穴状遺構・土壙→1/60　住居址掘り方→1/80　カマド→1/30　環濠→1/160

環濠地断→1/80　全体図→1/400

②遺物　土師器・須恵器・J－15の土器→1/4　草創期縄文土器・有舌尖頭器・石簇→1/2

グリッド出土の縄文土器・石器→1/3

3.　遺物番号は、遺物を取り上げた際の番号を、そのまま使用している。接合により複数の番号をもつ遺物は、一つに代表させてある。



a：南北軸長　b：東西軸長　θ：主軸方位

目　　次

序
例　言
凡　例
Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅲ　発掘調査の経過 …… 3
Ⅳ　遺構と遺物 …… 4
1. 住居址 …… 4
2. 竪穴状遺構 …… 54
3. 環濠 …… 55
4. 縄文包含層 …… 57
5. 土坑 …… 60
6. 表採遺物 …… 62
Ⅴ　まとめ …… 63

挿　図　目　次

第１図　端気遺跡群と周辺遺跡……２
第２図　発掘の経過……３
第３図　第１号住居址掘り方……４
第４図　第１号住居址……５・６
第５図　第１号住居址カマド……７
第６図　第１号住居址出土遺物……９
第７図　第２号住居址……10
第８図　第２号住居址カマド……11
第９図　第２号住居址出土遺物……11
第10図　第３号住居址……12
第11図　第３号住居址北カマド……13
第12図　第３号住居址東カマド……13
第13図　第３号住居址掘り方……14
第14図　第３号住居址出土遺物……15
第15図　第４号住居址掘り方……15
第16図　第４号住居址……16
第17図　第４号住居址カマド……17
第18図　第４号住居址出土遺物（Ａ）……18
第19図　第４号住居址出土遺物（Ｂ）……19
第20図　第５号住居址……20
第21図　第５号住居址カマド……21
第22図　第５号住居址掘り方……22
第23図　第５号住居址出土遺物……22
第24図　第６号住居址……23
第25図　第６号住居址カマド……24
第26図　第６号住居址掘り方……25
第27図　第６号住居址出土遺物……26
第28図　第７号住居址……27
第29図　第７号住居址カマド……28
第30図　第７号住居址出土遺物……29
第31図　第８号住居址……30
第32図　第８号住居址カマド……31
第33図　第８号住居址掘り方……32
第34図　第８号住居址出土遺物……33
第35図　第９号住居址……34
第36図　第９号住居址カマド……35
第37図　第９号住居址掘り方……36
第38図　第９号住居址出土遺物……37
第39図　第10号住居址掘り方……37
第40図　第10号住居址……38
第41図　第10号住居址カマド……39
第42図　第10号住居址出土遺物……40
第43図　第11号住居址……41
第44図　第11号住居址出土遺物……42
第45図　第12号住居址出土遺物……42
第46図　第12号住居址……43
第47図　第13号住居址……44
第48図　第13号住居址カマド……45
第49図　第13号住居址出土遺物（Ａ）……46
第50図　第13号住居址出土遺物（Ｂ）……47
第51図　第14号住居址……48
第52図　第14号住居址カマド……49
第53図　第14号住居址掘り方……49
第54図　第14号住居址出土遺物……50
第55図　第15号住居址……51
第56図　第15号住居址出土遺物（Ａ）……52
第57図　第15号住居址出土遺物（Ｂ）……53
第58図　第１号竪穴状遺構……54
第59図　第２・３号竪穴状遺構……54
第60図　菊皿……54
第61図　第１号溝全体図……55
第62図　第１・２号溝出土遺物……56
第63図　グリッド出土遺物（Ａ）……57
第64図　グリッド出土遺物（Ｂ）……58

第65図　グリッド出土遺物（C）……59
第66図　第１～５号土坑……60
第67図　第６～14号土坑……61
第68図　第15号土壙と出土遺物……62
第69図　表採遺物……62
第70図　住居址の規模……64
第71図　住居址の主軸……64
第72図　掘り方の分類……65
第73図　カマドの構造と貯蔵穴……65
第74図　土師器の器形分類……66
第75図　環濠と鬼高期集落の立地……67
付図１　端気遺跡群II遺構全体図
付図２　端気遺跡群II第１号溝

I　発掘調査に至る経過

前橋市教育委員会は、昭和54年以来、西大室をはじめとしていくつかの土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してきた。端気土地改良事業については、昭和54年５月、市農政部より土地改良予定地内の表面調査の依頼があり、同年11月、予定地が埋蔵文化財包蔵地である旨を回答し、土地改良計画の検討を願った。その後、昭和57年５月、端気土地改良区より教育委員会へ発掘調査依頼が提出され、同年５月より８月まで、発掘調査を実施した。本年度は土地改良事業の２年目にあたり、当初の５年計画が２年計画に縮少されたため、最終年度ということになった。６月９日、土地改良区より発掘調査の依頼があり、７月11日、土地改良区と教育委員会の間で委託契約が締結され、８月より発掘調査のはこびとなった。

II　遺跡の位置と環境

端気遺跡群は、前橋市街地の北東に位置し、上毛電鉄片貝駅の真北約２㎞に所在する。前橋市の地形は、赤城山南面の裾野部分(赤城火山斜面)、広瀬川・桃木川流域の低地帯(広瀬川低地帯)、南西部の洪積台地（前橋台地）の３つに大別される。本遺跡群は、地形的には赤城火山斜面の末端部にあたり、広瀬川低地帯がすぐ南に拡がっている。両者の接点は、北西から南東に直線的に繋がる比高数mの崖で、往時の利根川は、この崖下まで流路をとっていたと推定される。「ハケ」という地名は、このような崖状の地形に多く見られる。

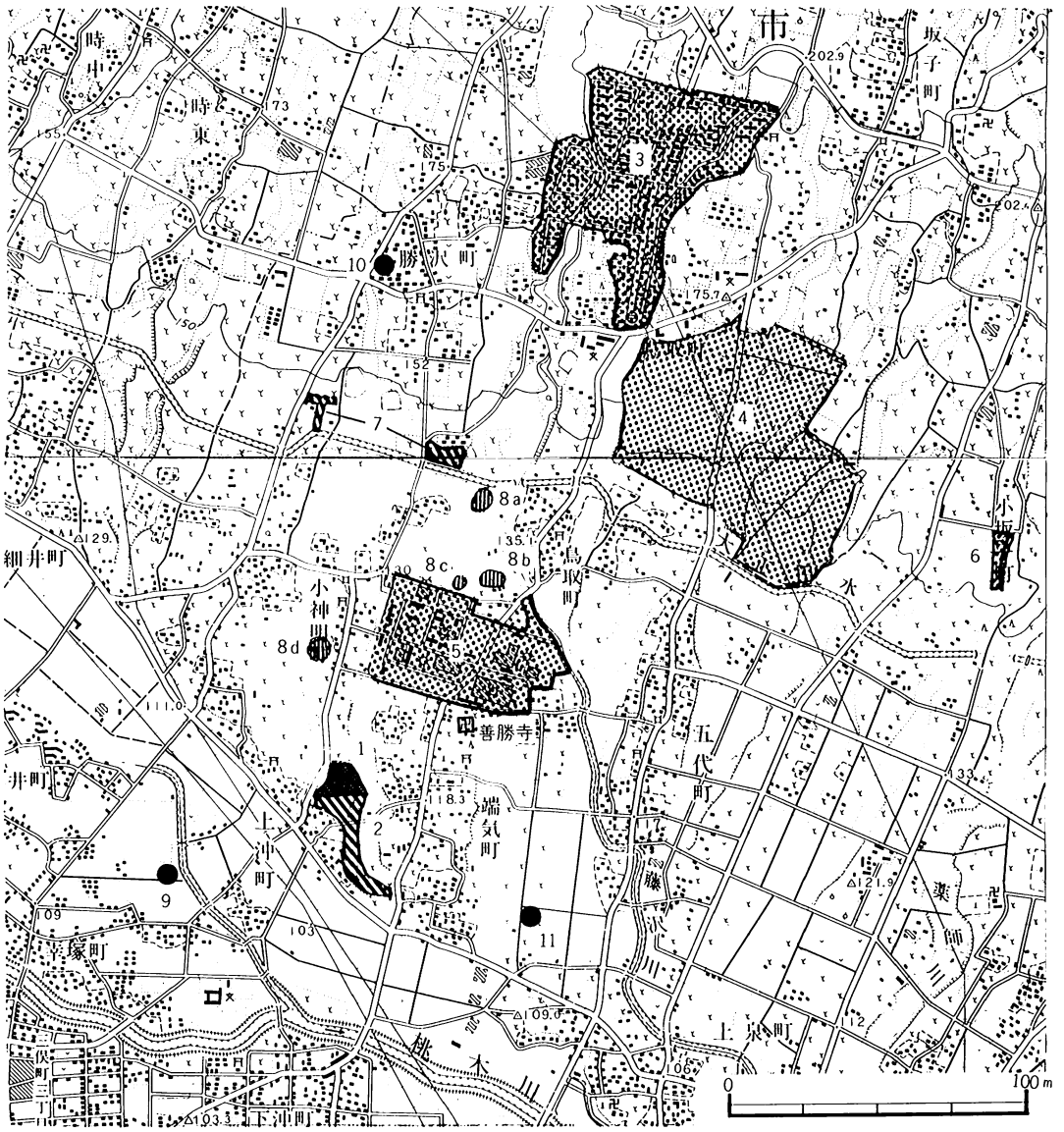
本年度の調査地をもう少し詳しく眺めると、ここは、東120mに南流する通称「西川」なる小河川と、西50mに南流する通称「ヤツ川」なる小河川に狭まれた舌状台地に占地し、標高は、116m～119mを測る。北から南東に緩かに伸びるこの台地は、概ね桑園となっており、東の谷は水田が、西の谷は水田と人家が在る。

赤城山南麓のこの付近は、河川の開析による舌状台地が多数形成され、古くから人間生活の格好の場となってきた。「西川」の対岸の台地上で、本遺跡の北東300mの芳賀西部工業団地遺跡群では、縄文時代の住居址が７軒、古墳が31基発見されているし、その西200mの大明神遺跡では、古墳時代の住居址２軒が検出された。さらに芳賀東部工業団地遺跡群では、古くは縄文時代の住居址をはじめ、古墳時代の住居址、奈良・平安時代の大集落、中・近世の遺構等が調査されている。その東の桧峯遺跡では、奈良三彩の小壺が竪穴住居から出土している。芳賀北部団地遺跡群では、縄文時代の住居址、奈良・平安時代の住居址が多数検出され、戦国期の城跡も調査されている。小神明遺跡群Ｉでは、縄文・奈良・平安の住居址、中世の環濠が検出され、本年度の調査では、縄文・弥生・古墳時代の住居址、古墳５基、中世の環濠等が検出された。

このように、端気遺跡群の周辺一帯は、まさに遺跡の豊庫たる感があり、縄文時代から現代に

至るまで、連綿と続く人間生活の大事な舞台となっていたのである。

最後に前年度の端気遺跡群調査結果にふれてみると、縄文時代の住居址が1軒、弥生時代の方形周溝墓が2基、古墳時代の住居址が2軒、中世の環濠が1条、石敷遺構が3基検出された。

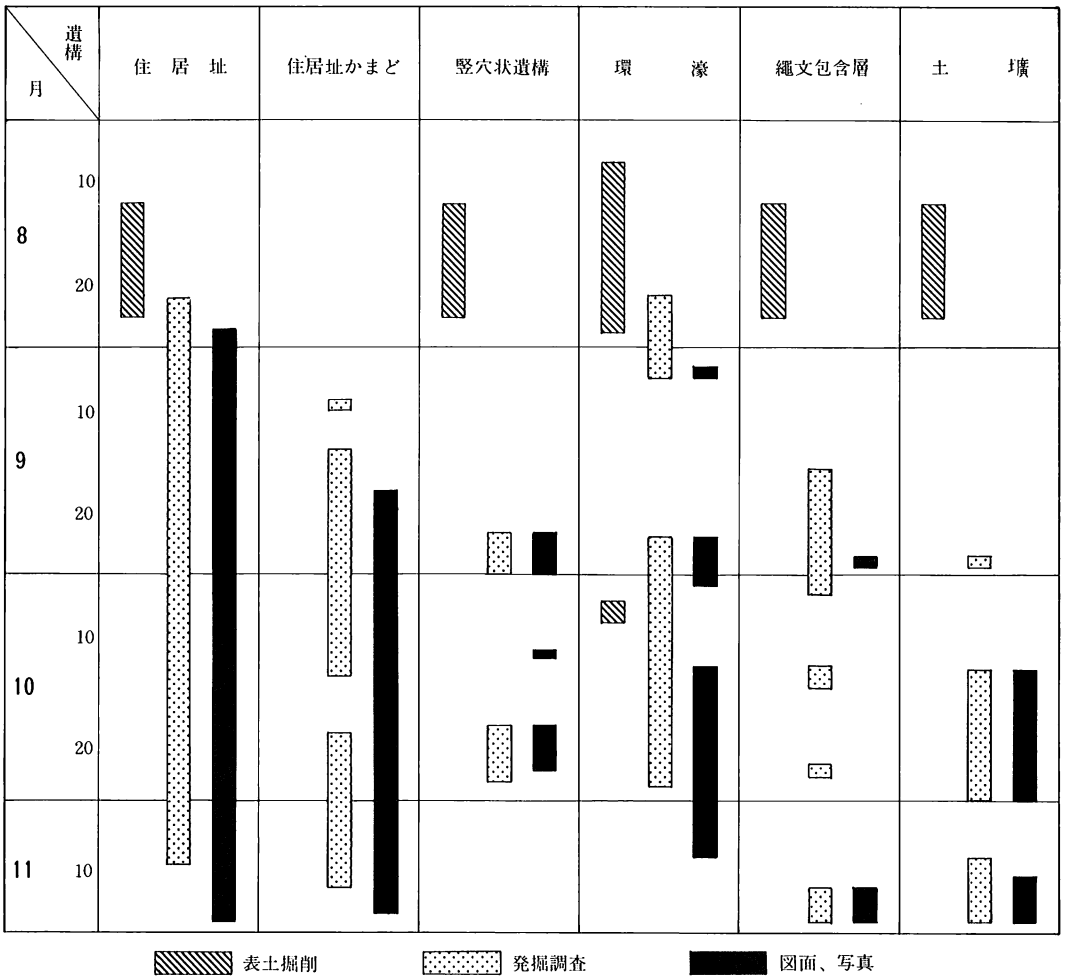


第1図　端気遺跡群と周辺遺跡

1.端気遺跡群 II	6.桧峯遺跡	c 倉本遺跡
2.端気遺跡群 I	7.小神明遺跡群 I	d 大明神遺跡
3.芳賀北部団地遺跡群	8.小神明遺跡群 II	9.西新井遺跡
4.芳賀東部工業団地遺跡群	a 九料遺跡	10.オブ塚古墳
5.芳賀西部工業団地遺跡群	b 西田遺跡	11.大日塚古墳

III　発掘調査の経過

端気遺跡群IIの調査は、昭和58年８月６日に着手され、同年11月15日まで実施された。調査対象地区は、土地改良の際50cmほどカットされる台地上の桑園で、そのなかには数か所墓地が点在していた。まず全面の抜根作業を行い、その後重機によって幅５mのトレンチを東西に７本入れ遺構の確認作業に入った。遺構がトレンチ外に延びれば拡張することとし、たとえば環濠は墓地を除き全掘し、縄文包含層もできる限り拡張した。重機による掘削後４mピッチで杭を打ち、北から南へA・Bとローマ字で、西から東へ１・２と算用数字でグリッドを設定した。グリッド名に平仮名やマイナスがでて煩わしくなったのは、当初の見通しが甘かったためと、拡張により面積が多くなったためである。その後の調査は、下記のように行われた。調査終了後、昭和59年の１月初旬から３月末まで整理作業が行われた。



第２図　発掘の経過

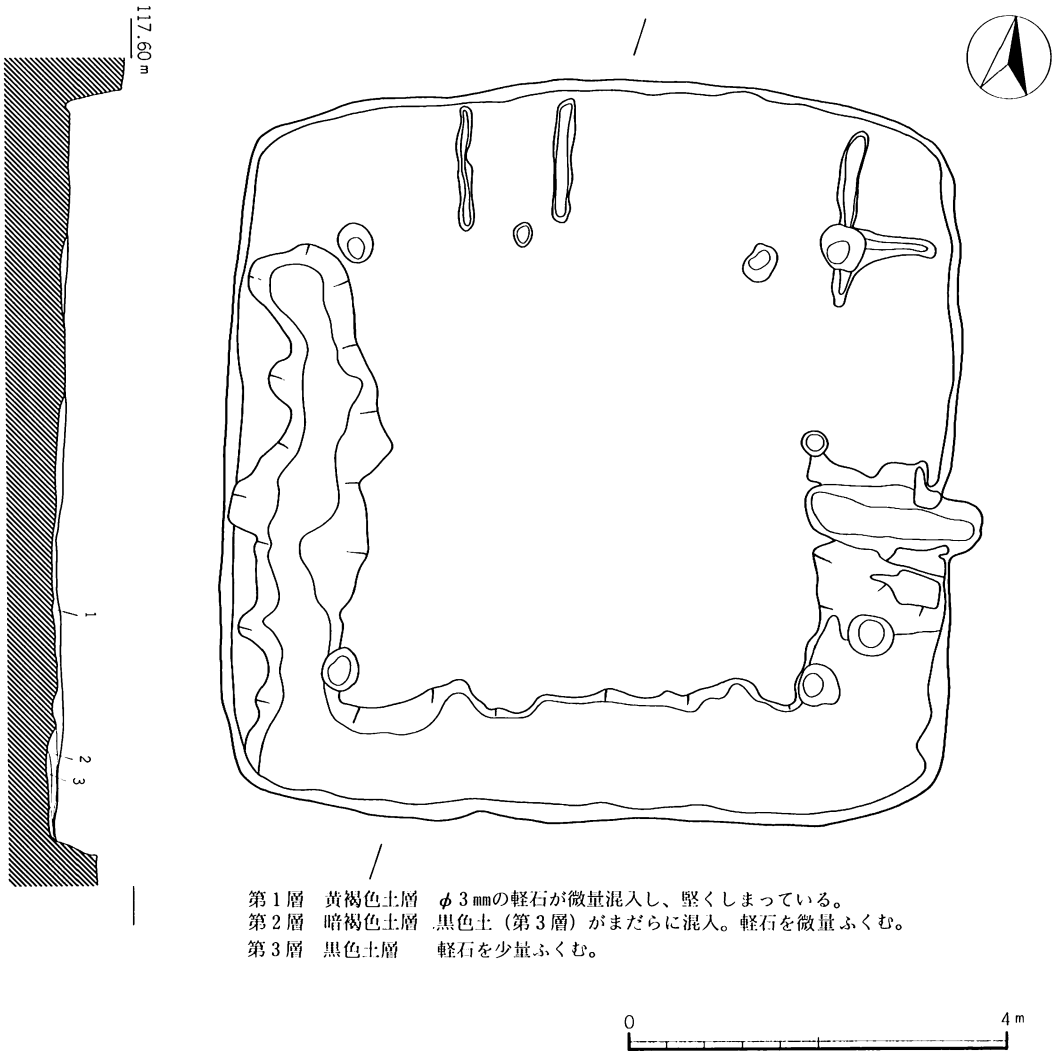
Ⅳ　遺構と遺物

1　住　　居　　址

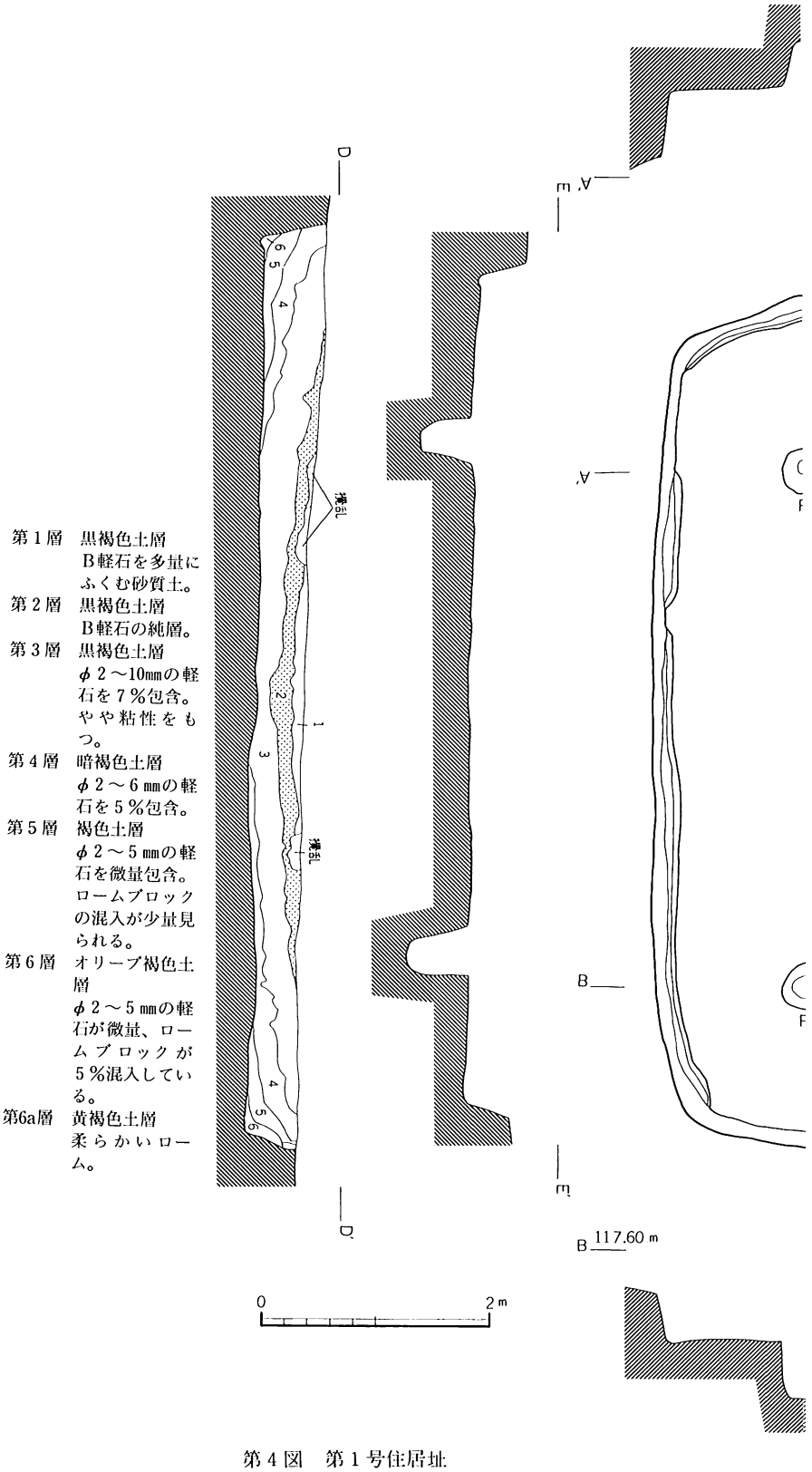
第１号住居址

遺構（第３・４図、図版２）

調査区南西のＳ・Ｔ・Ｕ―-5・-4・-3グリッドに所在する大形住居址である。東西は7.7m、南北は7.8mを測り、面積は56.9m²と、本遺跡における最大値を示す。平面形は、各辺が若干丸味をおびた隅丸方形で、主軸方位はＮ―82°―Ｅを指す。ローム地山を掘り込んで構築されており、確認面からの壁高は平均46cm、最大値は北東コーナー付近で58cm、最小値は南壁中央付近で33cmを

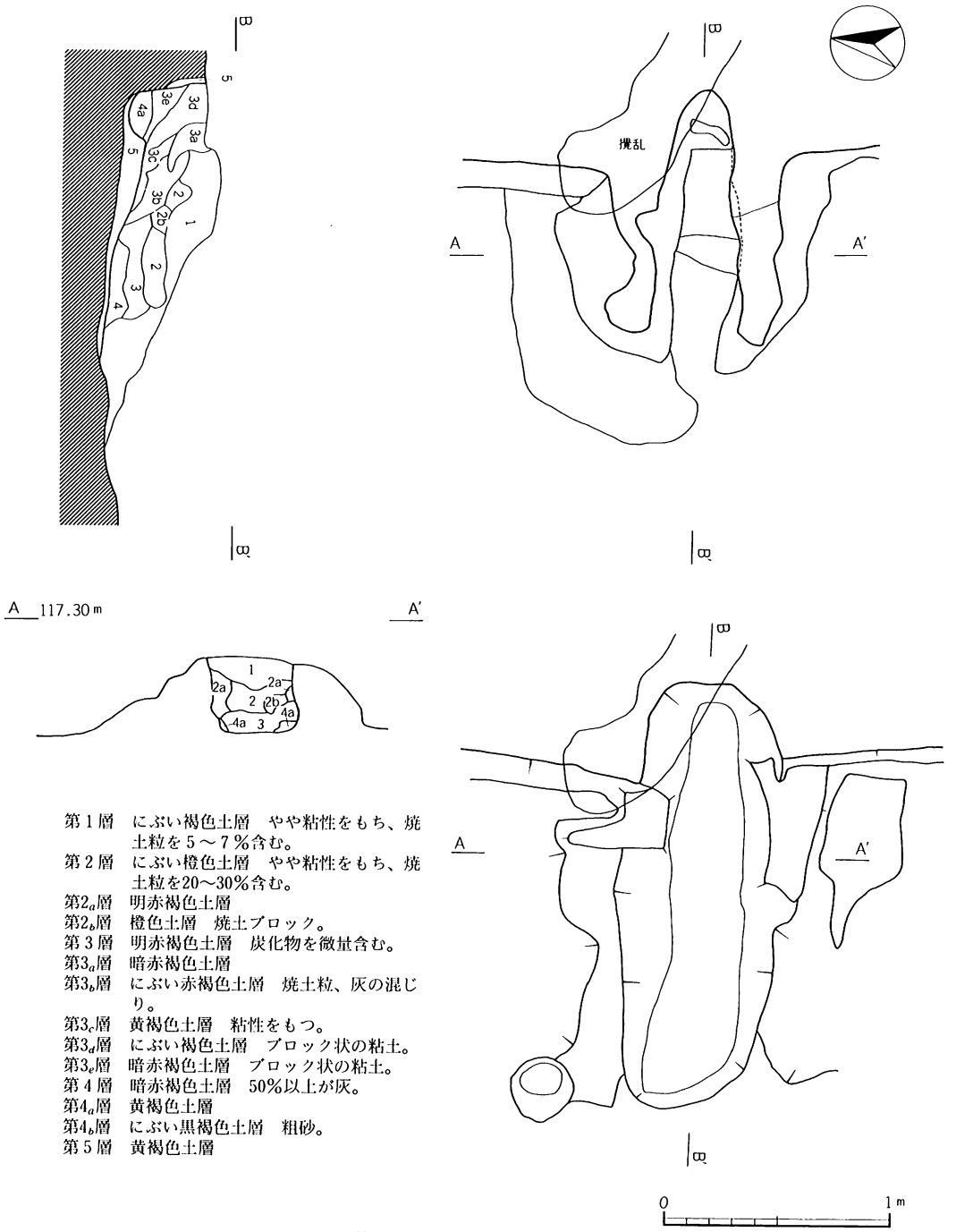


第３図　第１号住居址掘り方


第１層　黒褐色土層
Ｂ軽石を多量にふくむ砂質土。
第２層　黒褐色土層
Ｂ軽石の純層。
第３層　黒褐色土層
φ２～10㎜の軽石を７％包含。やや粘性をもつ。
第４層　暗褐色土層
φ２～６㎜の軽石を５％包含。
第５層　褐色土層
φ２～５㎜の軽石を微量包含。ロームブロックの混入が少量見られる。
第６層　オリーブ褐色土層
φ２～５㎜の軽石が微量、ロームブロックが５％混入している。
第6a層　黄褐色土層
柔らかいローム。
撹乱
撹乱
B 117.60 m
0
2 m

第４図　第１号住居址

A
A
B'
B'
C
C
C
C
D
D
P1
P3
P5
P6
P7
P8
1
6
7
22
27
28
35
40



第1層　にぶい褐色土層　やや粘性をもち、焼土粒を5～7％含む。
第2層　にぶい橙色土層　やや粘性をもち、焼土粒を20～30％含む。
第2_a層　明赤褐色土層
第2_b層　橙色土層　焼土ブロック。
第3層　明赤褐色土層　炭化物を微量含む。
第3_a層　暗赤褐色土層
第3_b層　にぶい赤褐色土層　焼土粒、灰の混じり。
第3_c層　黄褐色土層　粘性をもつ。
第3_d層　にぶい褐色土層　ブロック状の粘土。
第3_e層　暗赤褐色土層　ブロック状の粘土。
第4層　暗赤褐色土層　50％以上が灰。
第4_a層　黄褐色土層
第4_b層　にぶい黒褐色土層　粗砂。
第5層　黄褐色土層

第5図　第1号住居址カマド

測る。覆土は6層に分けられるが、2層目には浅間B軽石が10～20cmの厚さで堆積していた。周溝は幅23cm、深さ5cm程度で、東壁のカマド北側を除いてほぼ施工されている。床面はローム層を掘り込んで形成された堅緻な黄褐色土で、住居址北半分に凹凸部が目につく。北壁際と南壁際の比高は10～15cmあり、床面が北から南に緩慢な傾斜をもつことがわかる。このほかに、住居址北側において、間仕切溝状の遺構が検出された。北壁の南に周溝に繋がる2本の溝が走り、それに平行する溝が P_4 を南北に通り、さらに P_4 から東に一本延びている。これらの溝は幅15～20cm、深さ10cm程度である。また、南壁中央付近の床面に、比高5cm程度の高まりが検出されている。これは、いわゆる入口施設の高まりを思わせるが、ピット等は検出されなかった。なお、本住居址は、北壁に近い比較的高い箇所においてローム削平面をそのまま床としているが、その他は貼り床を施工している。特に住居址南半分の壁から1.5mの範囲は一段と深く掘り込まれており、下部に軽石を含む黒色土を充填させ、その上に黄褐色土を敷き堅固な面を構築している。ピットは合計8個検出された。P_1～P_4 は径40cm前後、深さ36～56cmで、ほぼ住居址の対角線上に配置されている。これは、主柱穴と考えられる。P_5 は径50cm、深さ50cmと主柱穴の規模とあまり変わらないが、その位置から貯蔵穴と思われる。P_6～P_8 については、支柱穴とも考えられるが、明確にはわからない。

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	39	36	42.5
P_2	42	40	53.0
P_3	46	34	55.5
P_4	45	45	36.0
P_5	50	47	52.0
P_6	27	18	41.8
P_7	42	33	30.0
P_8	29	20	14.5

H－1　ピット計測表

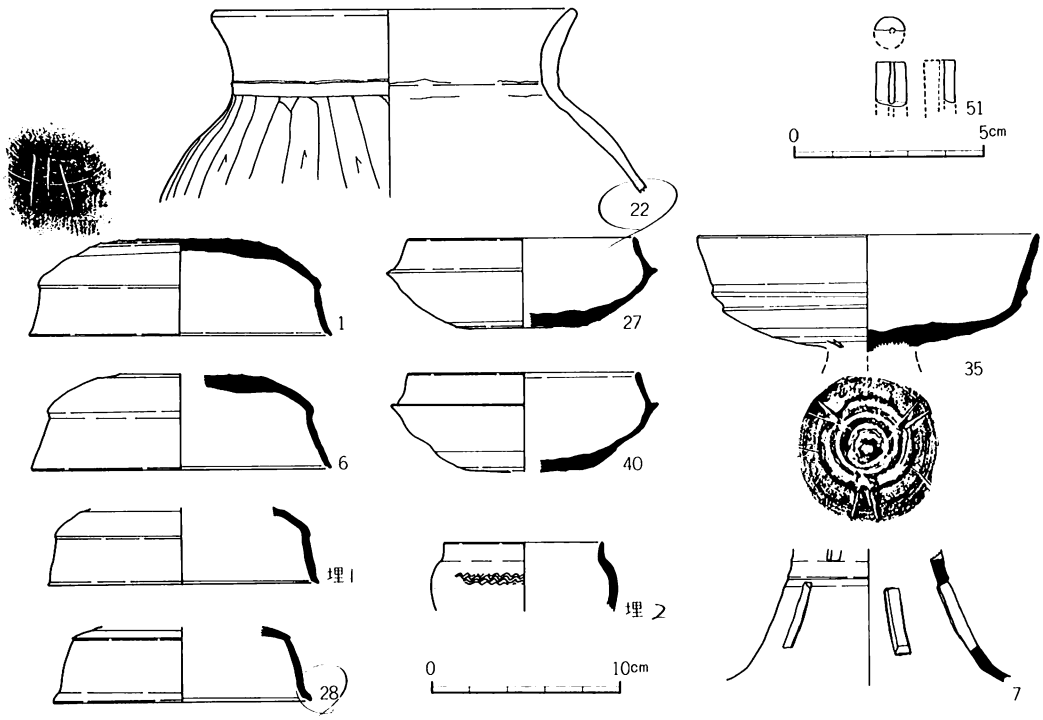
カマド（第5図）

東壁の中央からやや南寄りに位置する。全長125cm、幅120cmを測り、主軸方位はN－88°－Eを指す。左袖上部に若干の攪乱を受けているが、遺存状況は良好である。袖部は地山ローム一部掘り残しの上に粘土をはって構築されており、内壁はU字形を呈する。火床面は床面よりやや下がり、煙道部に至り、急角度で立ち上がる。掘り方は、ローム掘り残しを除き細長い円形に掘り込まれている。

出土遺物（第6図、図版7）

本址の出土遺物は、土師器44点、須恵器17点、管玉1点で、その他若干の埋土遺物がある。この数字が示しているように、本址の特徴として、まず須恵器が多く出土していることが特筆される。遺物の出土位置は、住居址東側と南西隅付近に多い傾向がある。実測可能なものとしては、土師器壺1点、須恵器坏蓋4点、須恵器坏身2点、須恵器短頸壺1点、須恵器高坏2点、管玉1点があげられる。土師器の壺は、口縁が外反し、胴部はかなり張ると予想される。須恵器の蓋は体部がハの字状に外傾し、口縁端部に段が見られる。天井部と体部を分ける稜線は明瞭であるが、突起するまでには至らない。1の天井部には、ヘラ記号が刻まれていた。坏身は、たちあがりがハの字状に内傾し、口縁端部に明瞭な段は見られない。40は、体部にやや屈曲した箇所が見え、それは底部に連続していく。短頸壺は、口縁が直立しており、体部には3～4条の櫛描き波状文

が見られる。35の高坏は脚部がなく、坏部は沈線によって画された稜がある。7は二段すかしの脚部で、長方形のすかし窓が上下5個ずつ配されている。これらの坏は、形状の特徴から「陶邑古窪址群Ⅰ」のMT15からTK10くらいに比定できよう。51は碧玉によってできている。このほかに本址からはいわゆる編み物石が12個出土した。



第6図　第1号住居址出土遺物

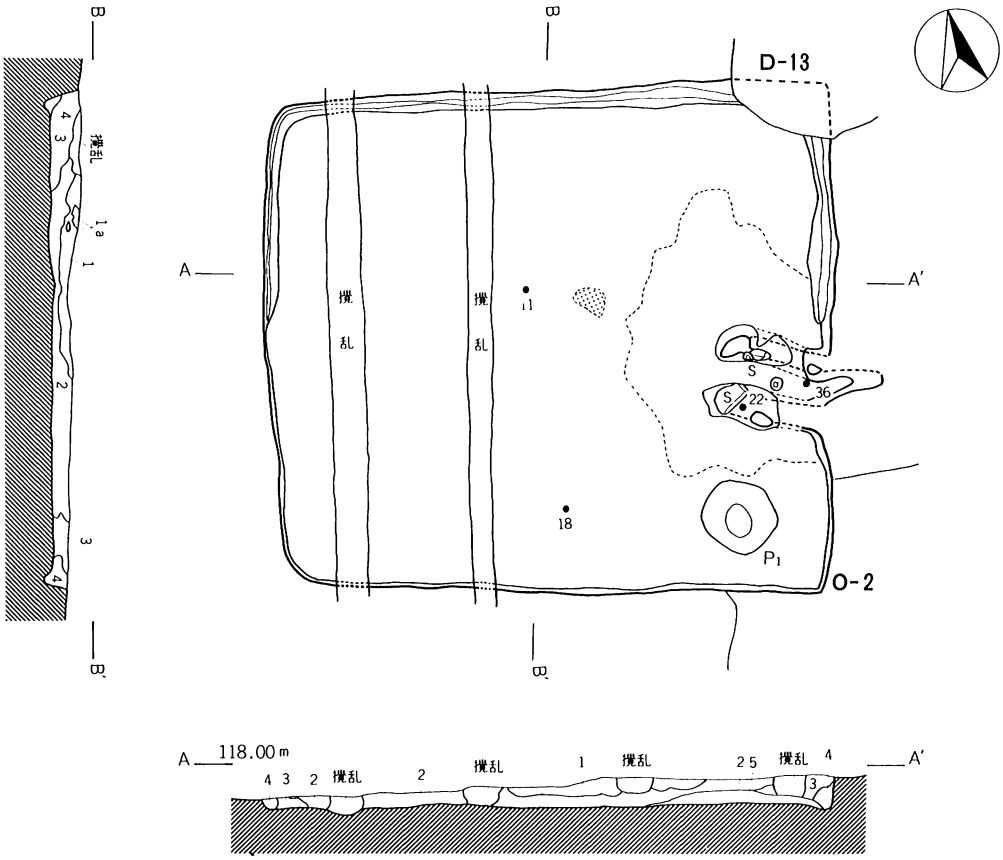
第2号住居址

遺構（第7図、図版2）

調査区北西のF・G—-1・-2グリッドに所在する。ここは、調査区北に集中する住居址群の南端に位置し、5m東にH—5住がある。本住居址は、北東コーナーをD—13に切られ、一方南東コーナーはO—2を切って存在する。平面形は、東にカマドをもち、東西4.5m、南北4mの方形である。面積は17.2m²と比較的狭く、主軸方位はN—101°—Eを指す。確認面からの壁高は平均14cmと浅く、遺構の遺存状況はあまり良くない。特に西壁に平行する幅20〜30cmの筋状の攪乱が4本入っており、うち2本は床面まで切り込んでいた。周溝は、幅17cm、深さ3cmで、住居の北半分に施工されていた。床面はロームを掘り込んで構築されており、10〜15cmの厚さで貼り床がなされ、堅緻な面に仕上っている。主柱穴はなく、円形の貯蔵穴がカマドの右、住居址東南隅に掘られていた。

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	60	55	64

H—2　ピット計測表



第1層　褐色土層　φ3～5㎜の軽石を7％包含する細砂。
第1a層　明黄褐色土層　φ2～3㎜の軽石を微量包含するブロック状の細砂。
第2層　暗褐色土層　φ2～5㎜の軽石を10％包含する細砂。
第3層　黒褐色土層　φ2～5㎜の軽石を10％包含する比較的柔かい細砂。
第4層　暗褐色土層　φ2～5㎜の軽石を10％包含する細砂。ロームブロック少量あり。
第5層　灰褐色土層　φ2～5㎜の軽石、ロームブロックを微量包含する粘質土。

0　2m

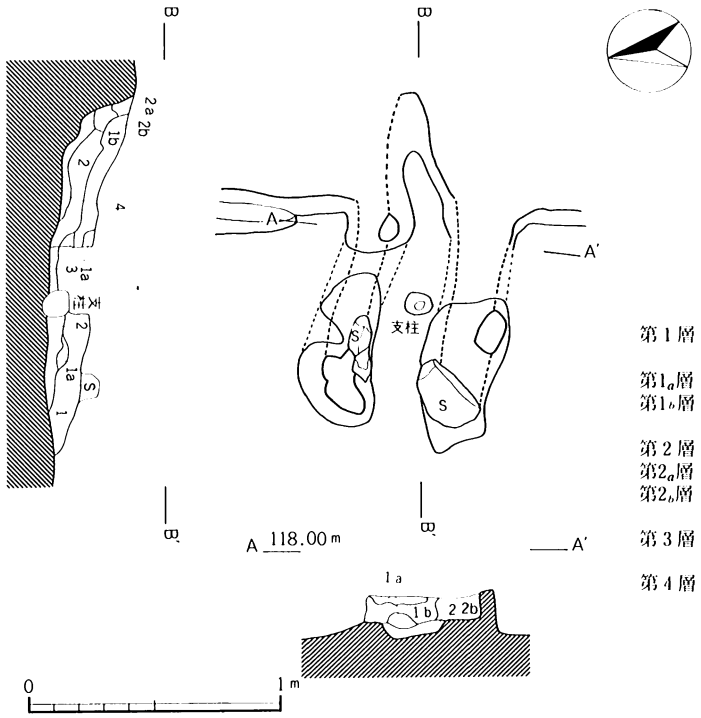
第7図　第2号住居址

カマド（第8図）

東壁の中央よりやや南寄りに位置し、全長140cm、幅80cm、主軸方位N－100°－Eを測る。攪乱がひどく、遺存状況は悪い。袖部は、C軽石を含む暗褐色土を下部に敷き、その上に粘土を張って構築している。火床面は床面とほぼ同じ高さで、煙道部のたちあがりは75°であった。安山岩質の円礫が、支柱として用いられている。

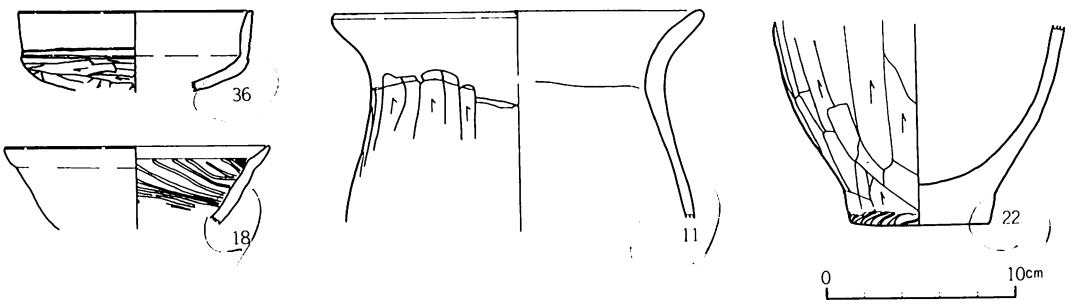
出土遺物（第9図、図版7）

土師器35点と、いわゆる編み物石2個が出土した。実測可能なものは、甕2点、坏2点である甕は、くの字状口縁の11と、底部がやや突出する22で、坏は、内斜口縁を有するものと、口縁がほぼ直立するものである。なお、流れ込みで頁岩製の分銅形石斧が出土した。



第1層　にぶい黄橙色土層　粘性をもつ細砂で、微量の焼土と灰が混入している。
第1$_a$層　橙色土層　純焼土。
第1$_b$層　橙色土層　焼土が主体であるが、φ2㎜の粗砂が20%混入している。
第2層　黄灰色土層　焼土と灰層。
第2$_a$層　にぶい黄褐色土層　焼土が50%。
第2$_b$層　灰黄褐色土層　焼土5%と、φ2㎜の粗砂が7%混入している。
第3層　橙色土層　焼土が主体であるが、φ2㎜の粗砂、灰が混入している。
第4層　灰黄褐色土層　灰が40%、焼土が微量混入している。

第8図　第2号住居址カマド

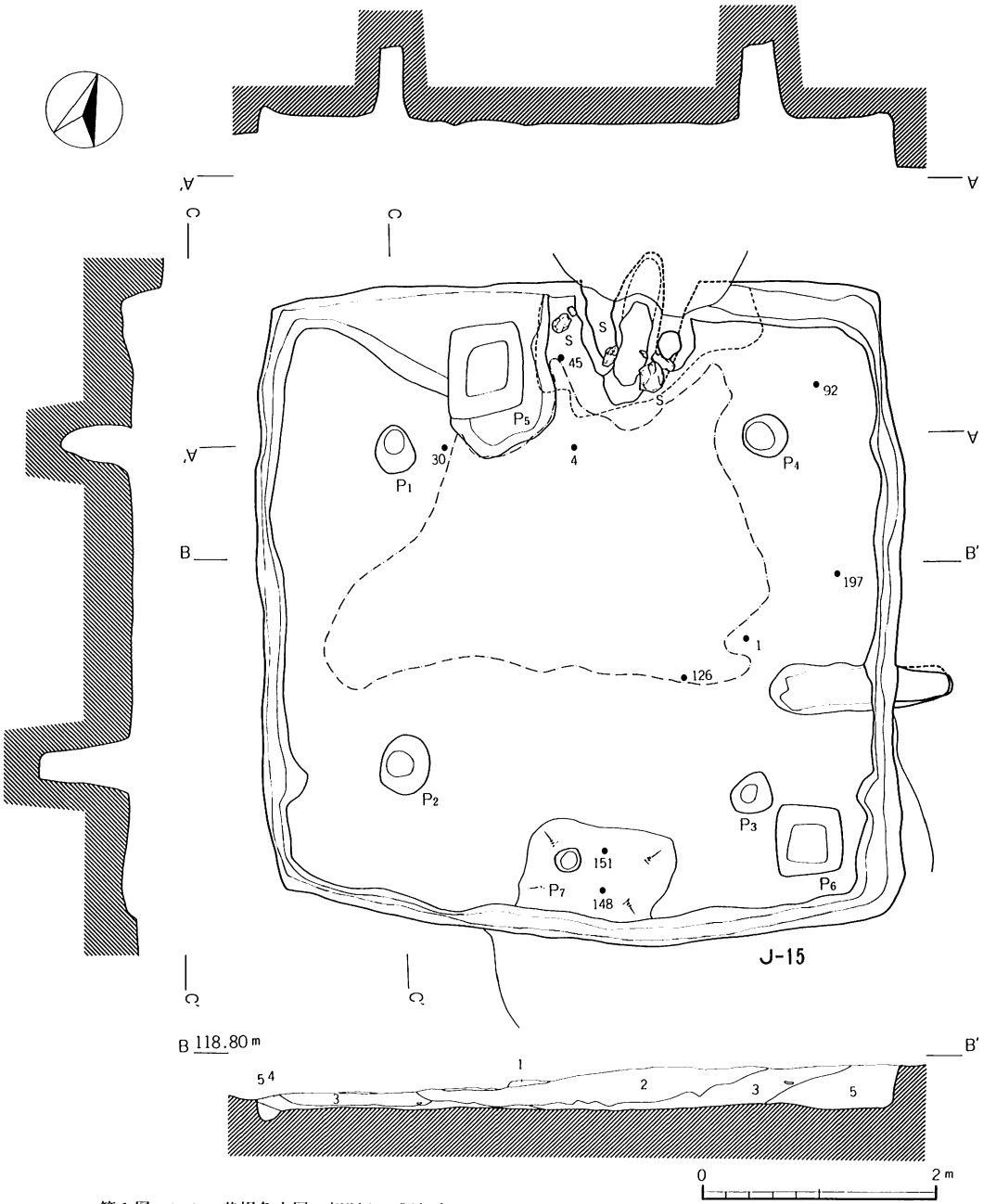


第9図　第2号住居址出土遺物

第3号住居址

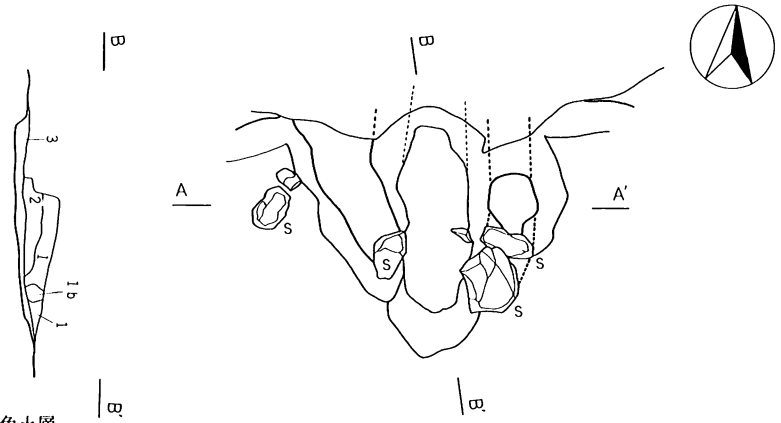
遺構（等10・13図、図版2）

調査区の北、ん・A・B—-1・0・1グリッドに所在し、縄文時代の住居を切って構築されている。東西5.5m、南北5.7m、面積29m²を測り、主軸方位はN—21°—Wを指す。他の三辺に比し西辺がやや短いが、平面形は比較的整った正方形を呈す。カマドは北壁の中央に設置されているが、それ以前に使用されたカマドの痕跡が東壁において検出された。確認面からの壁高は、平均26cmである。壁はJ—15との重複部分を除いてローム壁で、直線的に立ち上がる。周溝は幅26cm、深さ5cm程で、全周しており、北カマド付近では大きく拡がっている。床面はほぼ平坦な面を呈

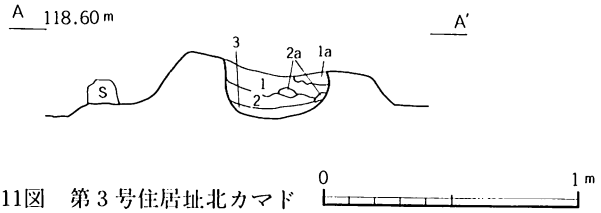


第１層　にぶい黄褐色土層　軽石を３％包含し、ややしまりをもつ細砂。
第２層　黒褐色土層　軽石を７％、ロームブロックを５％包含し、ややしまっている細砂。
第３層　褐色土層　軽石を１％包含する柔らかな微砂。
第４層　にぶい黄褐色土層　ロームブロックを10％包含する微砂。
第５層　にぶい黄褐色土層　軽石を10％包含し、ややしまりを有する微砂。焼土がわずかに混入
第６層　暗灰黄色土層　軽石を１％、ロームブロックを微量包含する、やや柔らかい細砂。

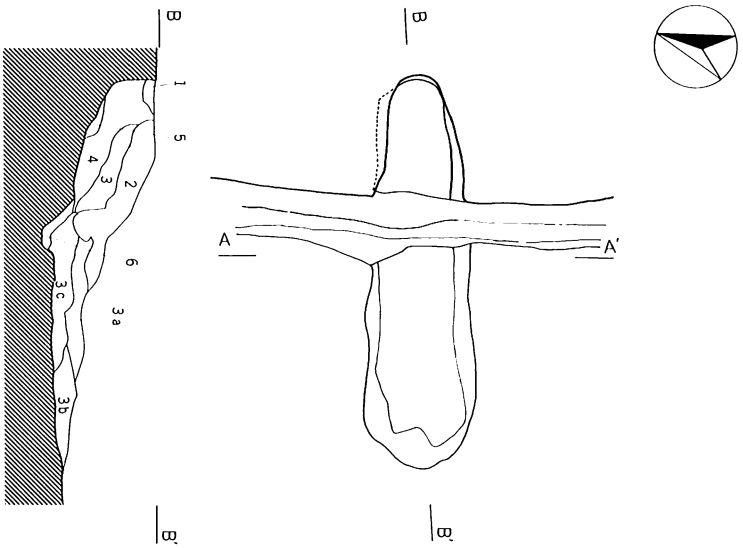
第10図　第３号住居址



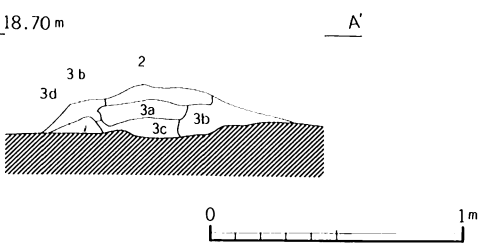
第１層　にぶい黄褐色土層
　　焼土ブロックが多い。
第1$_a$層　暗褐色土層　灰。
第1$_b$層　黒色土層
第２層　褐灰色土層　焼土ブロック10%、炭化物を微量含む。
第2$_a$層　橙色土層　焼土。
第３層　黒褐色土層



第11図　第３号住居址北カマド



第１層　橙色土層　焼土。
第２層　明赤褐色土層。焼土ブロックを多く混入
第３層　褐色土層
第3$_a$層　褐色土層
第3$_b$層　黄褐色土層
第3$_c$層　オリーブ褐色土層
第3$_d$層　明赤褐色土層
第４層　黒褐色土層
第５層　黄褐色土層
第６層　にぶい黄色土層



第12図　第３号住居址東カマド

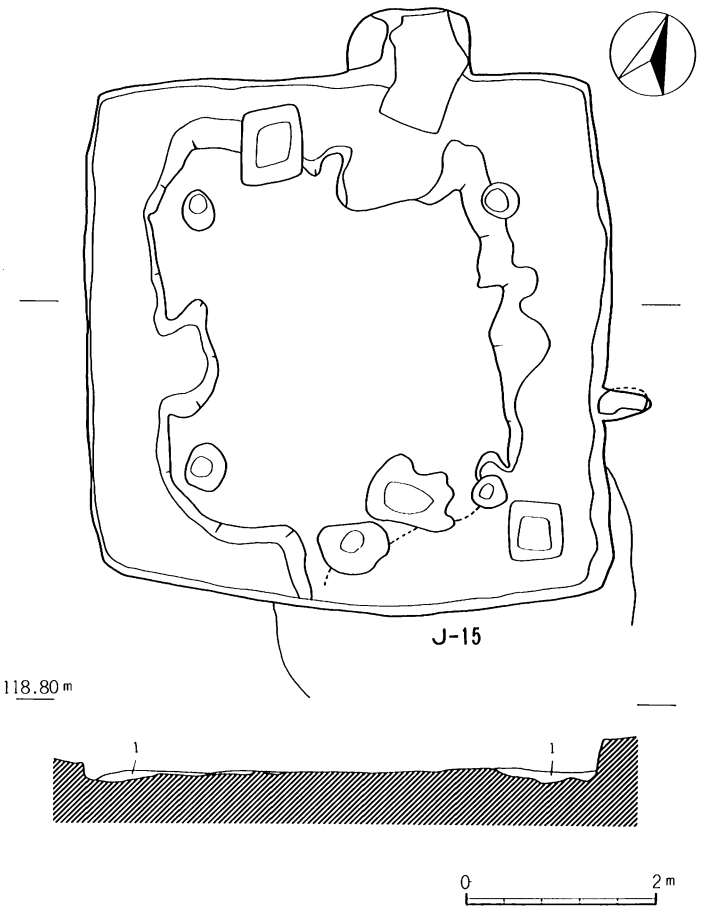
するが、南壁付近にやや高まった箇所が検出された。貼り床は四壁に近い部分で施工されているが、住居中央はローム削平面をそのまま床にしており堅固である。ピットは合計7個検出された。P_1～P_4 は対角線上に配置された主柱穴で、P_5・P_6 は貯蔵穴である。P_6 は貼り床下から検出されていることから、北カマド使用時には埋め戻されたと考えられる。P_7 はいわゆる入口施設に伴なうものと考えられる。

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	42	34	60
P_2	50	32	73
P_3	35	33	74
P_4	80	68	62
P_5	62	56	66
P_6	80	68	74
P_7	22	22	7

H－3　ピット計測表

カマド（第11・12図）

北壁中央よりやや東寄りに北カマドが、東壁中央よりやや南寄りに東カマドが存在する。北カマドは攪乱がひどく、遺存状態は悪い。主軸方位はN－6°－Wを指し、幅は110cm、全長は不明である。袖部は白色粘土によって構築され、この粘土中には最大長2cmの切り藁がすさとして用いられていた。東カマドは焼土が覆土となり、煙道部がよく焼けているが、袖はすでになかった。これは住居址廃絶時において東カマドは廃棄され、北カマドが使用されていたことを物語っている。

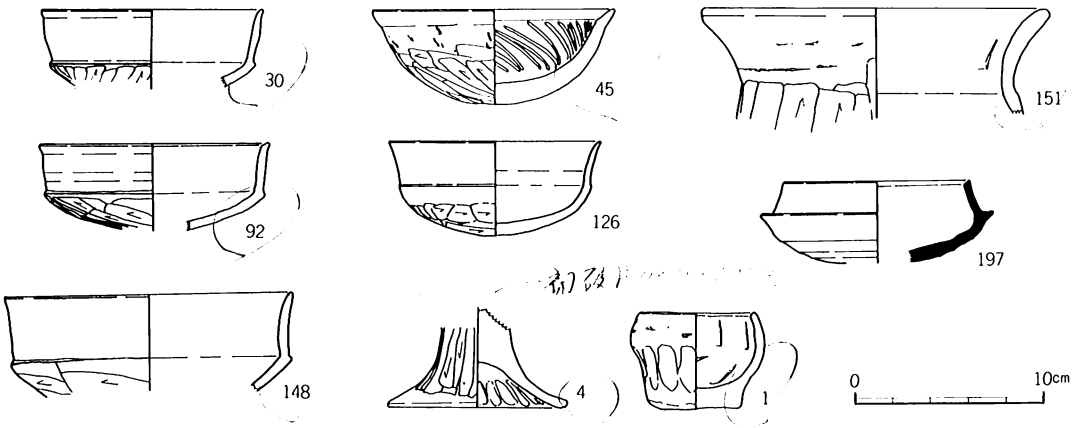


第1層　褐色土層　多量のロームブロックと少量の軽石を包含する細砂。

第13図　第3号住居址掘り方

出土遺物（第14図、図版7）

本址の出土遺物は、土師器208点、須恵器4点と若干の埋土遺物である。実測可能なものとして、甕、坏、高坏、手捏ね、須恵器の坏身がある。坏は、いわゆる内斜口縁を有するものが1点で、他の4点は外稜を有するものである。手捏ねは、外面に指頭の圧痕が明瞭で、内面にヘラナデが見える。須恵器は、「陶邑古窯址群Ⅰ」による編年のMT－15くらいに位置づけられよう。



第14図　第３号住居址出土遺物

第４号住居址

遺構（第15・16図、図版２）

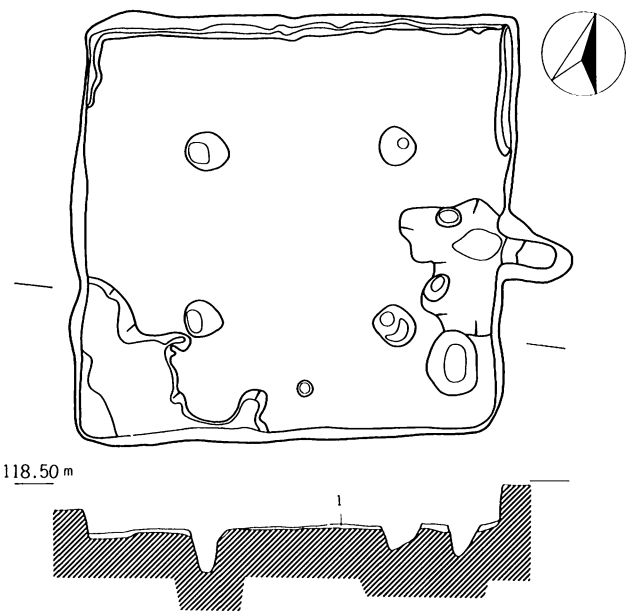
調査区北の住居密集地のほぼ中央、C・D－０・１グリッドに所在する。平面形は、東西4.8m、南北4.6mの正方形で、面積は20m²を測る。主軸方位はN－76°－Eを指す。ローム地山を掘り込んで構築されており、確認面からの壁高は平均で35cm、壁のたち上がりはシャープである。周溝は、東南隅付近を除き、深さ３cm、幅20cmの規模で施工されている。床面は、ロームと軽石を含む黄褐色土で貼り床され、堅緻な面に仕上っている。概ね平坦で、南壁中央付近に若干の高まりがある。ピットは合計６個検出された。P_1～P_4は、対角線上に配置された主柱穴、P_5は楕円形の貯蔵穴、P_6は入口施設に伴なうピットと考えられる。

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	46	41	61
P_2	42	41	46
P_3	46	40	68
P_4	39	35	60
P_5	69	45	63
P_6	16	16	14

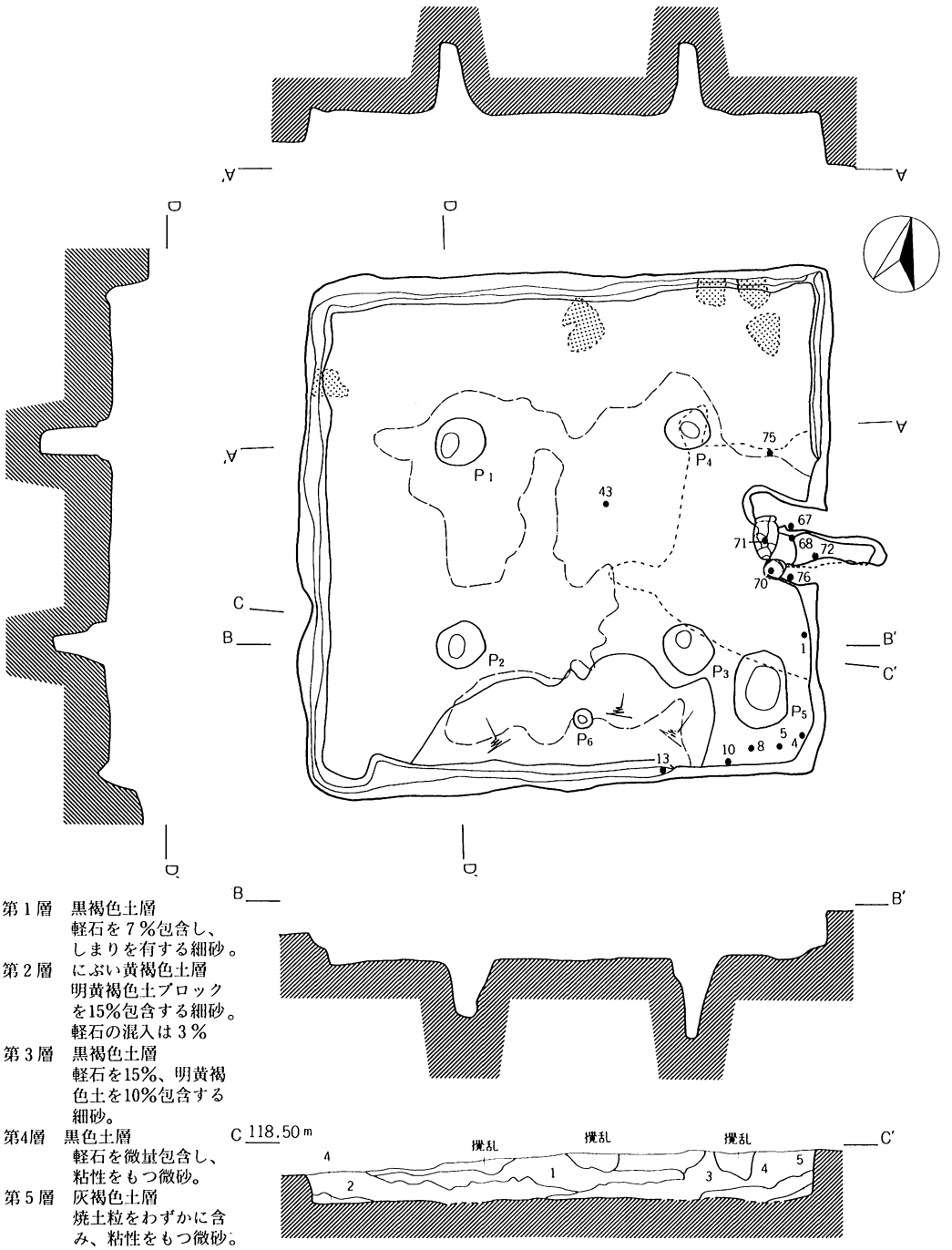
H－４　ピット計測表

カマド（第17図、図版３）

東壁の中央に位置し、全長125cm、幅87cmを測り、主軸方位N－76°－Eを指す。袖部は、軽石を包含する暗褐色土を基底に敷き、

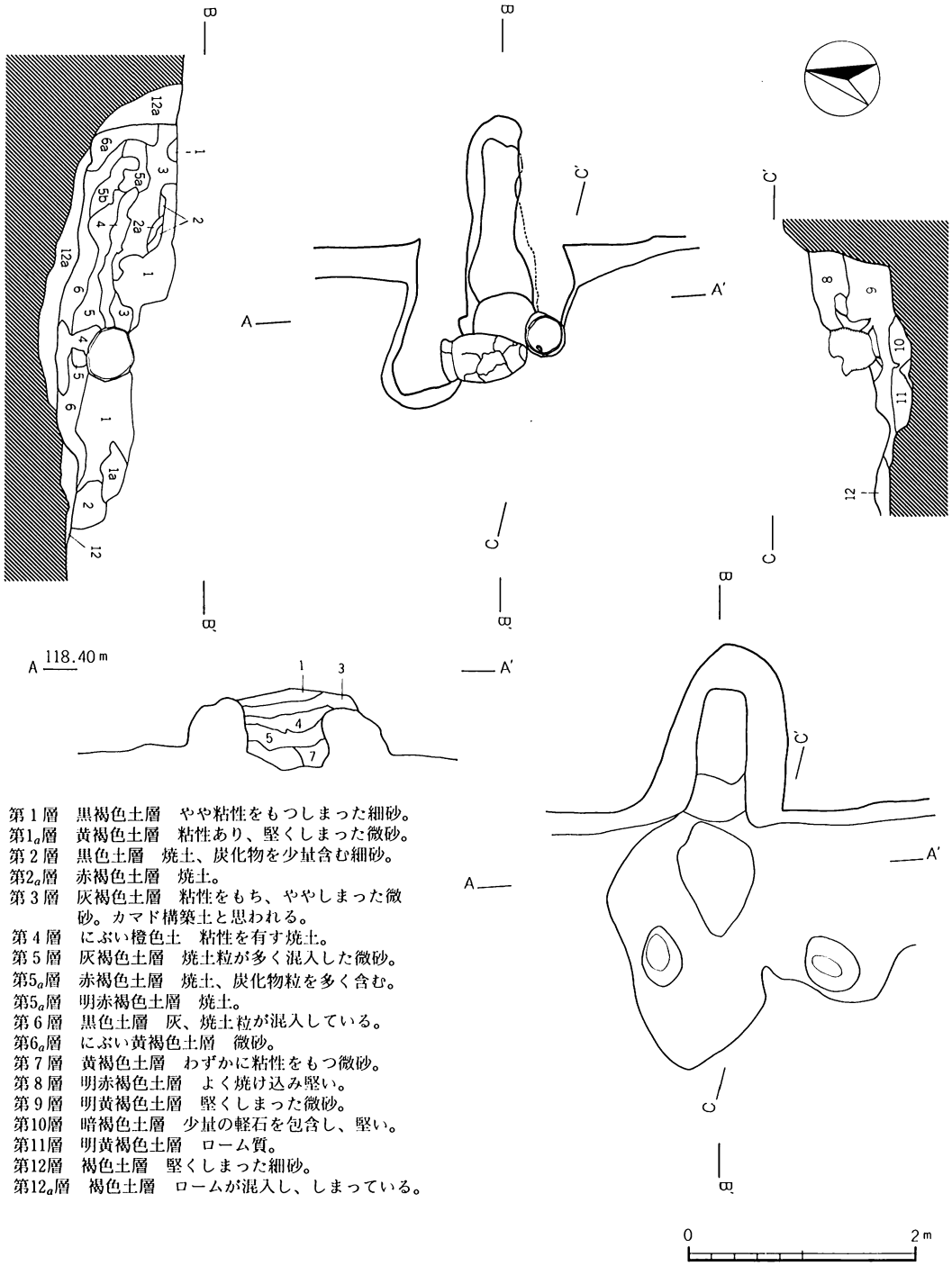


第15図　第４号住居址掘り方



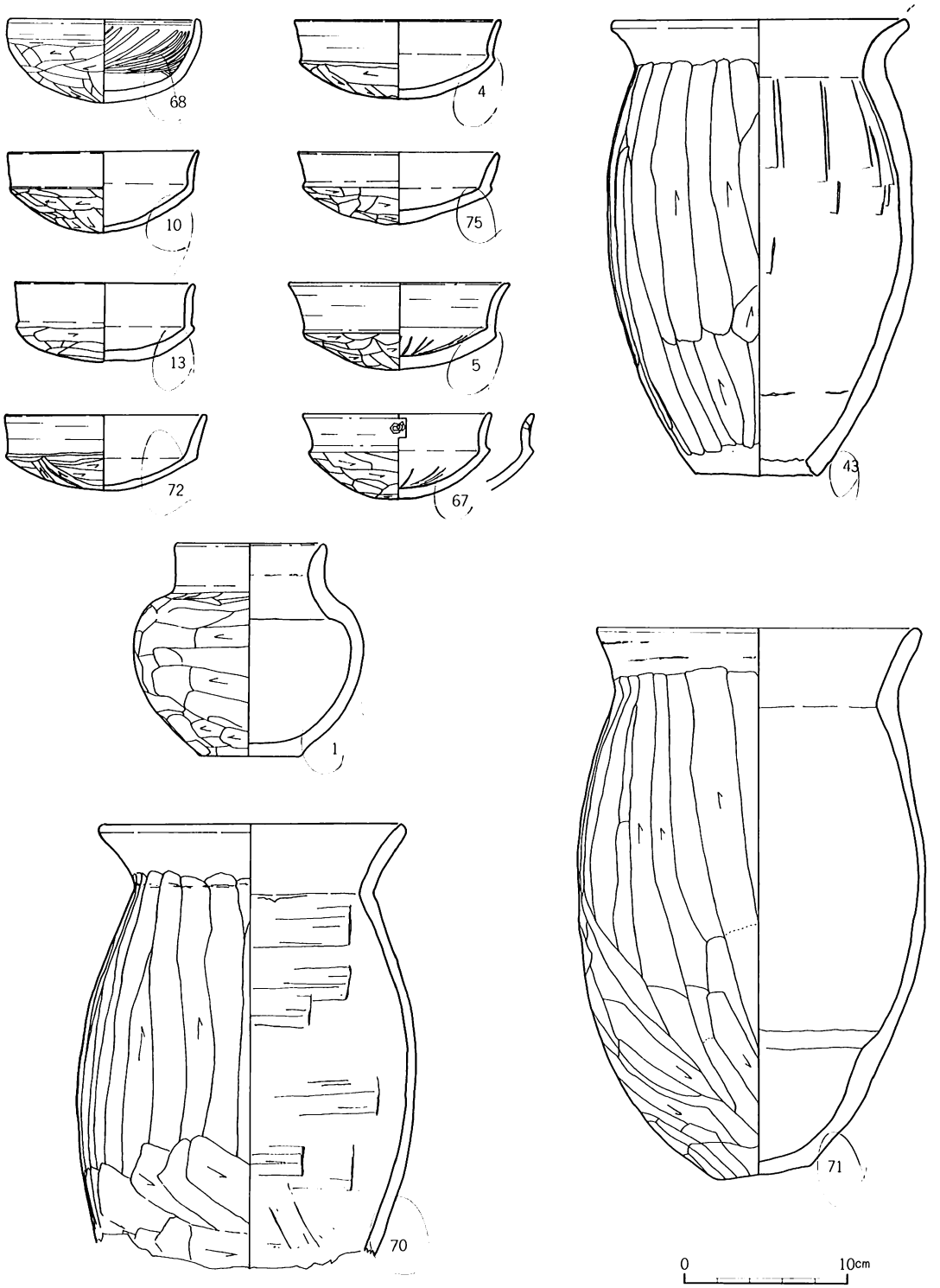
第１層　黒褐色土層
　　軽石を７％包含し、
　　しまりを有する細砂。
第２層　にぶい黄褐色土層
　　明黄褐色土ブロック
　　を15％包含する細砂。
　　軽石の混入は３％
第３層　黒褐色土層
　　軽石を15％、明黄褐
　　色土を10％包含する
　　細砂。
第4層　黒色土層
　　軽石を微量包含し、
　　粘性をもつ微砂。
第５層　灰褐色土層
　　焼土粒をわずかに含
　　み、粘性をもつ微砂。

第16図　第４号住居址　　0　2m



第１層　黒褐色土層　やや粘性をもつしまった細砂。
第1$_a$層　黄褐色土層　粘性あり、堅くしまった微砂。
第２層　黒色土層　焼土、炭化物を少量含む細砂。
第2$_a$層　赤褐色土層　焼土。
第３層　灰褐色土層　粘性をもち、ややしまった微砂。カマド構築土と思われる。
第４層　にぶい橙色土　粘性を有す焼土。
第５層　灰褐色土層　焼土粒が多く混入した微砂。
第5$_a$層　赤褐色土層　焼土、炭化物粒を多く含む。
第5$_a$層　明赤褐色土層　焼土。
第６層　黒色土層　灰、焼土粒が混入している。
第6$_a$層　にぶい黄褐色土層　微砂。
第７層　黄褐色土層　わずかに粘性をもつ微砂。
第８層　明赤褐色土層　よく焼け込み堅い。
第９層　明黄褐色土層　堅くしまった微砂。
第10層　暗褐色土層　少量の軽石を包含し、堅い。
第11層　明黄褐色土層　ローム質。
第12層　褐色土層　堅くしまった細砂。
第12$_a$層　褐色土層　ロームが混入し、しまっている。

第17図　第４号住居址カマド



第18図　第４号住居址出土遺物(A)

第19図　第４号住居址出土遺物(B)

その上に白色粘土を用いて構築されている。右袖には、補強材として逆位の甕が用いられ、また天井部にも甕が使用されている。火床面は床面よりやや底く、煙道部で急角度に立ち上がる。掘り方は、壁外に半楕円状に張り出し、壁内では、付近を10cmほど掘り込んでいる。

出土遺物（第18・19図・図版８）

本址の出土遺物は、土師器73点、須恵器片４点と若干の埋土遺物である。甕は口縁部が外傾し、胴部は長胴化している。８の底には木葉痕がある。43の甑は、甕を転用したもので、孔は何らかの道具を用いて穿たれたらしく、その時の不整形な削り痕が明瞭に残る。壺は小形で、最大径が胴部中央より上にあり、口縁は直立する。坏は、稜をもたずやや内湾ぎみに立ちあがる半球形のもの１点のほか稜を有し、口縁がやや外反傾向にある。このほか所謂編み物石が２個検出された。

第５号住居址

遺構（第20・22図、図版３）

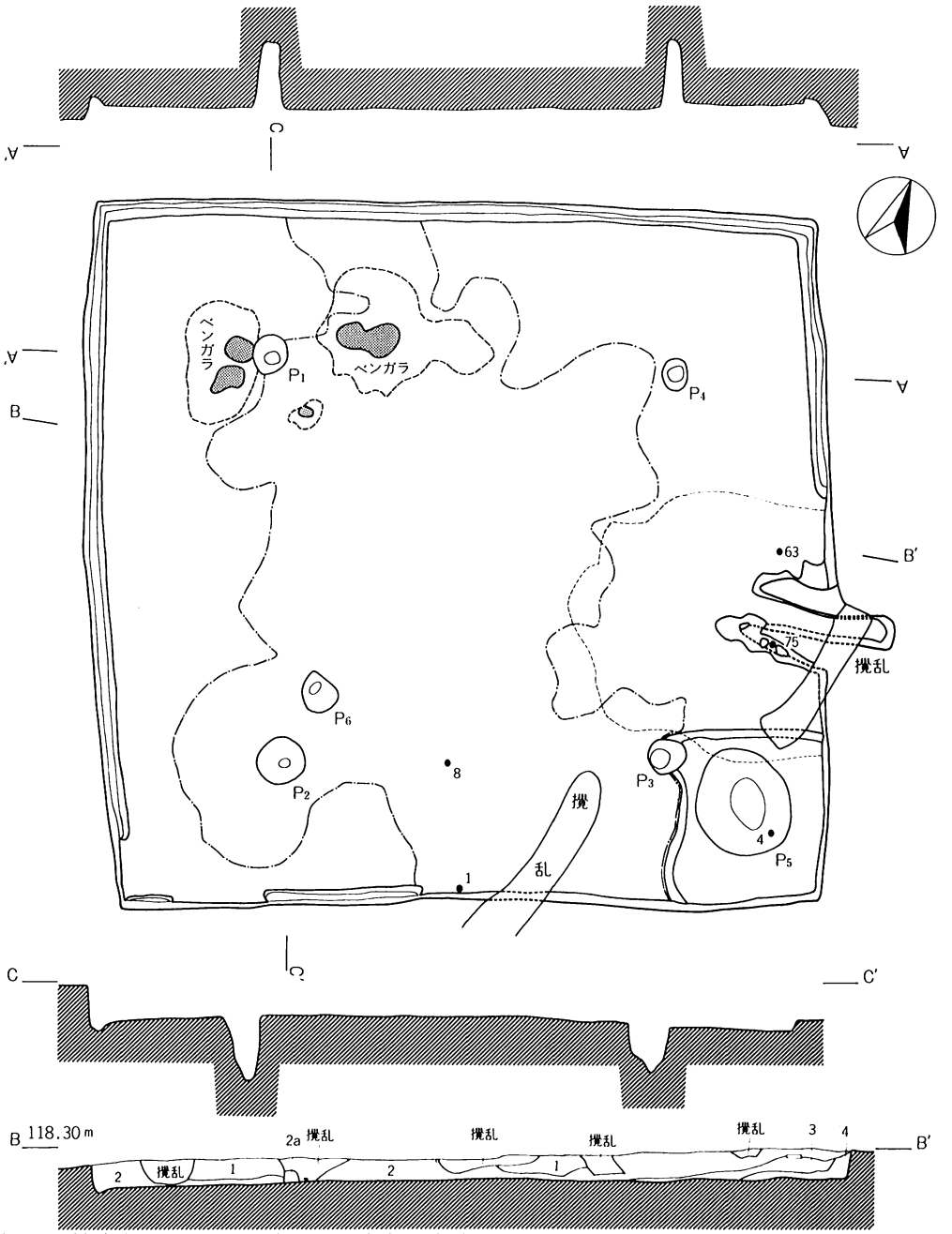
調査区北の住居密集地内に存し、Ｅ・Ｆ・Ｇ－０・１・２グリッドに位置する。プランは比較的大形の整った正方形で、東西6.4m、南北６m、面積36m²を測る。確認面からの壁高は平均15cmと浅く、東壁のカマドと南壁の一部が攪乱により毀損されていた。周溝は南壁、東壁際の一部を除き、幅15cm、深さ５cmの規模でめぐる。床面は、ローム地山を削平後貼り床を施され、水平な堅緻面に仕上っていた。掘り方は、凹凸が顕著で、南壁、西壁から1.5mの範囲では10cmほどの掘り窪みがあった。ピットは合計６個検出された。主柱穴は対角線上に配置された P_1～P_4 で、貯蔵穴はテラス内に深く穿たれた P_5 である。

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	34	30	56
P_2	41	40	40
P_3	32	30	53
P_4	26	22	57
P_5	93	80	96
P_6	34	30	30

Ｈ－５　ピット計測表

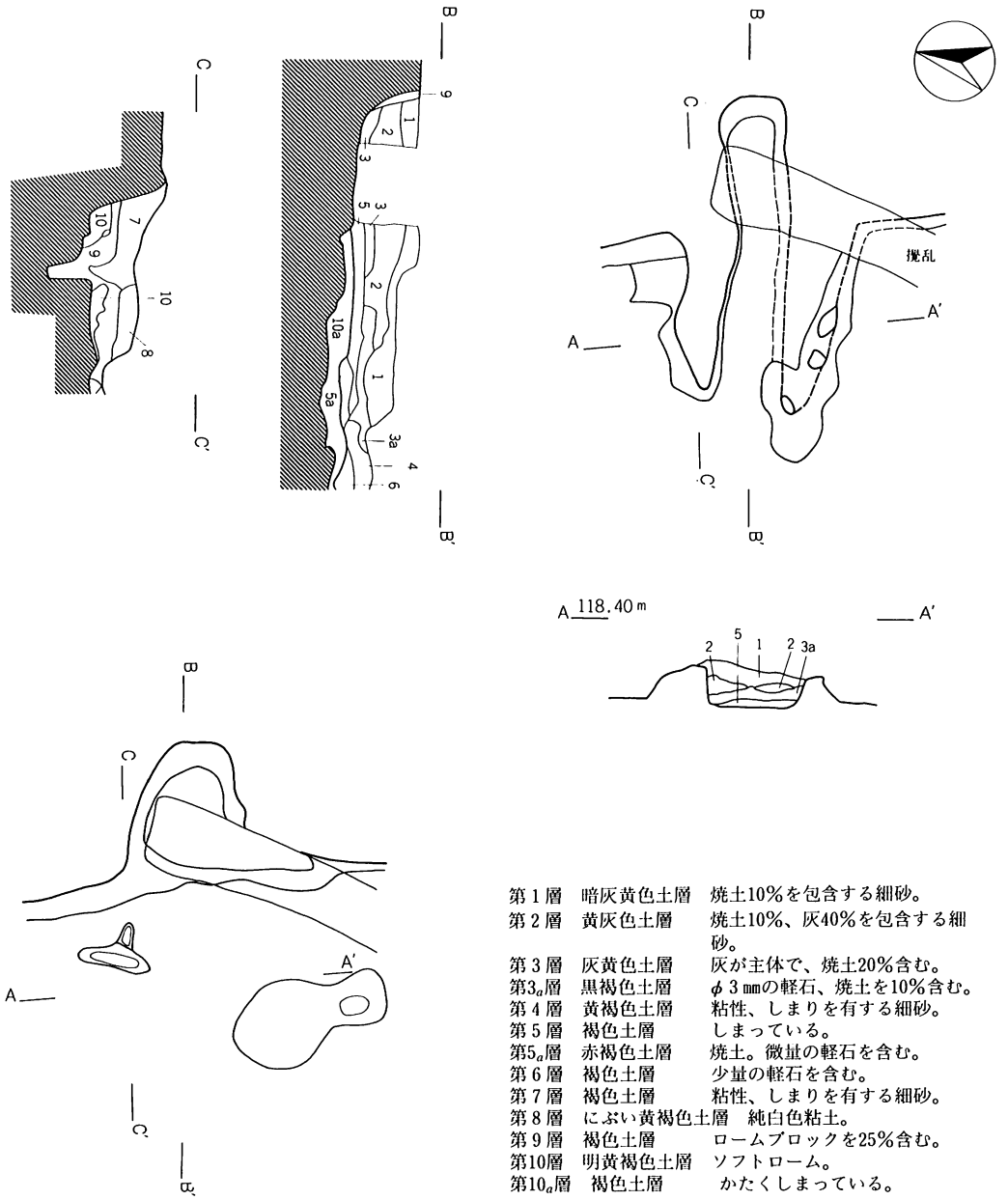
カマド（第21図）

東壁の中央からやや南寄りに位置し、全長148cm、幅92cmで、主軸方位はＮ－74°－Ｅを指す。攪乱により遺存状況はよくない。袖部は白色粘土が主体で構築され、基底にはロームブロッ



第１層　暗褐色土層　φ１～４㎜の軽石を15％包含する細砂。
第２層　褐色土層　φ１～４㎜の軽石を15％、明黄褐色土を微量包含する細砂。
第2_a層　褐色土層　φ１～４㎜の軽石を微量包含し、ややしまりを有する細砂。
第３層　灰褐色土層　φ1～４㎜の軽石、ロームブロックを微量包含する細砂。
第４層　黒褐色土層　φ１～４㎜の軽石を微量、ロームブロックを10％包含する細砂。

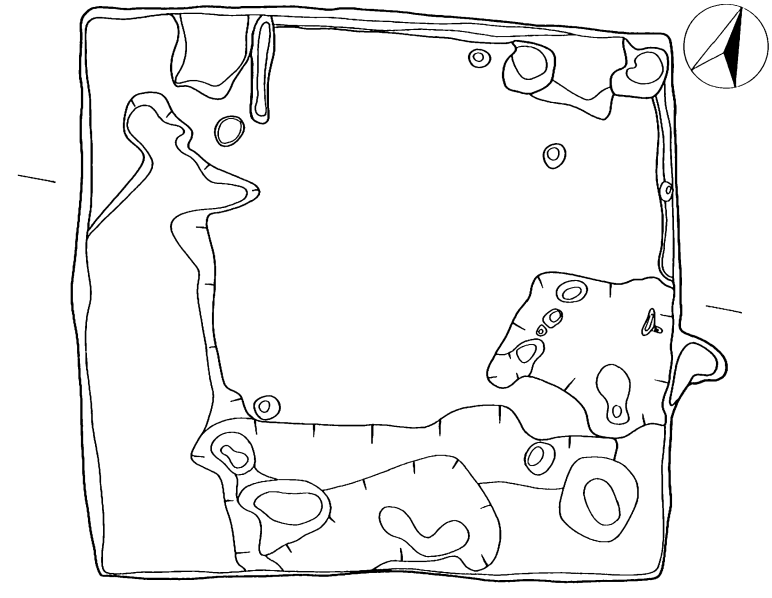
第20図　第５号住居址



第1層　暗灰黄色土層　焼土10%を包含する細砂。
第2層　黄灰色土層　焼土10%、灰40%を包含する細砂。
第3層　灰黄色土層　灰が主体で、焼土20%含む。
第3_a層　黒褐色土層　φ3㎜の軽石、焼土を10%含む。
第4層　黄褐色土層　粘性、しまりを有する細砂。
第5層　褐色土層　しまっている。
第5_a層　赤褐色土層　焼土。微量の軽石を含む。
第6層　褐色土層　少量の軽石を含む。
第7層　褐色土層　粘性、しまりを有する細砂。
第8層　にぶい黄褐色土層　純白色粘土。
第9層　褐色土層　ロームブロックを25%含む。
第10層　明黄褐色土層　ソフトローム。
第10_a層　褐色土層　かたくしまっている。

第21図　第5号住居址カマド

0　1m



第１層　黒褐色土層　ロームブロックと軽石を含む。
第２層　黒褐色土層　成分は１層に近いが、しまりは少ない。
第３層　褐色土層　ロームブロックが多量に混入。

0　2 m

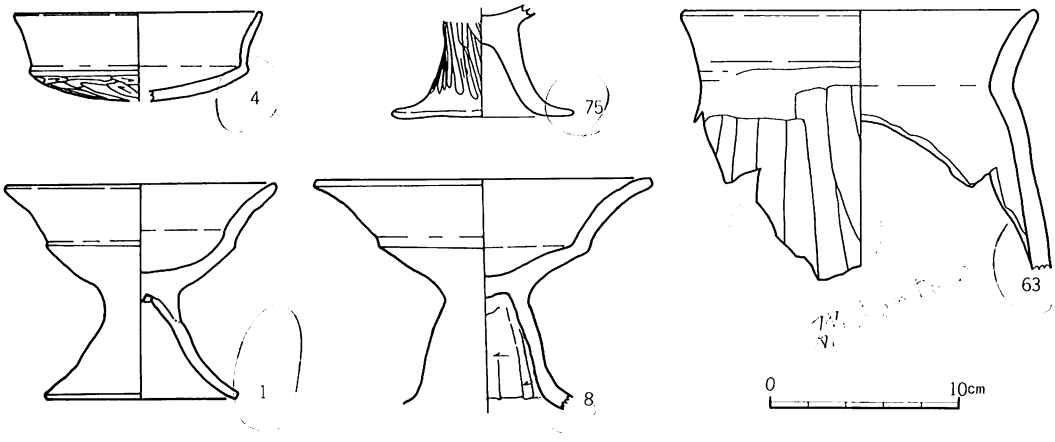
第22図　第５号住居址掘り方

クを含む褐色土が用いられている。火床面は床面とほぼ同じで、煙道部立ちあがりは74°である。

出土遺物

（第23図、図版８）

本址の出土遺物は土師器72点と若干の埋土遺物で、実測可能なものは、甕・坏・高坏である。甕は口縁がゆるく外傾し坏は稜を有する。高坏は、１・８が坏部に稜を有している。このほか、いわゆる編み物石が、２個出土している。

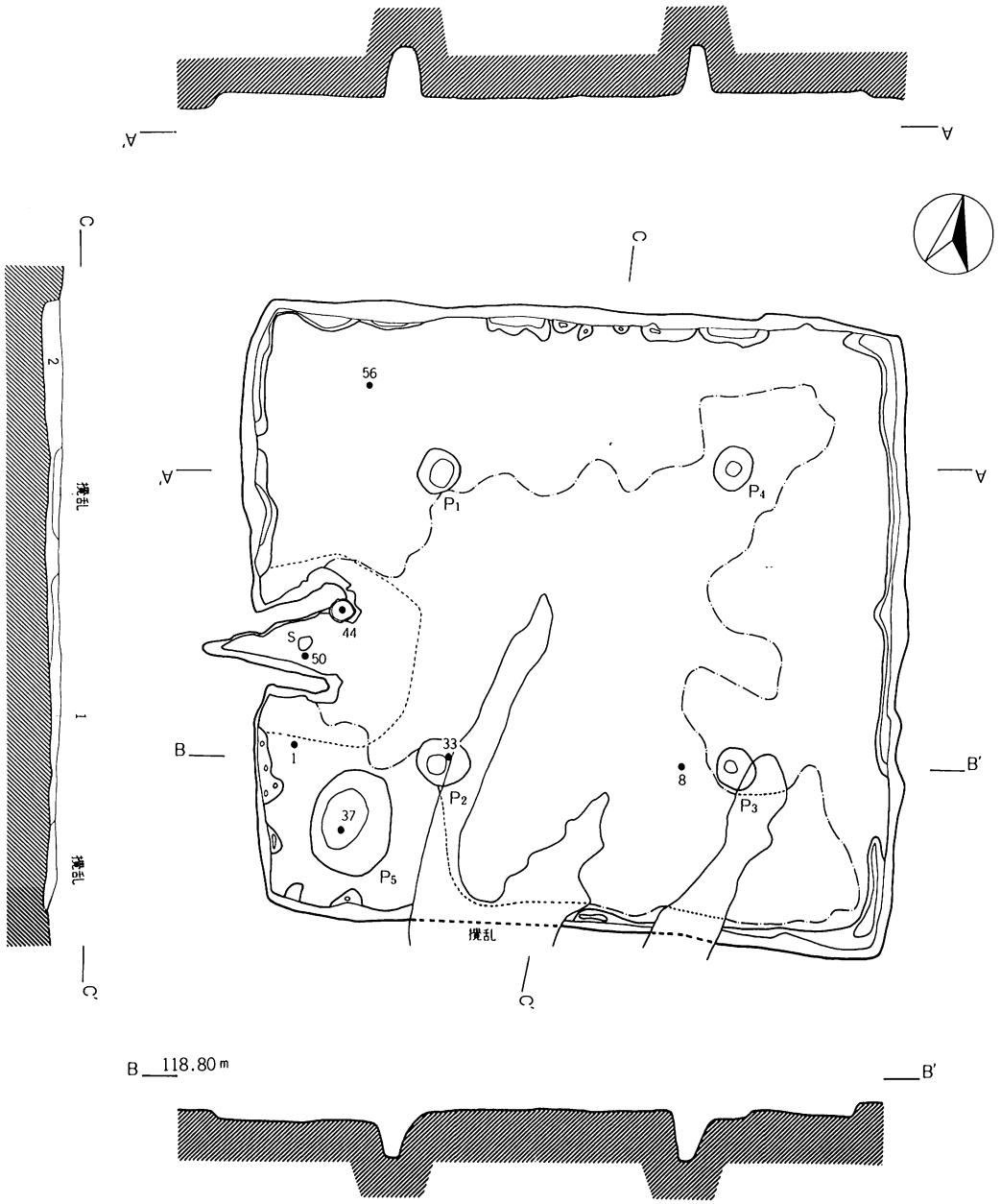


第23図　第５号住居址出土遺物

第６号住居址

遺構（第24・26図、図版３）

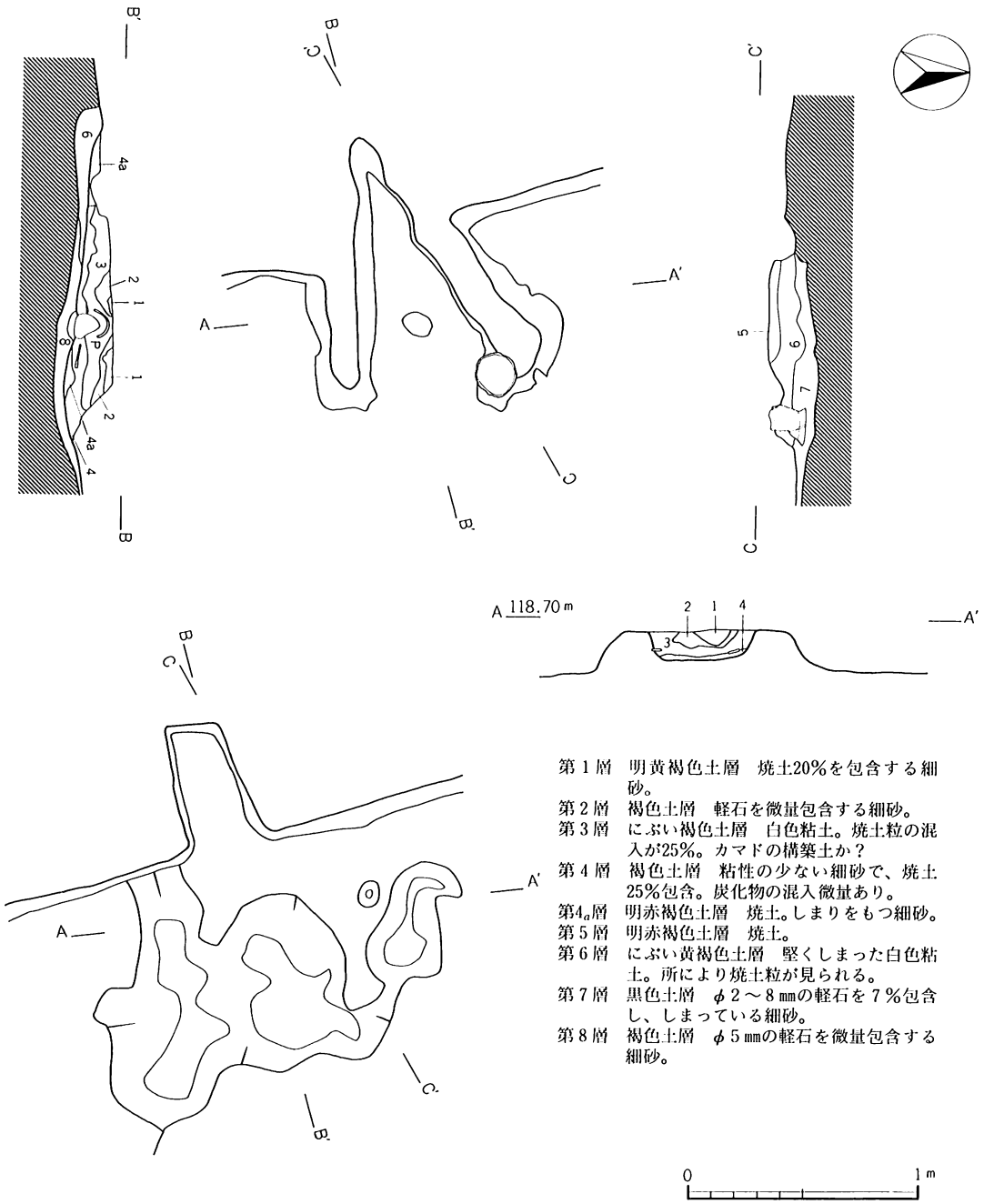
調査区北の住居密集地のほぼ中央、B・C－１・２・３グリッドに所在し、北から右廻りに９・



第１層　オリーブ黒色土層　黒色土を５％、黄褐色土を10％包含する細砂。
第２層　黒褐色土層　φ２㎜の軽石を微量包含する細砂。

第24図　第６号住居址

0　2m



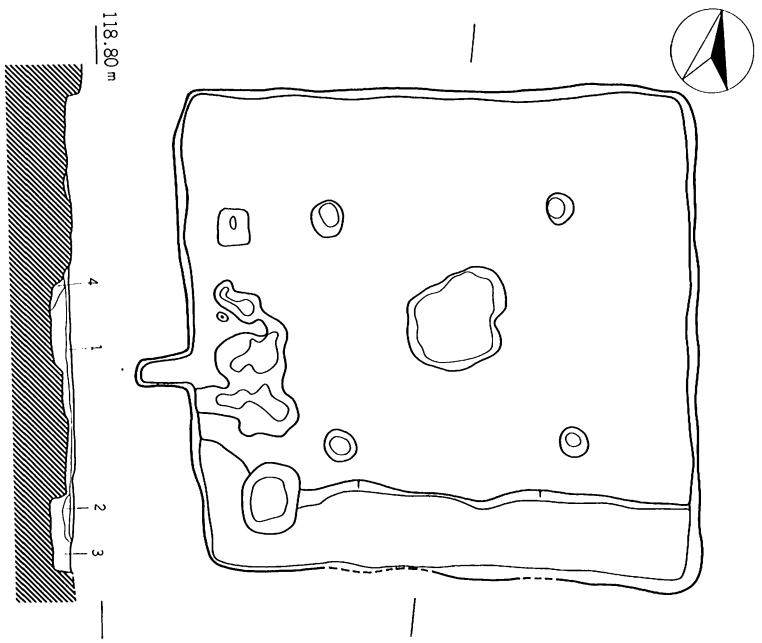
第25図　第６号住居趾カマド

10・８・４・３号住居にとり囲まれている。プランは東西5.7m、南北5.3m、の正方形で、面積は27㎡を測る。カマドは東壁に位置し、主軸方位はN－102°－Wを指す。ローム地山に掘り込まれており、確認面からの壁高は平均12cmである。南壁は、一部床面まで達した耕作状の攪乱により、

毀損を受けていた。周溝は幅約18cm、深さ約4cmで、ほぼ全周している。床面は、ローム地山を削平後一部を除き貼り床され、堅緻に踏み固められていた。掘り方は、床面中央に直径80cm程の床下土坑と、南壁に沿って幅70cm程のテラス状の掘り込みが認められ、どちらも深さ12cm前後、ロームブロックと軽石を包含する細砂の混土により埋められていた。また、P_1と西壁の中間に1辺30cm、深さ20cm程のすり鉢状の土坑が検出された。ピットは合計5個検出された。P_1～P_4は、対角線上に配置された主柱穴、P_5は楕円形の貯蔵穴で、カマドの左、床面よりやや低いテラス状を呈した所に掘り込まれていた。

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	37	34	42
P_2	44	38	40
P_3	36	30	37
P_4	37	32	40
P_5	88	67	58

H－6　ピット計測表



第1層　褐色土層　ロームブロックを20%、軽石を5%包含するしまった細砂。
第2層　黒色土層　φ2～3mmの軽石を7%包含する細砂。
第3層　暗褐色土層　第2層とロームブロックの混土。
第4層　黄褐色土層　ややしまりをもつ細砂。

0　2m

第26図　第6号住居址掘り方

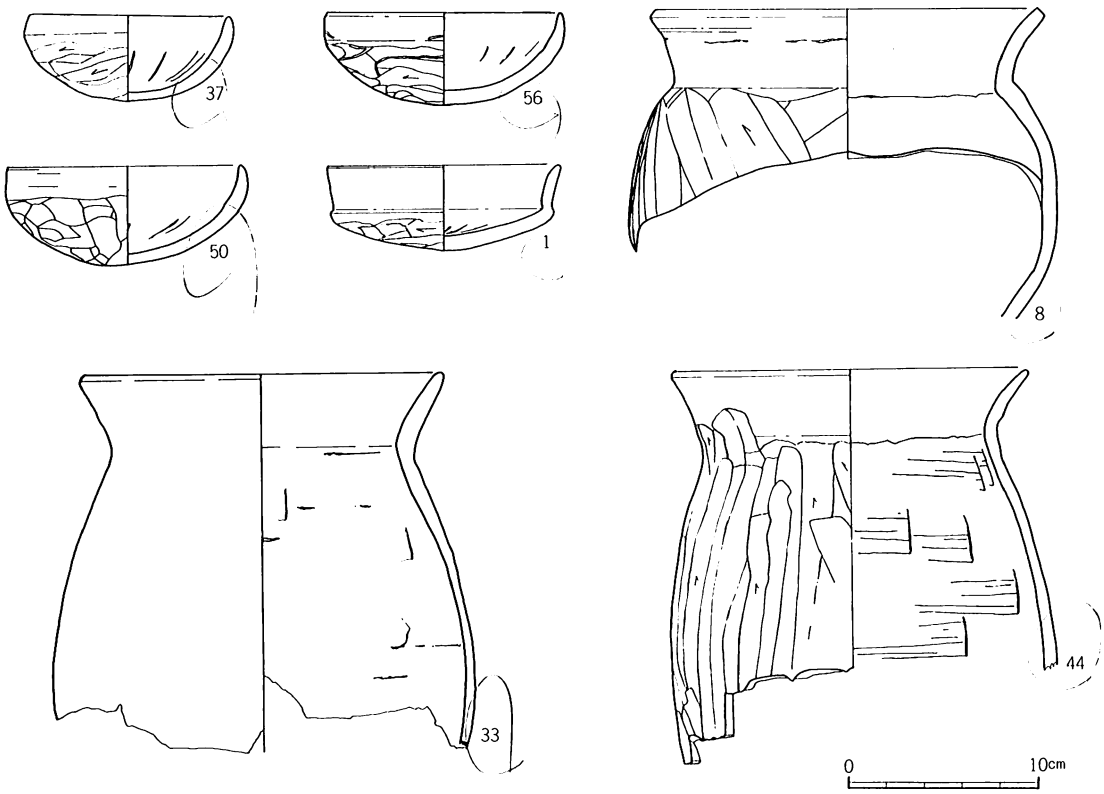
カマド

（第25図、図版3）

東壁の中央やや南寄りに位置し、全長132cm、幅112cmを測り、主軸方位はN－109°－Wを指す。確認面が床面に近かったため、かなり掘削されていた。袖部は白色粘土で構築され、右袖の先端部には逆位の甕も使用されていた。基底部はやや砂質の黒褐色土が敷かれており、支柱は安山岩質の円礫である。火床面は床面よりやや低く、煙道部は緩やかな傾斜から先端部で急角度となる。掘り方は、壁外に長方形に張り出す。

出土遺物（第27図、図版9）

本址の出土遺物は、土師器70点と若干の埋土遺物で、このほかにいわゆる編み物石が2個出土した。実測可能な遺物は、甕3点と坏4点である。甕は口縁部が外傾し、33・34は胴部が長胴化を呈し、一方8はかなり球形を呈している。坏は、1が外稜を有するもので、口縁部はやや外傾している。37・50・56は似た形状である。これらは、口縁部と底部を分ける明瞭な稜線がなく、口縁部がやや内湾ぎみに立ち上がっている。



第27図　第６号住居址出土遺物

第７号住居址

遺構（第28図、図版４）

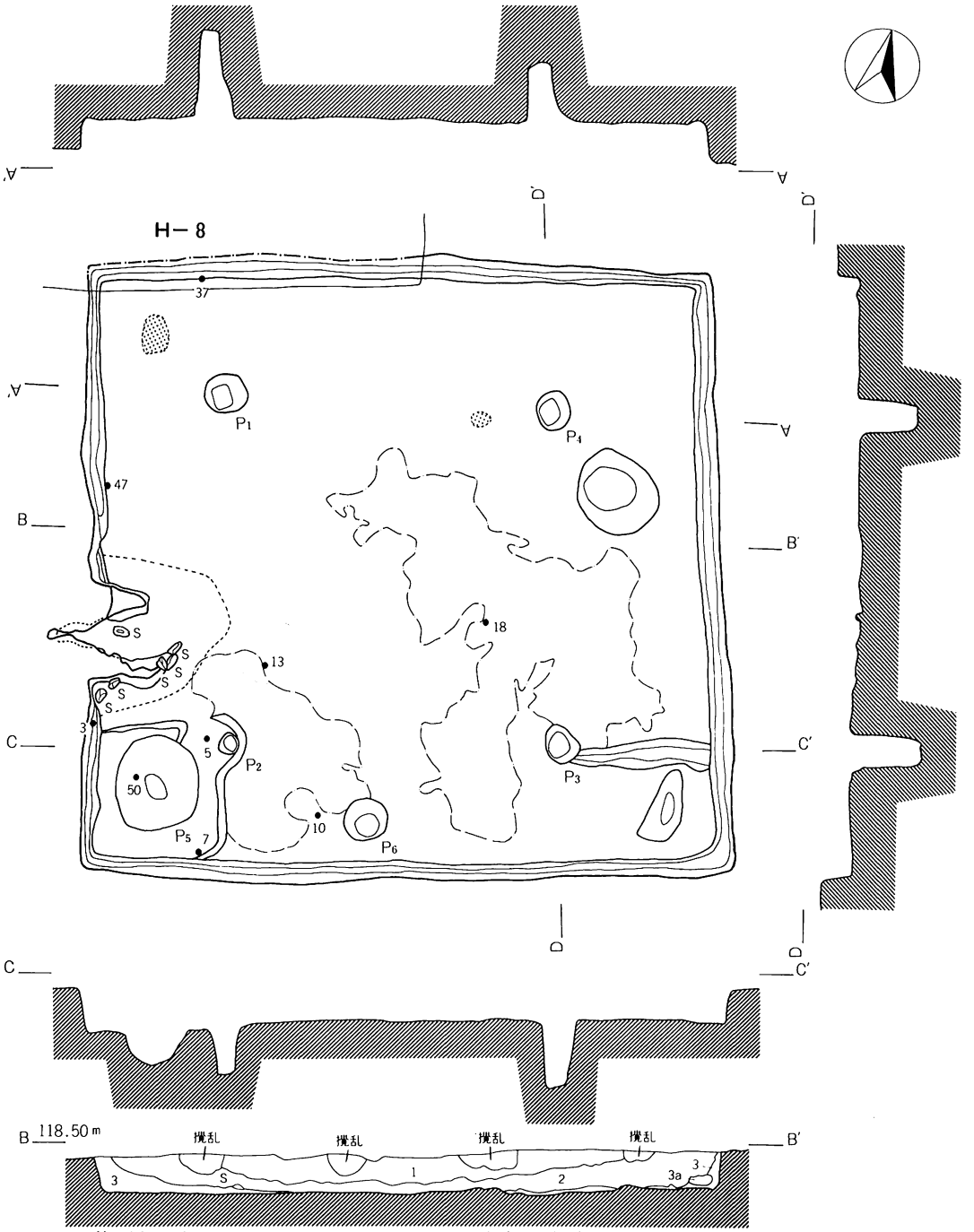
調査区北の住居密集地内に存し、D・E・F－3・4グリッドに位置する。H－8住と重複関係にあり、本址の方が新しい。プランはきっちりした正方形で、カマドを西壁に持ち、東西5.8m、南北5.6m、面積30m²を測る。主軸方位はN－104°－Wを指す。確認面からの壁高は平均30cmで、ローム壁は鋭く立ちあがる。周溝は、平均の深さが３cmと浅めであるが、全周している。床面は東側中央付近に凹凸が目立ち、東壁際には径70cm、深さ10cmの丸い窪みがある。また、P_3と東壁の間には間仕切溝状の遺構があった。貼り床は一部施工されており、面はしまっている。P_1～P_4は主柱穴で、貯蔵穴であるP_5は、床面より一段低いテラスに深く掘り込まれていた。

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	36	36	76
P_2	19	17	42
P_3	34	27	61
P_4	35	30	51
P_5	84	73	109
P_6	40	35	6

H－7　ピット計測表

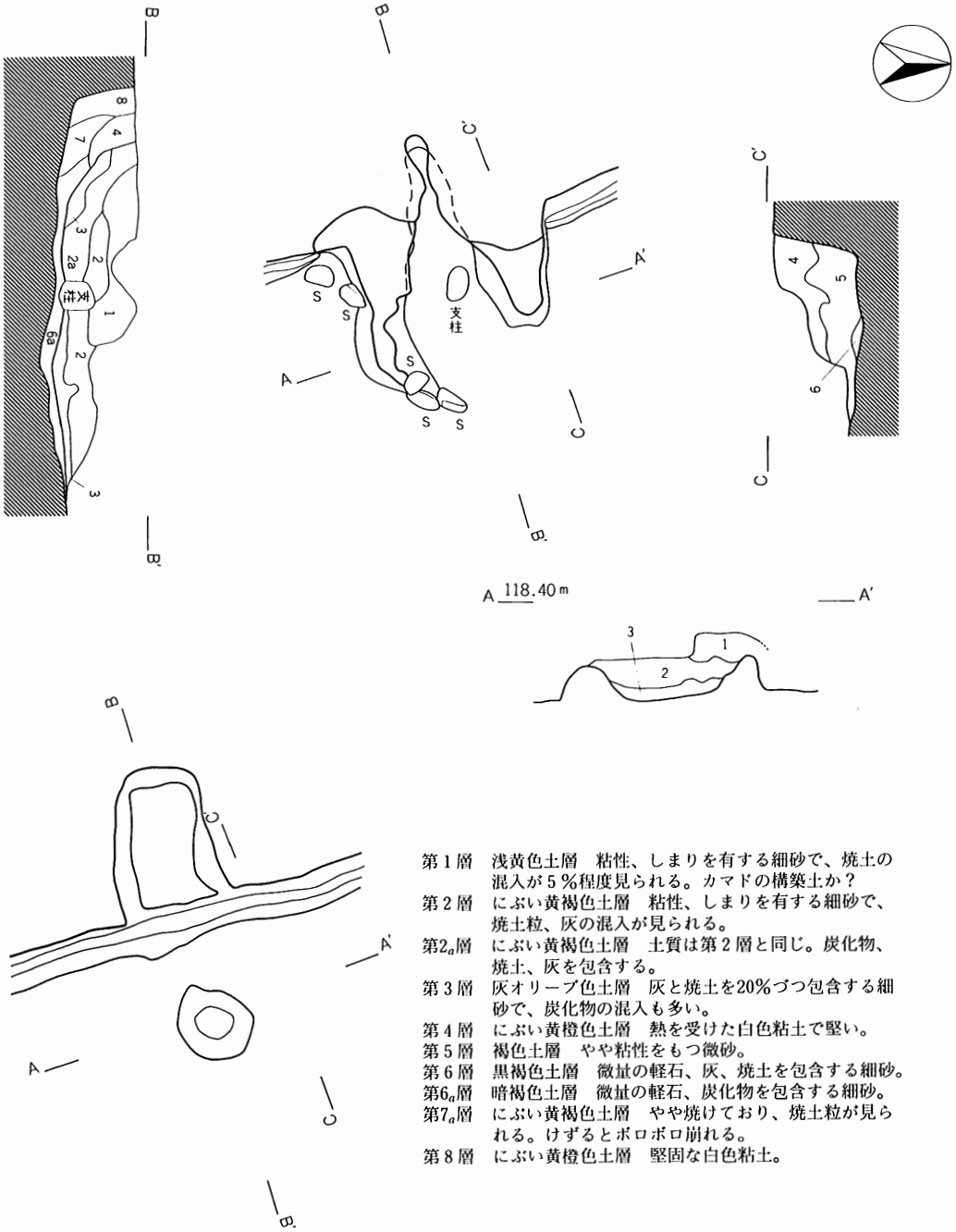
カマド（第29図、図版４）

西壁の中央よりやや南寄りに位置し、全長119cm、幅98cm、主軸方位はN－107°－Wを指す。袖部は白色粘土で造られ、基底部に黒褐色土が用いられている。支柱は安山岩質の円礫である。掘り方は、壁外に長方形に張り出し、壁内に周溝と径30cmの丸い窪みをもつ。



第１層　黒色土層　φ２～５㎜の軽石を７～10％包含する細砂。
第２層　暗褐色土層　φ２～５㎜の軽石を５％包含する細砂。
第３層　暗褐色土層　φ２～５㎜の軽石を５％、ロームブロックを微量包含する細砂。
第3$_a$層　黒色土層　φ５㎜の軽石を３％包含する柔らかい細砂。

第28図　第７号住居址

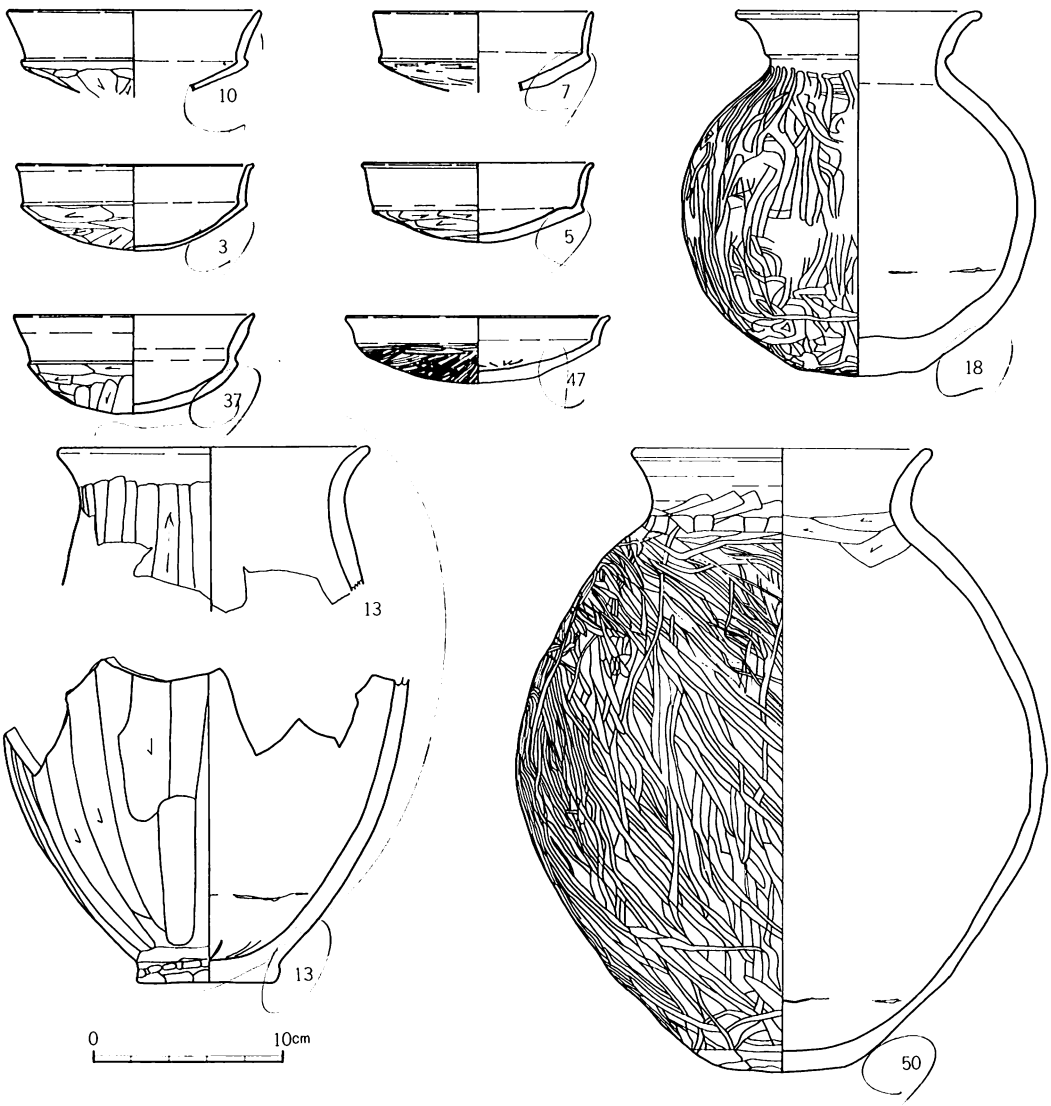


第1層　浅黄色土層　粘性、しまりを有する細砂で、焼土の混入が5％程度見られる。カマドの構築土か？
第2層　にぶい黄褐色土層　粘性、しまりを有する細砂で、焼土粒、灰の混入が見られる。
第2_a層　にぶい黄褐色土層　土質は第2層と同じ。炭化物、焼土、灰を包含する。
第3層　灰オリーブ色土層　灰と焼土を20％づつ包含する細砂で、炭化物の混入も多い。
第4層　にぶい黄橙色土層　熱を受けた白色粘土で堅い。
第5層　褐色土層　やや粘性をもつ微砂。
第6層　黒褐色土層　微量の軽石、灰、焼土を包含する細砂。
第6_a層　暗褐色土層　微量の軽石、炭化物を包含する細砂。
第7_a層　にぶい黄褐色土層　やや焼けており、焼土粒が見られる。けずるとボロボロ崩れる。
第8層　にぶい黄橙色土層　堅固な白色粘土。

第29図　第7号住居址カマド

出土遺物（第30図、図版９）

本址の出土遺物は、土師器54点と若干の埋土遺物で、実測可能の遺物は、甕・壺・坏である。甕は口縁部が緩やかに外反し、底部は突出している。18は有段口縁の系譜を引く壺で、外面は50と同様によく磨かれている。坏はすべて外稜を有するもので、口縁はやや外反傾向にある。47は器高が低い。このほかに、いわゆる編み物石が26個出土した。平均の重さは950gであった。

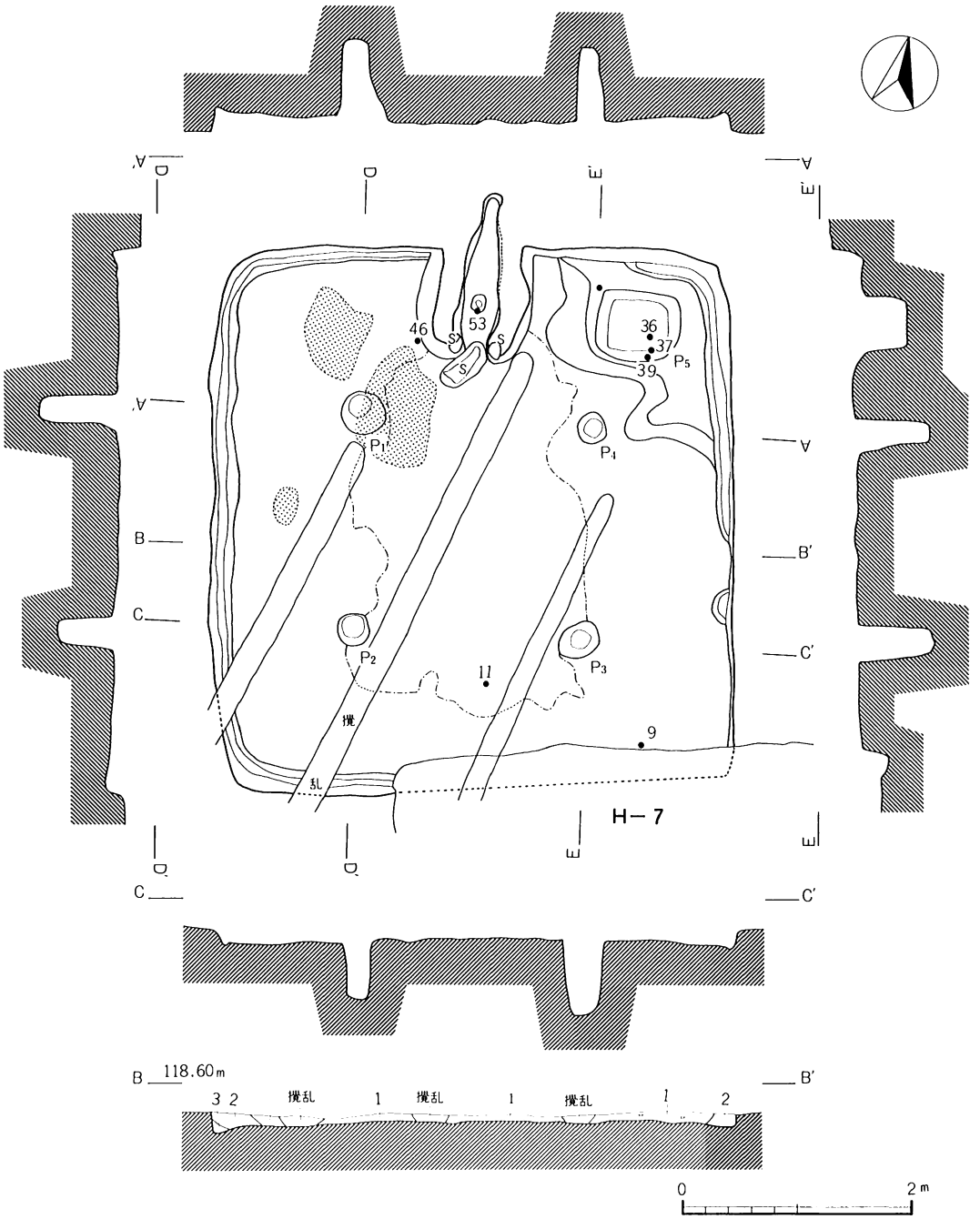


第30図　第７号住居址出土遺物

第８号住居址

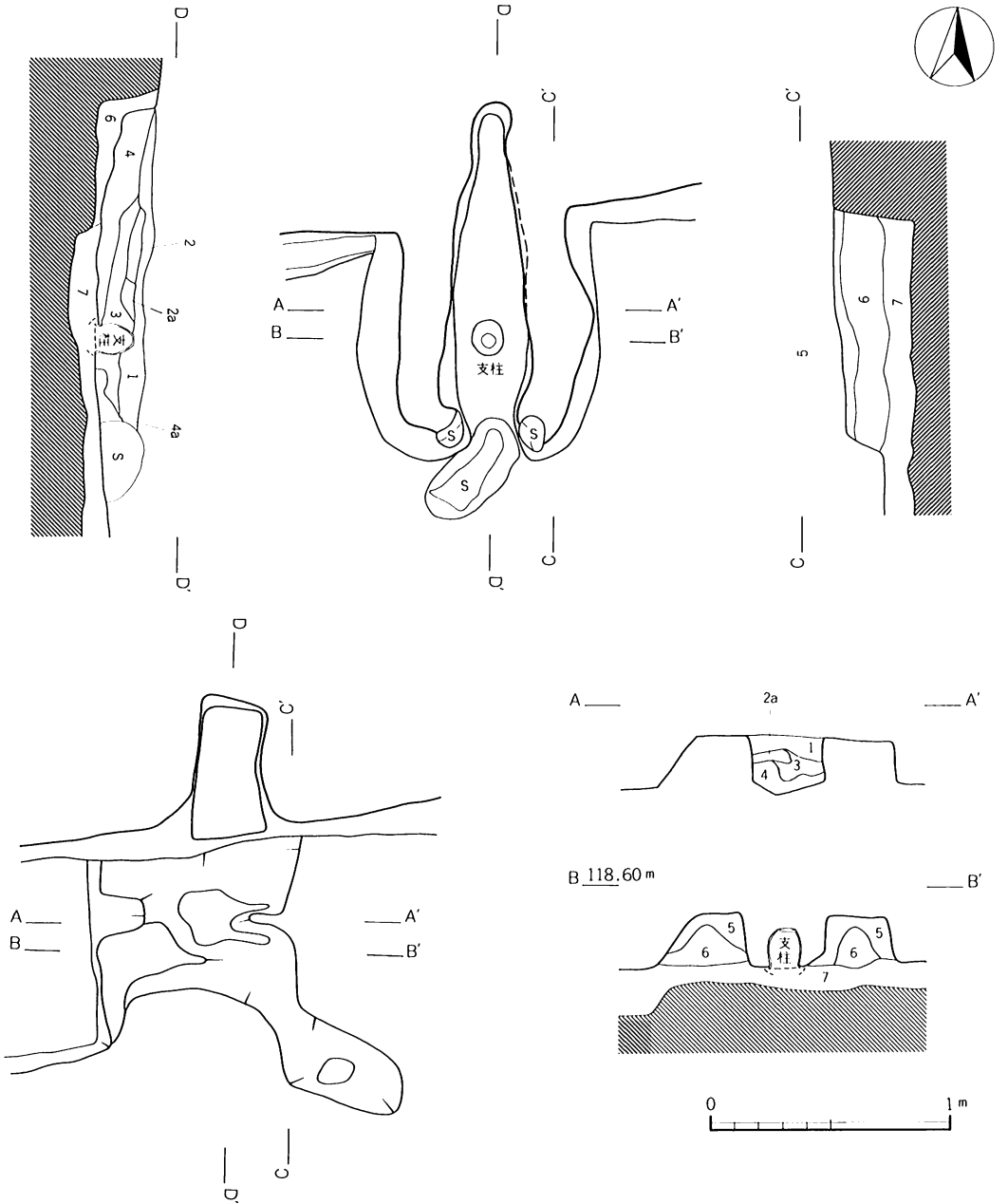
遺構（第31・33図、図版４）

調査区北の住居密集地のほぼ中央に所在する。グリッドはC・D・E－２・３である。本址の南壁とH－７住の北壁が30cmほど重複しており、プラン確認の段階でH－７住の覆土が本址との



第1層　黒褐色土層　φ2～5㎜の軽石を5％、ロームブロック2％を包含する柔らかい細砂。
第2層　暗褐色土層　φ2～5㎜の軽石を2～3％、ロームブロック微量を包含する柔らかい細砂。
第3層　暗褐色土層　明黄褐色のロームブロックが多量に混入している。

第31図　第8号住居址



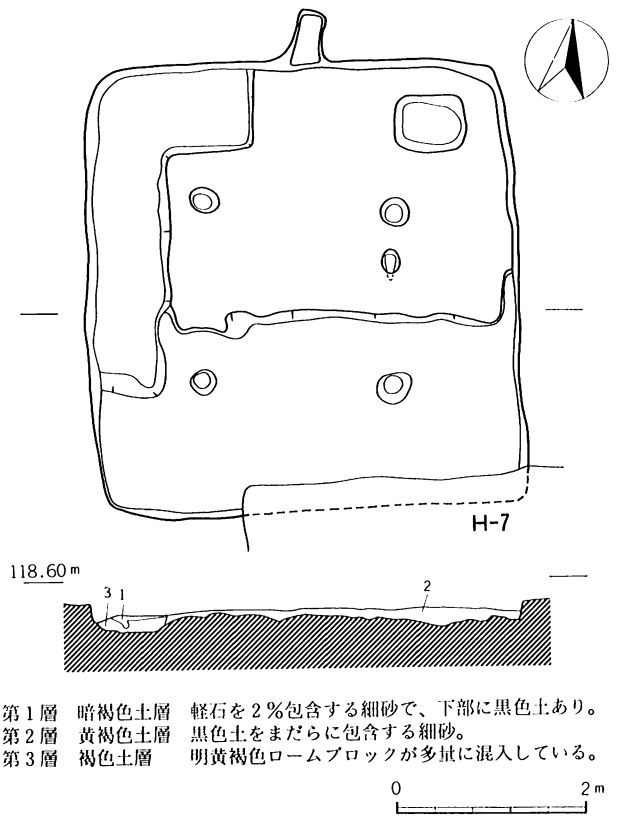
第１層　褐色土層　粘性、しまりとも少ない細砂。焼土粒・ローム粒、微量の炭化物が混入。
第２層　黒褐色土層　焼土30％を包含する細砂。
第2_a層　橙色土層　焼土。
第３層　にぶい黄色土　粘性、しまりを若干有する細砂。焼土は40％混入。
第４層　灰褐色土層　灰、焼土を包含する細砂。
第4_a層　暗褐色土層　焼土を20％、灰を多量に包含する細砂。
第５層　黄褐色土層　粘性、しまりを有する細砂で20％の焼土が見られる。
第６層　オリーブ黄色土層　白色粘土。
第７層　暗オリーブ褐色土層　粘性をもつ細砂で、φ30～40㎜のロームブロックの混入あり。

第32図　第８号住居址カマド

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	39	36	70
P_2	28	27	50
P_3	37	28	66
P_4	28	25	64
P_5	73	62	39

H－8　ピット計測表

重複部分に入っているという所見を得、排土作業を進めていった。H－7住と本址の床面は、H－7住の方が深い。その差は約15cmで、本址は床面下までH－7住により毀損されていた。平面形は整美な正方形で、カマドを北壁に持ち、主軸方位はN－13°－Wを指す。東西4.6m、南北4.8m、面積20㎡を測る。確認面からの壁高は平均15cmとうすく、筋状の攪乱が3本床面まで達していた。周溝は、東壁の南側を除き4cm程度の深さで掘られている。床面は、ローム地山を削平した後貼り床を施し、堅緻に仕上っている。掘り方は、南側が5cm、西側が10cm落ち窪んでいた。ピットは合計5個検出された。主柱穴は4本対角線上に配置されており、貯蔵穴はカマド右のテラス内に長方形のプランで掘られていた。



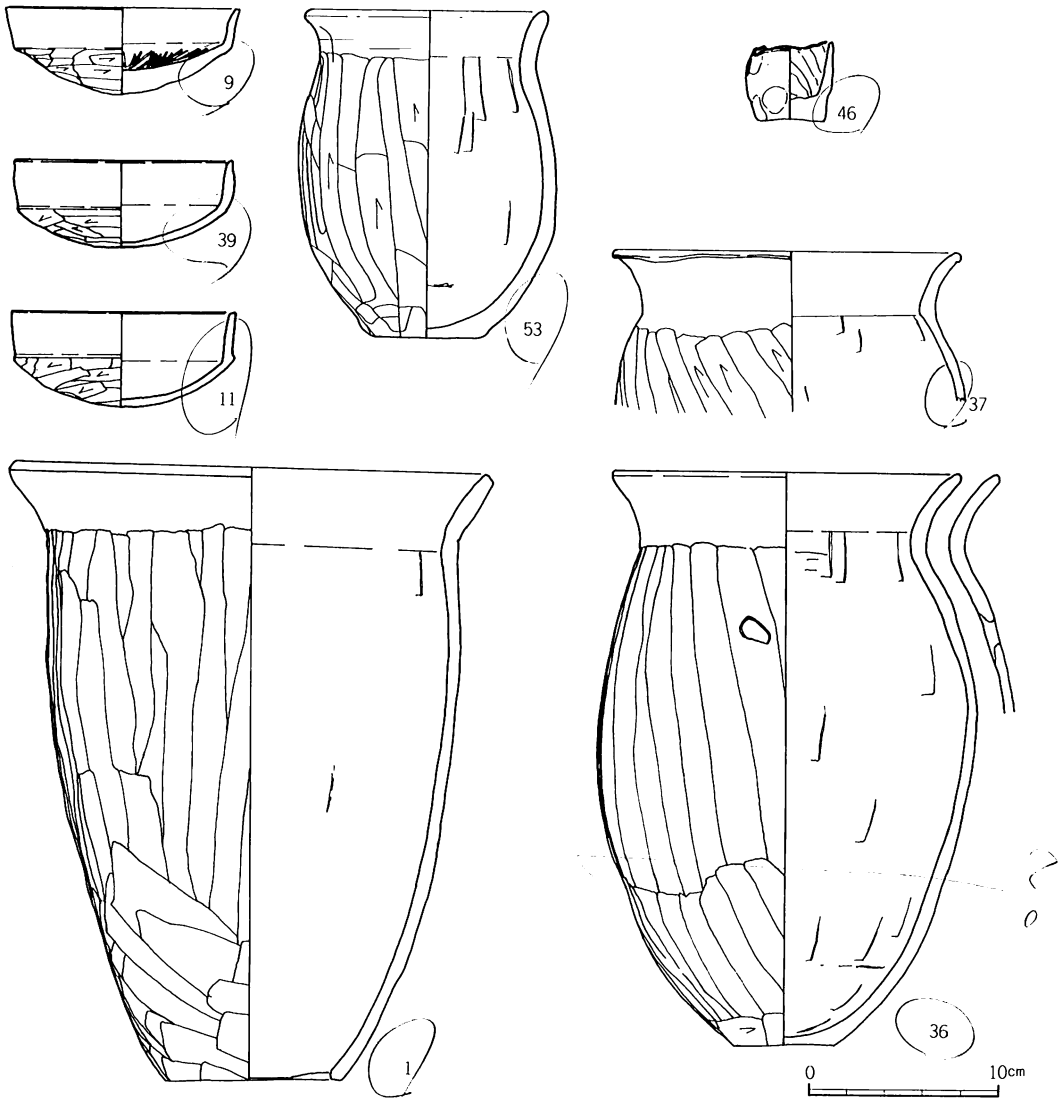
第33図　第8号住居址掘り方

カマド（第32図、図版4）

北壁の中央に位置し、主軸方位N－6°－Wを指す。全長173cm、幅101cmを測り、残存状況は良好である。袖部は白色粘土を用いて構築されており、基底にロームの混入した暗オリーブ褐色土を敷いている。袖の補強材として円礫が使用されており、ちょうど焚き口を塞いでいるのは、崩落した天井石である。支柱には、小型の甕が逆位で使用されている。火床面は床面よりやや低く、煙道部のたち上がりは急角度になっている。掘り方は、壁外をきっちりした長方形に掘り込んでおり、この部分には白色粘土がびっしり敷かれていた。

出土遺物（第34図、図版9・10）

本址の出土遺物は、土師器53点と若干の埋土遺物で、このほかにいわゆる編み物石が5個、安山岩製の無茎石鏃が1点出土している。甕は胴部が長胴化しており、36は胴部上方に小孔がある。53はカマド支柱に用いられた小形の甕で、37は外反した口縁の端部が肥厚している。1は大形甑で46は指おさえが明瞭な手捏である。坏は外稜を持ち、39は肥厚した底部をもつ。

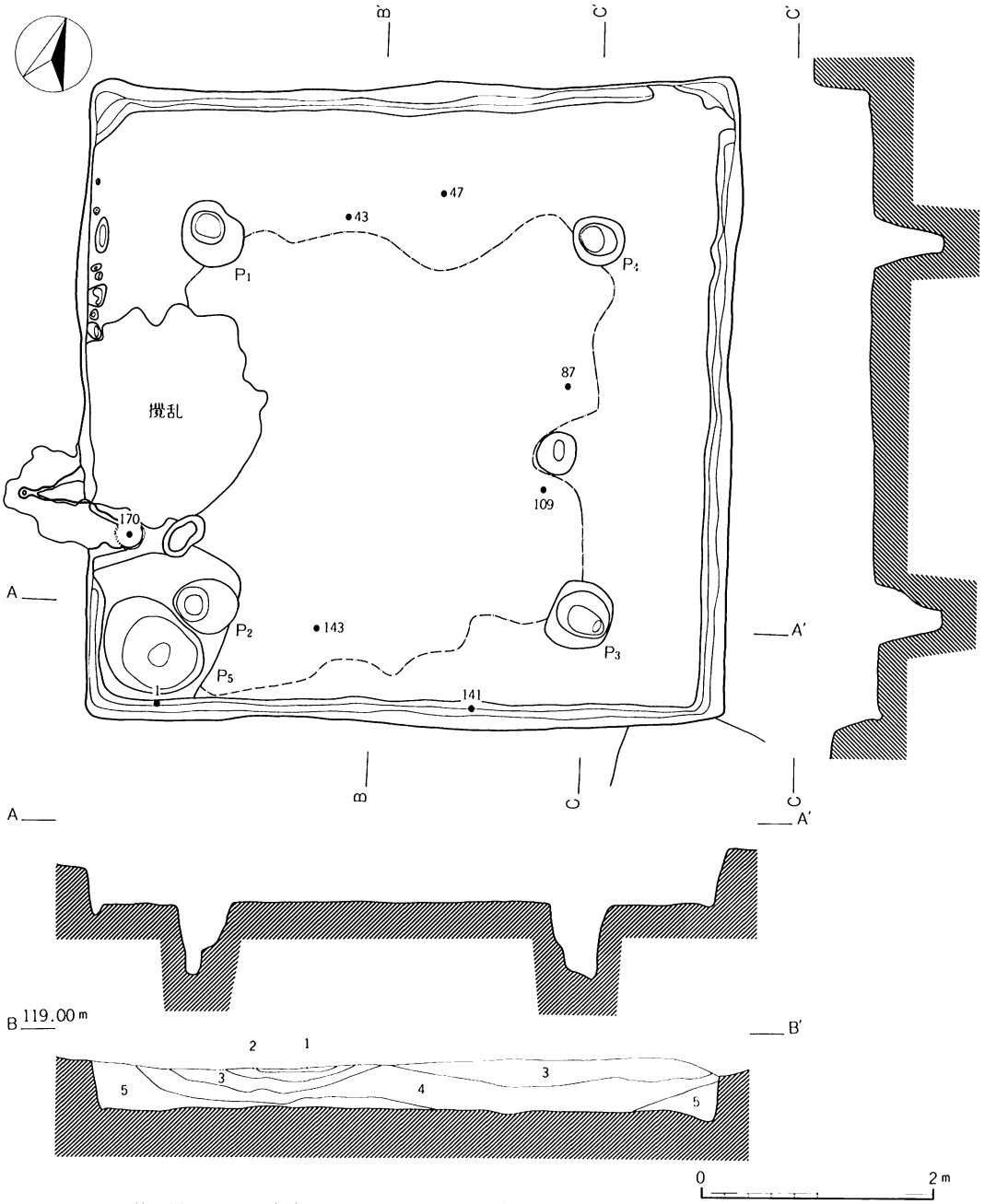


第34図　第８号住居址出土遺物

第９号住居址

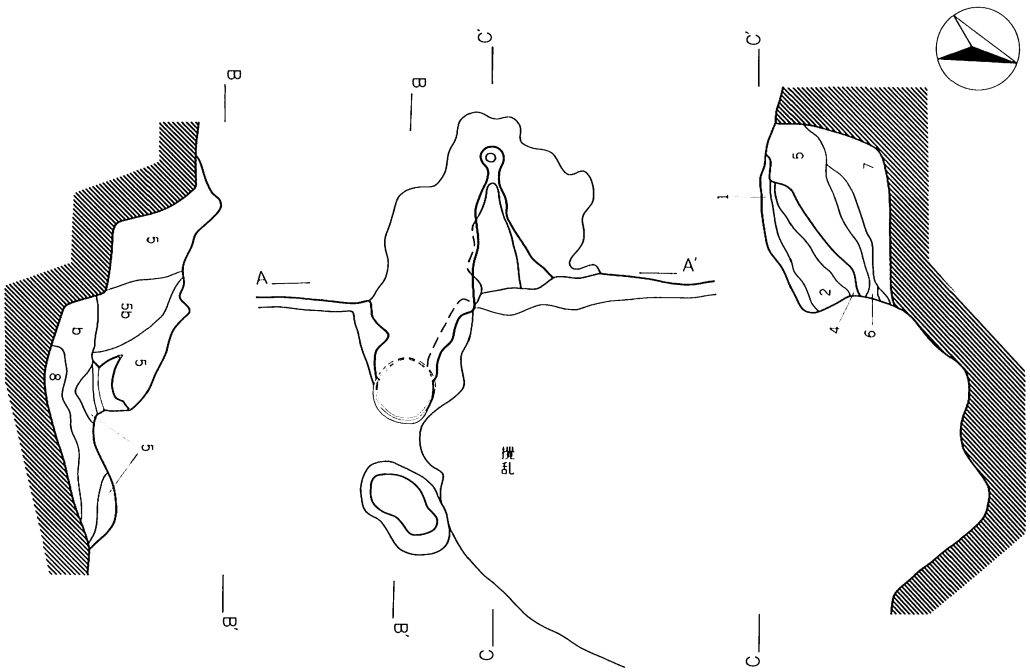
遺構（第35・37図、図版５）

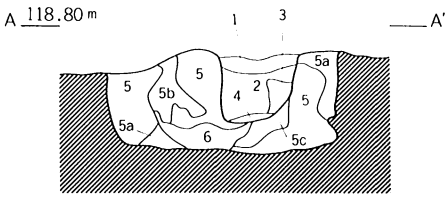
調査区の最北端、を・ん・A－２・３グリッドに所在する比較的大形の住居址である。南東コーナーがH－10住と重複しており、本住居址の方が新しい。西にカマドをもつ正方形のプランで、東西5.7m、南北5.6m、面積30m²を測り、主軸方位はN－110°－Wを指す。ローム地山を掘り込んで構築されており、確認面からの壁高は平均42cmと深く、ローム壁は急角度で立ち上がる。西壁中央付近に大きな攪乱が入っており、右袖はとばされ、床面も一部掘り抜かれていた。周溝は、幅

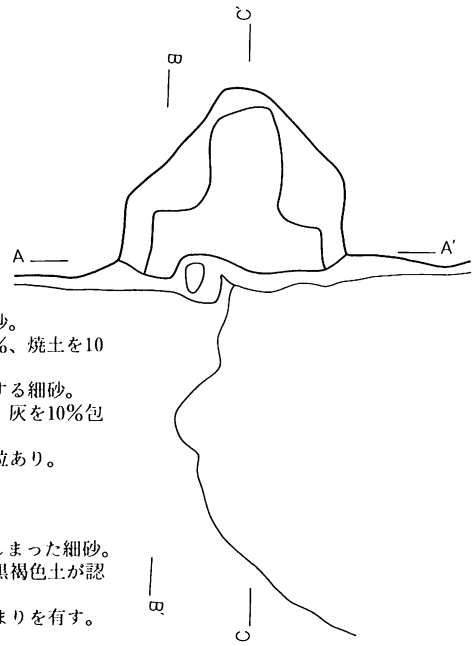


第1層　オリーブ褐色土層　しまりをもつが、粘性の少ない細砂。
第2層　黒色土層　褐色ローム粒を20%包含する細砂で、粘性は少ない。
第3層　黄灰色土層　軽石5%、φ10mmのロームブロック10%を包含する微砂。
第4層　黒褐色土層　しまりをもつが、粘性の少ない微砂。焼土粒の微量の混入あり。
第5層　オリーブ黒色土層　粘性が少ない細砂。

第35図　第9号住居址







第１層　にぶい黄色土層　粘性、しまりを有する微砂。
第２層　浅黄色土層　粘性、しまりを有し、灰を40%、焼土を10%包含する細砂。
第３層　灰黄褐色土層　焼土を10%、灰を10%包含する細砂。
第４層　灰黄色土層　やや粘性をもち、焼土を20%、灰を10%包含する細砂。
第５層　にぶい黄褐色土層　白色粘土。微量の焼土粒あり。
第5_a層　オリーブ褐色土層　白色粘土と地山の混土。
第56層　にぶい赤褐色土層　白色粘土の焼けたもの。
第5_c層　明褐色土層　焼土。
第６層　黒褐色土層　φ４㎜の軽石を微量包含するしまった細砂。
第７層　灰黄褐色土層　白色粘土。微量の炭化物、黒褐色土が認められる。
第８層　褐色土層　黒褐色土、地山等の混土で、しまりを有す。

0　1m

第36図　第９号住居址カマド

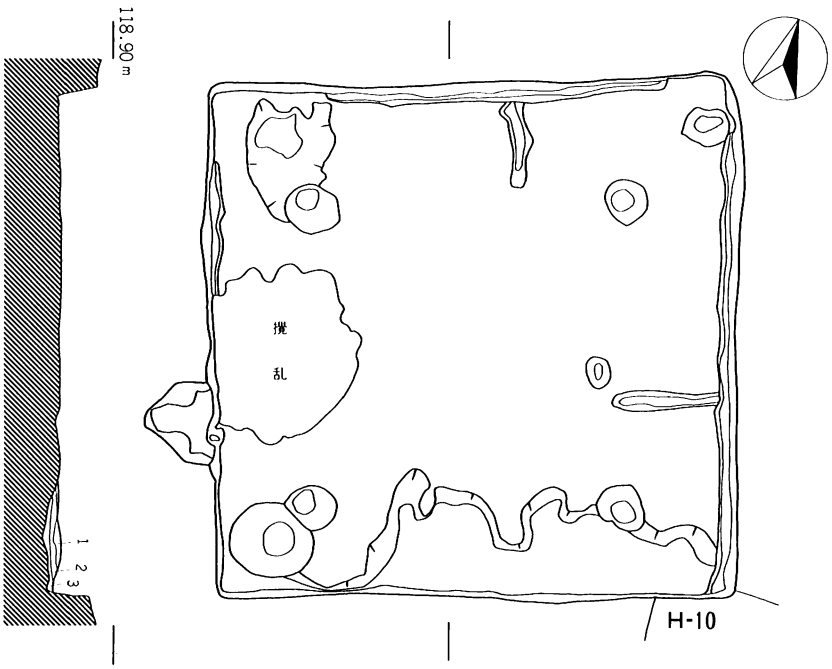
	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	60	54	53
P_2	57	48	63
P_3	60	53	57
P_4	48	43	58
P_5	95	75	91

H－9　ピット計測表

20cm、深さ4cmの規模でほぼ全周している。床面は黄褐色を呈し、平坦な堅緻面に仕上っていた。掘り方は、南壁際が最大20cm掘り窪められ、ロームを含む黒褐色土で貼り床されていた。ピットは、4本の主柱穴が対角線上に配され、貯蔵穴は、カマド左の一段低いテラス内に楕円形に掘られていた。

カマド（第36図、図版5）

西壁の中央よりやや南寄りに位置し、主軸方位はN－112°－Eを指す。後世の掘り込みにより、右袖、焚き口、燃焼部が破壊されており残存状況は悪い。左袖は壁から50cmの長さがあり、白色粘土で構築されていた。粘土の厚さは30cm程度で、その下には、黒褐色土、褐色土の2層が全体で15cm敷き込まれ、先端部には、逆位の甕が埋め込まれていた。



第1層　褐色土層　　軽石を5％、ロームブロックを少量包含する堅固な細砂。
第2層　黒褐色土層　φ2～15mmの軽石を10％包含する細砂。
第3層　黒褐色土層　明黄褐色ロームブロックと第2層の混じり。

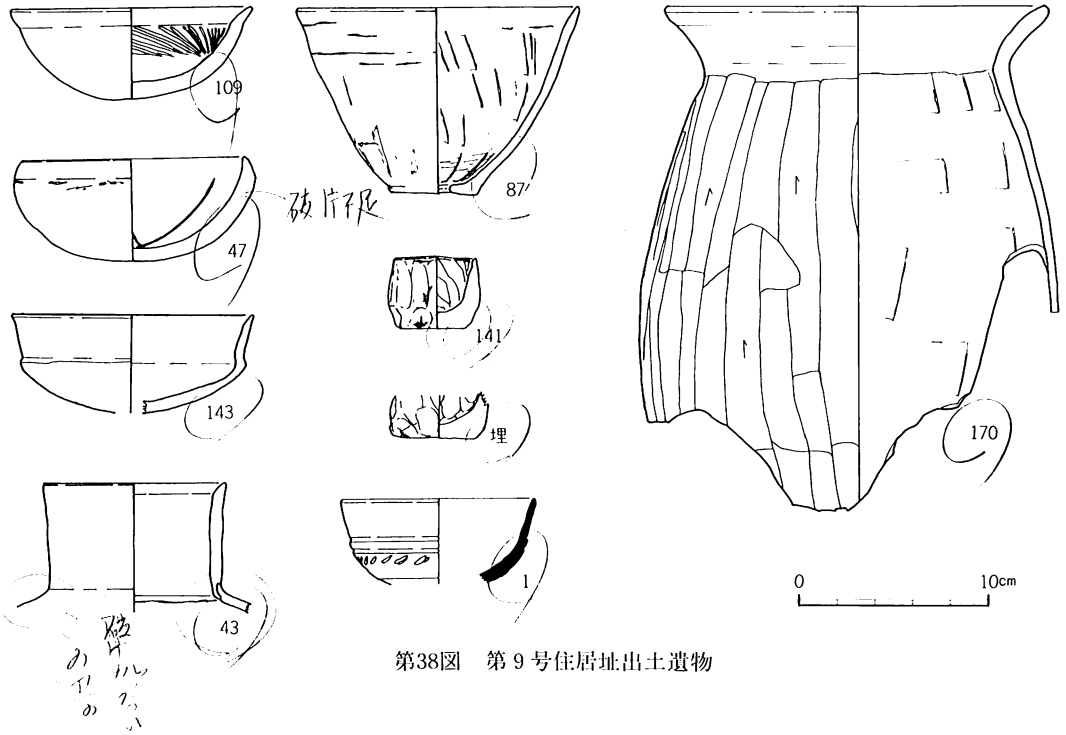
0　2m

第37図　第9号住居址掘り方

煙道部はびっしり固められた白色粘土で構築され、掘り方は三角形状に張り出す。撹乱により半分以上毀損されたカマドであるが、非常に精巧に造られていたと想像される。

出土遺物（第38図、図版10）

本址の出土遺物は、土師器172点、須恵器2点と若干の埋土遺物があり、このほかいわゆる編み物石が4個出土している。170の甕はカマド左袖の構築材で、胴部は長胴化している。87の甑は、逆ハの字状を呈し、底部は単孔である。43の坩は口縁が直立している。坏は、いわゆる内斜口縁を有するもの、外稜を有するもの、稜の明確でないものがある。47の内面には、ヘラ記号状の刻みがある。須恵器は無蓋高坏の坏部と思われる。



第38図　第９号住居址出土遺物

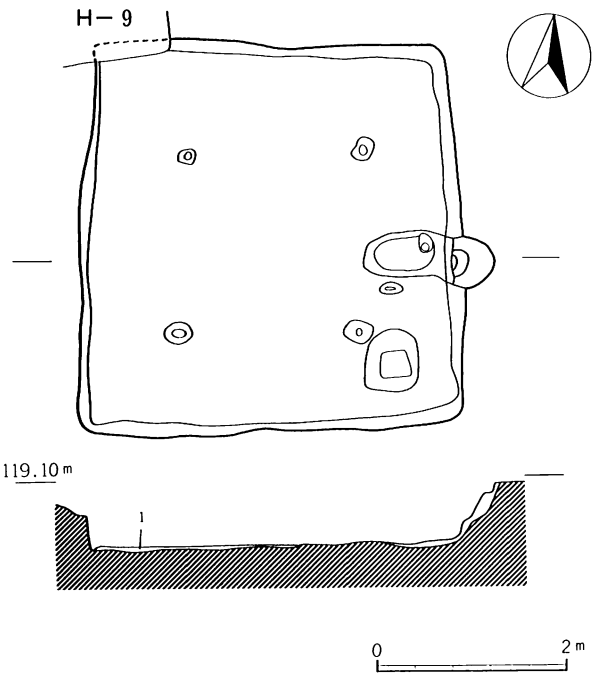
第10号住居址

遺構（第39・40図、図版５）

調査区北の住居密集地内、A・B－３・４グリッドに所在する。北西コーナーをH－９住に切られた正方形の小型住居で、東西4・1m、南北4.2m、面積16m²を測る。主軸方位はN－82°－Eを指す。ローム地山を掘り込んで構築されており、確認面からの壁高は平均43cmと深く、ローム壁の立ち上がりは垂直に近い。周溝は、

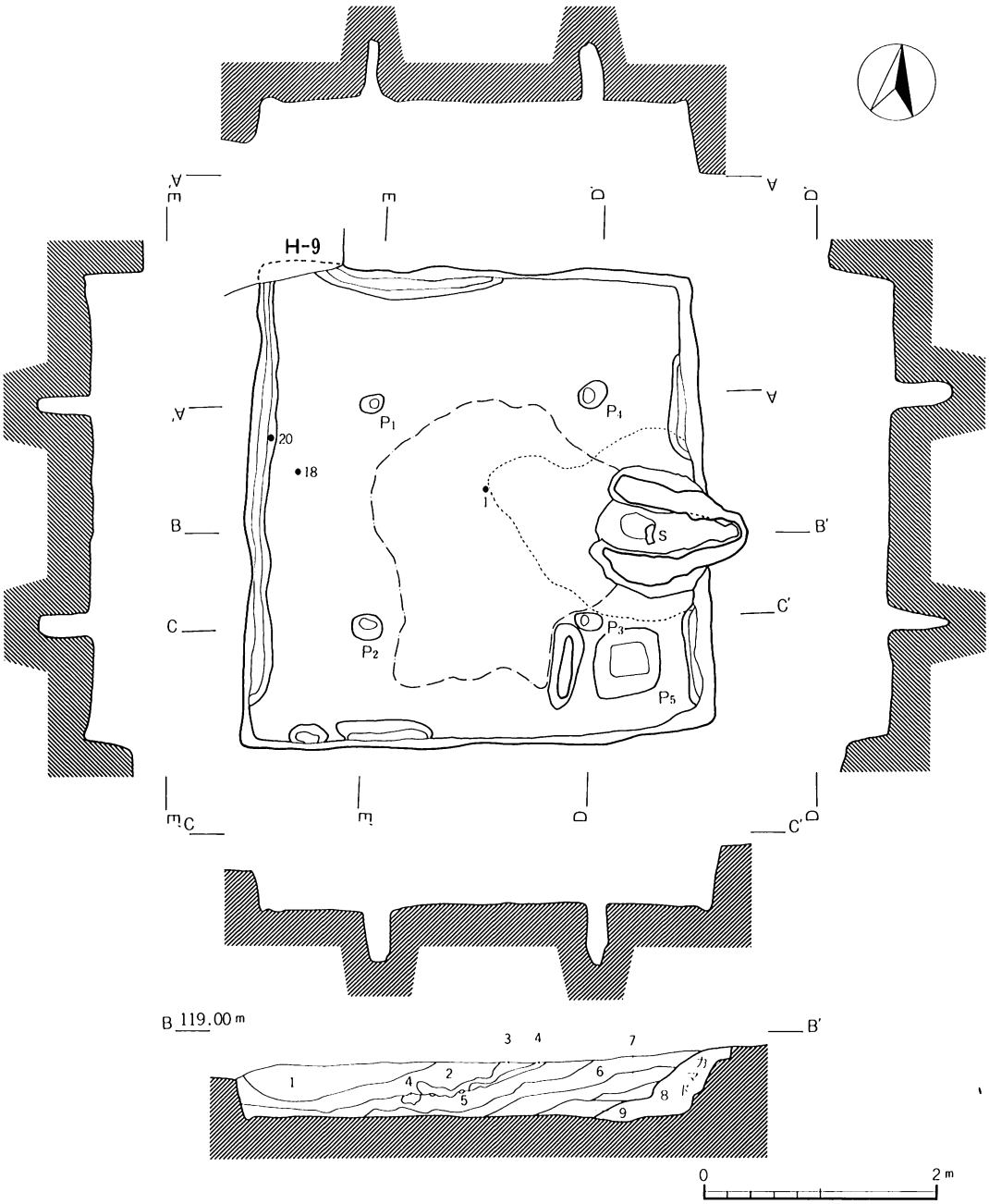
	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	21	15	44
P_2	27	22	43
P_3	24	15	52
P_4	28	21	49
P_5	59	59	53

H－10　ピット計測表



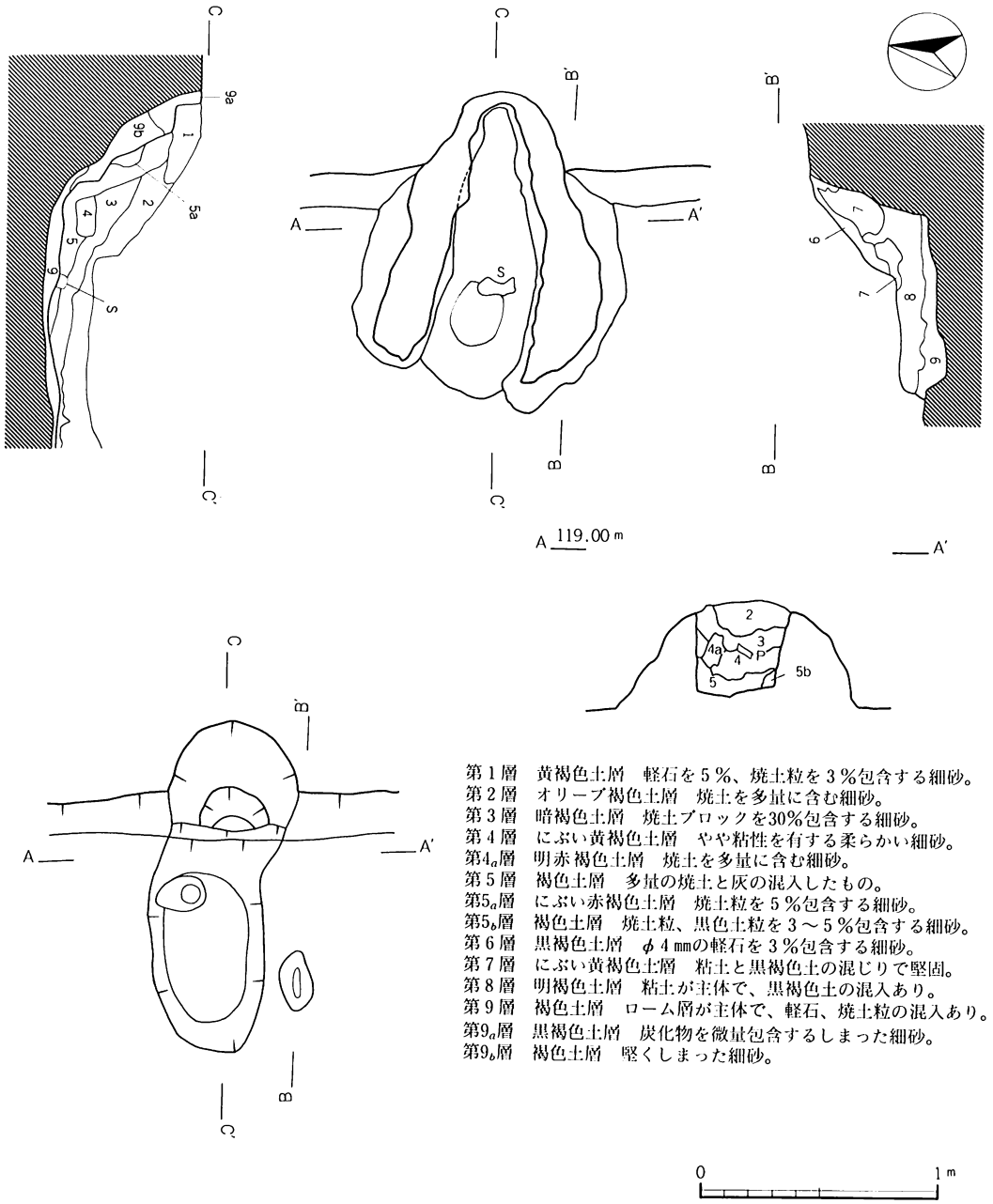
第１層　黄褐色土層　微量の黒色土、軽石を含む堅固な細砂。

第39図　第10号住居址掘り方



第1層　黒褐色土層　粘性の少ない微砂。
第2層　にぶい黄褐色土層　粘性の少ない微砂。
第3層　黒色土層　φ2～3㎜のローム粒を5～7％包含する細砂で、粘性を有す。
第4層　明黄褐色土層　ブロック状のロームで堅い。
第5層　褐色土層　粘性の少ない細砂。
第6層　黒褐色土層　軽石を微量、ロームを5％包含する細砂。
第7層　黒色土層　粘性やや弱くザラザラした細砂。
第8層　オリーブ黒色土層　粘性が少ない細砂。
第9層　灰褐色土層　粘性を有する微砂。

第40図　第10号住居址

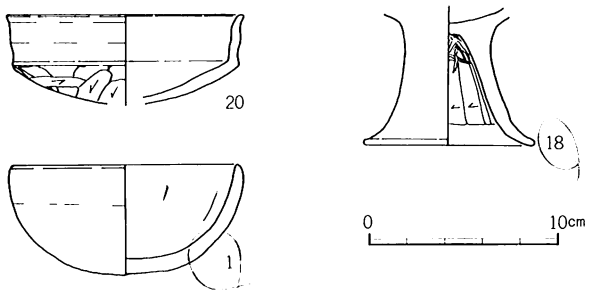


第41図　第10号住居址カマド

南壁の一部を除き、深さ3cmでめぐっている。床面は、貼り床された水平面で、堅く踏みしめられている。貯蔵穴の西には、テラスを意識してか、若干の高まりがあった。ピットは、合計5個検出された。主柱穴は、対角線上に配置された P_1～P_4 で、径30cmに満たない小形の楕円である。貯蔵穴は、カマドの右に位置し、隅丸方形のプランをもつ。

カマド（第41図）

東壁の中央からやや南寄りに位置する。全長133cm、幅113cmを測り主軸はN－86°－Eに傾く。袖部は、基底にローム主体の褐色土を敷き、その上に黒褐色土の混入した粘土を固めて構築している。火床面は床面よりやや下がり、煙道部に至り、急角度で立ち上がる。火床部の下にはローム主体の褐色土が敷かれ、掘り方は楕円形を呈する。煙道部の掘り方は、65°の傾斜で半円形に30cm張り出す。



第42図　第10号住居址出土遺物

出土遺物（第42図、図版10）

本址の出土遺物は、土師器23点と若干の埋土遺物で、実測可能の遺物は坏２点と高坏の脚部１点だけである。坏は外稜を持つものと持たないものがある。20は外稜を有し、口縁がほぼ直立している。１は外稜が不明瞭で、口縁が直立しており、器高は高い。８の高坏は、脚部の底があまり拡がらない。このほかに本址からは、いわゆる編み物石が５個出土した。

第11号住居址

遺構（第43図、図版５）

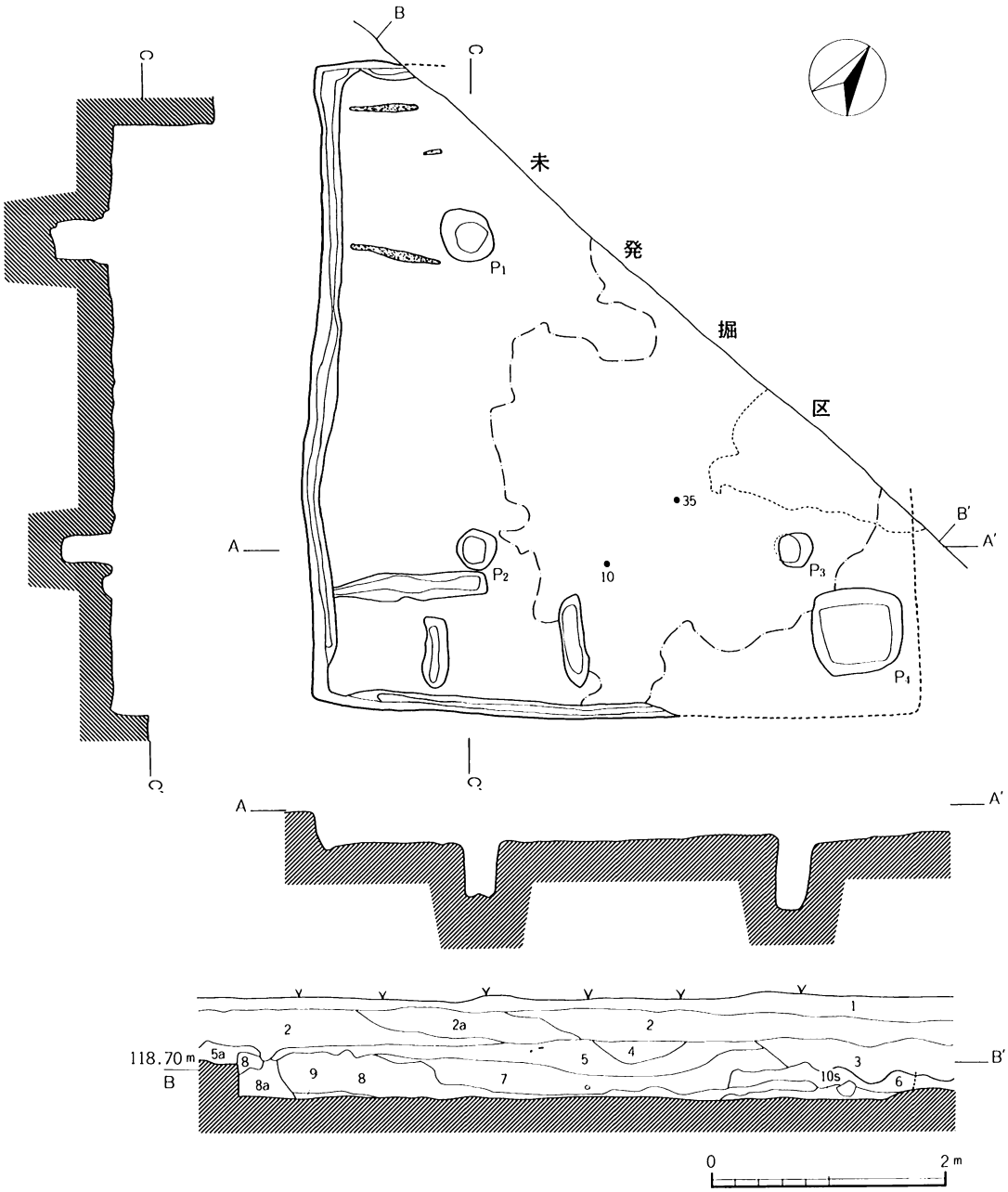
調査区北の住居密集地の東端、B・C－５・６・７グリッドに所在する。住居の一部が調査区外にかかるため、全体を調査することはできなかった。また、付近は、本遺跡の住居群の占地する台地が、ちょうど東の谷に向かって落ち始める所にあたり、本址の東側は、耕作土を掘削した段階で床面まで露呈してしまった。カマドは調査できなかったが、貯蔵穴の位置と焼土等の分布から、東壁に設置されていると推定される。プランは正方形で、西壁は5.4mを測る。主軸は、N－57°－Eを指す。確認面からの壁高は、最深部の西壁で30cmで、ローム壁は鋭く立ち上がる。周溝は、４cmの深さでめぐる。床面はロームと黒褐色土の混土で貼り床され、堅くしまっていた。西南隅付近からは、深さ10cmの間仕切溝状の窪みが検出された。ピットは合計４個検出された。主柱穴は P_1～P_3 で、もう１個は未発掘区内にあると推定される。貯蔵穴は P_4 で、隅丸方形のプランをもち、住居址東南隅に構築されている。

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	51	43	50
P_2	36	33	45
P_3	32	32	59
P_4	79	75	84

H－１１　ピット計測表

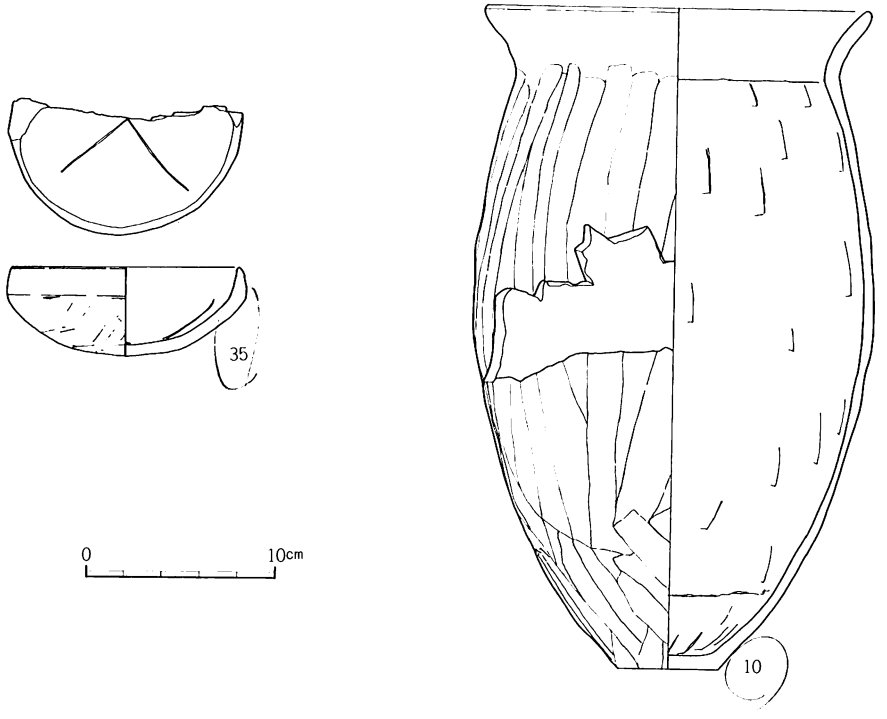
出土遺物（第44図、図版12）

本址の出土遺物は、土師器53点、須恵器片１点と若干の埋土遺物である。実測可能の遺物は、甕１点と坏１点である。甕は、胴部が長胴化しており、縦方向にヘラケズリが見られる。坏は、外稜が不明瞭で、口縁部はやや内湾ぎみに立ちあがる。内面にヘラ記号状の刻みがある。



第1層　黒褐色土層　表土。
第2層　黒褐色土層　柔らかい砂質土。耕作土。
第2$_a$層　オリーブ黒色土層　柔らかい砂質土。耕作土。
第3層　暗灰黄色土層　粘性、しまりとも少ない細砂。
第4層　黒褐色土層　φ2㎜の軽石を15%包含する細砂。
第5層　オリーブ黒色土層　軽石を20%包含し、やや粘性をもつ細砂。
第5$_a$層　にぶい黄褐色土層　粘性の少ない細砂。
第6層　暗オリーブ褐色土層　粘性の少ない細砂。
第7層　黒褐色土層　粘性、しまりをもつ細砂。
第8層　黒色土層　軽石の混入多く、しまりある細砂。
第8$_a$層　黒色土層　やや粘性をもつ細砂。
第9層　黒褐色土層　粘性をもつ細砂。
第10層　暗褐色土層　微量の焼土の混入あり。

第43図　第11号住居址



第44図　第11号住居址出土遺物

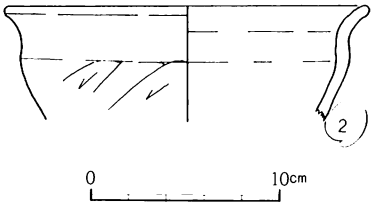
第12号住居址

遺構（第46図、図版５）

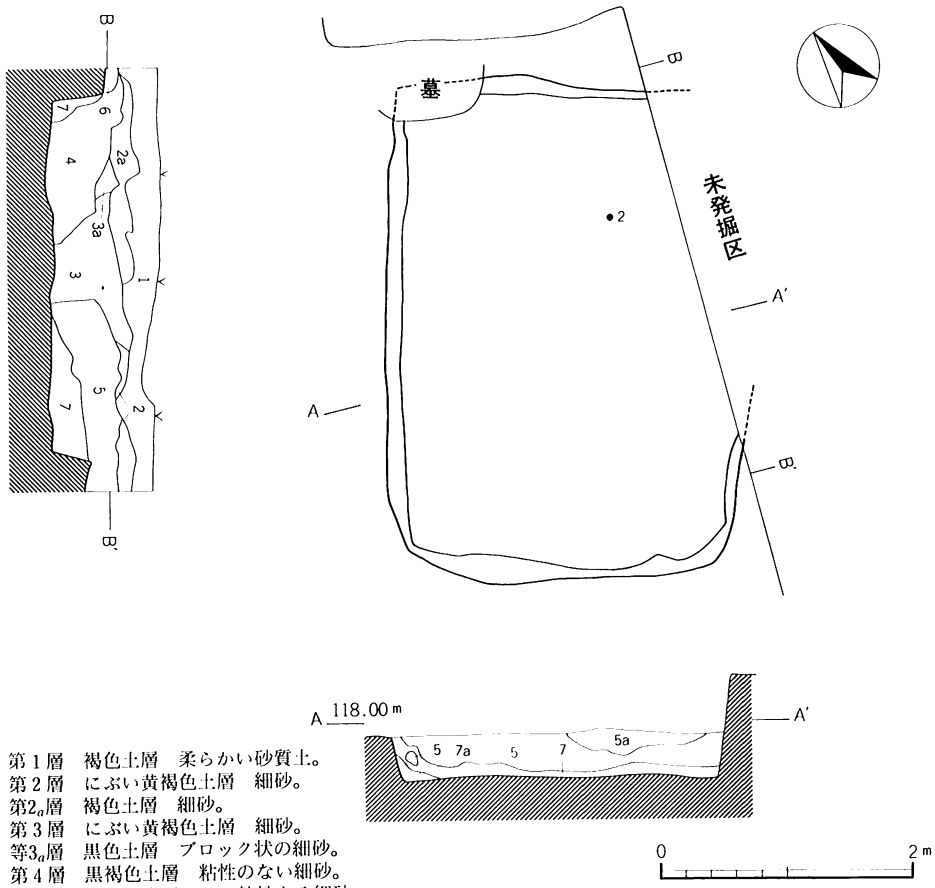
調査区西のＰ・Ｑ—-7・-6グリッドに所在する小形住居址である。本址の東側は墓地のため調査対象外で、北西コーナーは墓壙によって切られていた。このため全体を調査することはできなかったが、規模は、おそらく本遺跡のなかで最小だと思われる。本址に一番近い住居は、墓地を狭んで南東10mに所在する、本遺跡中最大のＨ—１住である。平面形は南北に長い長方形で、東壁は1.8m、南壁は1.2mを測る。面積は、調査範囲で9.5m²、長軸方位はＮ—37°—Ｅを指す。カマドは検出されず。有無については不明である。ロームを掘り込んで構築されており、確認面からの壁高は平均39cmと深い。壁はしっかりしており、急角度で立ちあがる。床面はほぼ水平で、しまった面に仕上っている。貼り床が全面にわたり施され、黒褐色土が厚さ７～８cm敷かれていた。周溝はなく、主柱穴、貯蔵穴も検出されなかった。遺物量が少なく時期の判定は難しいが、他の住居址とあまり変わらない時期に位置づけられるとすれば、本址はそれらの住居址群のなかでも、特異なものと考えられよう。

出土遺物（第45図）

本址の出土遺物は、土師器３点と縄文の流れ込みが７点であった。２は鉢状の土師器である。



第45図　第12号住居址出土遺物



第1層　褐色土層　柔らかい砂質土。
第2層　にぶい黄褐色土層　細砂。
第2_a層　褐色土層　細砂。
第3層　にぶい黄褐色土層　細砂。
等3_a層　黒色土層　ブロック状の細砂。
第4層　黒褐色土層　粘性のない細砂。
第5層　黒褐色土層　やや粘性ある細砂。
第5_a層　暗褐色土層　しまりある細砂。
第6層　暗褐色土層　やや粘性ある細砂。
第7層　暗褐色土層　よくしまった微砂。
第7_a層　褐色土層　ローム質の多い微砂。

第46図　第12号住居址

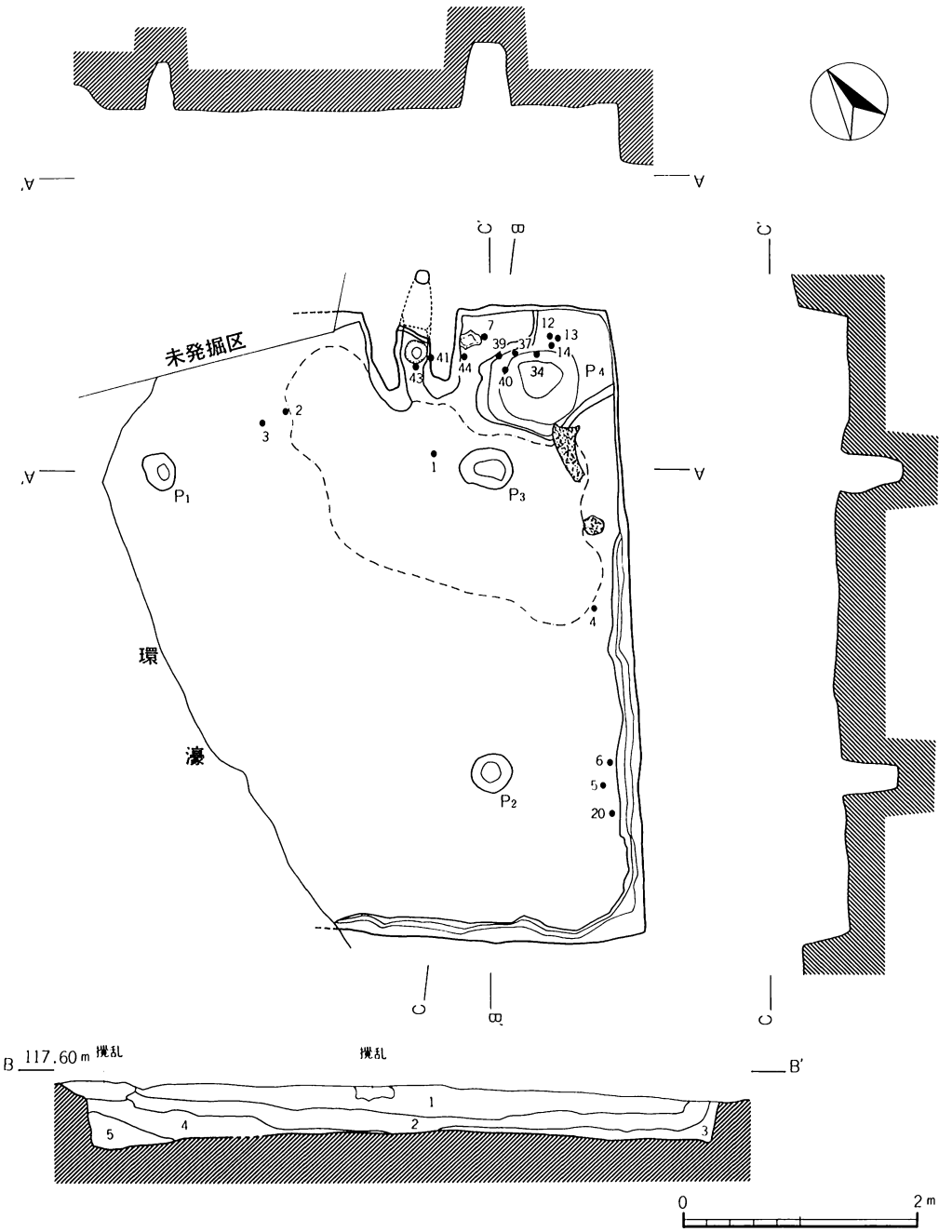
第13号住居址

遺構（第47図、図版6）

調査区の南西隅、Y・Z—-11・-10グリッドに所在する。西側は中世の環濠に切られており、北側は墓地があるため、北壁の一部しか検出できなかった。プランは、本遺跡の住居址の特徴からおそらく正方形を呈するものと思われる。東壁は5.3mを測り、主軸方位はN—30°—Eを指す。ロームを掘り込んで構築されており、確認面からの壁高は44cmと深く、遺存状況は良好であった。周溝は平均の深さが3cmで、東壁の北を除きめぐっている。床面は北側がやや低いほかはほぼ平らで、黄褐色の堅固な面を呈していた。貼り床が施工され、掘り方は東側とカマド付近が下がる。ピットは合計4個検出された。P_1～P_3が主柱穴で、4本柱から成っていたと思われる。P_4が貯蔵穴で、カマドの東のテラス状の所に、円形に掘られていた。

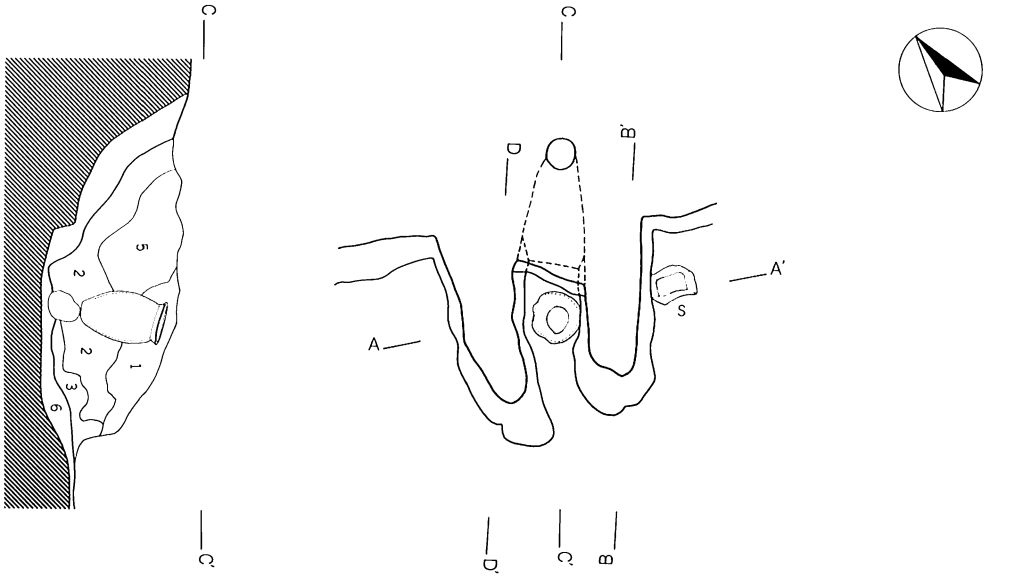
	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	33	26	41
P_2	34	34	48
P_3	46	33	53
P_4	67	63	67

H—13　ピット計測表

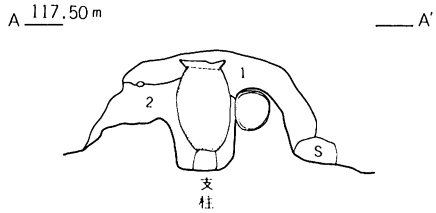


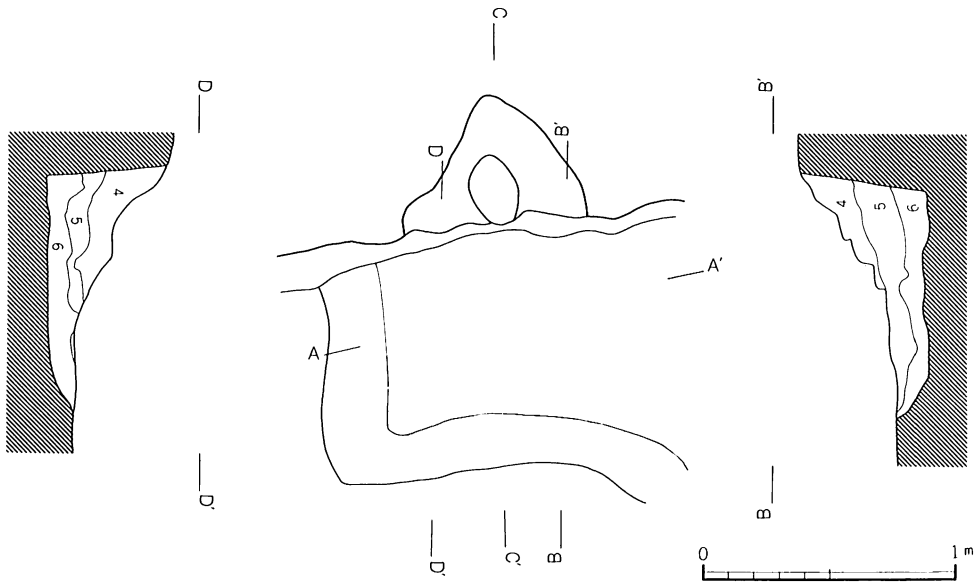
第1層　黒色土層　　φ1～5㎜の軽石を10%包含し、ややしまりを有する細砂。
第2層　黒褐色土層　　φ2～5㎜の軽石を3%包含し、ややしまりを有する細砂。
第3層　褐色土層　　φ2～3㎜の軽石、ローム粒を微量包含する細砂。
第4層　オリーブ褐色土層　φ5㎜の軽石を2～3%包含するやや柔らかい細砂。
第5層　黒褐色土層　　φ2～5㎜の軽石、ローム粒を2～3%包含するやや柔らかい細砂。

第47図　第13号住居址



第１層　暗オリーブ褐色土層　粘性、しまりが弱く、微量の灰を包含する細砂。
第２層　オリーブ褐色土層　やや粘性を有する細砂で焼土と灰が少量混入している。
第３層　暗灰黄色土層　やや粘性、しまりを有する細砂。
第４層　にぶい黄褐色土層　粘性、しまりを有する細砂で、軽石、焼土を５％包含する。
第５層　にぶい黄褐色土層　粘土が主体で、軽石と焼土を少量包含する。
第６層　暗褐色土層　ロームブロックを30％包含する細砂で、粘性、しまりに欠ける。





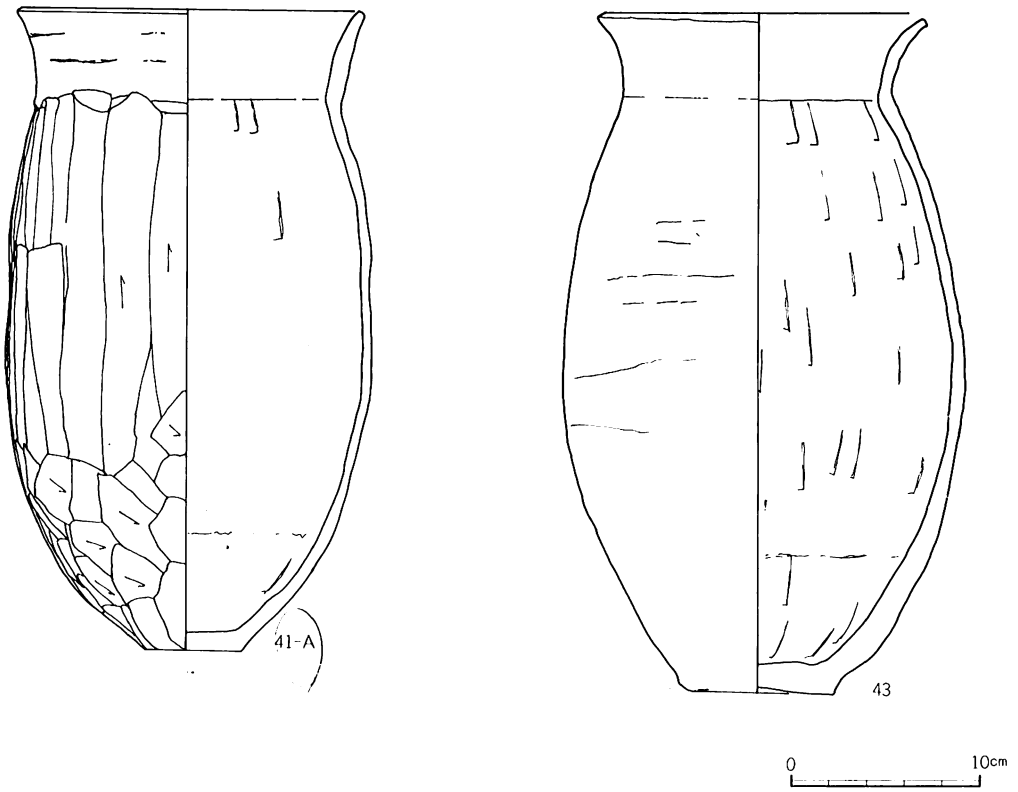
第48図　第13号住居址カマド

カマド（第48図、図版６）

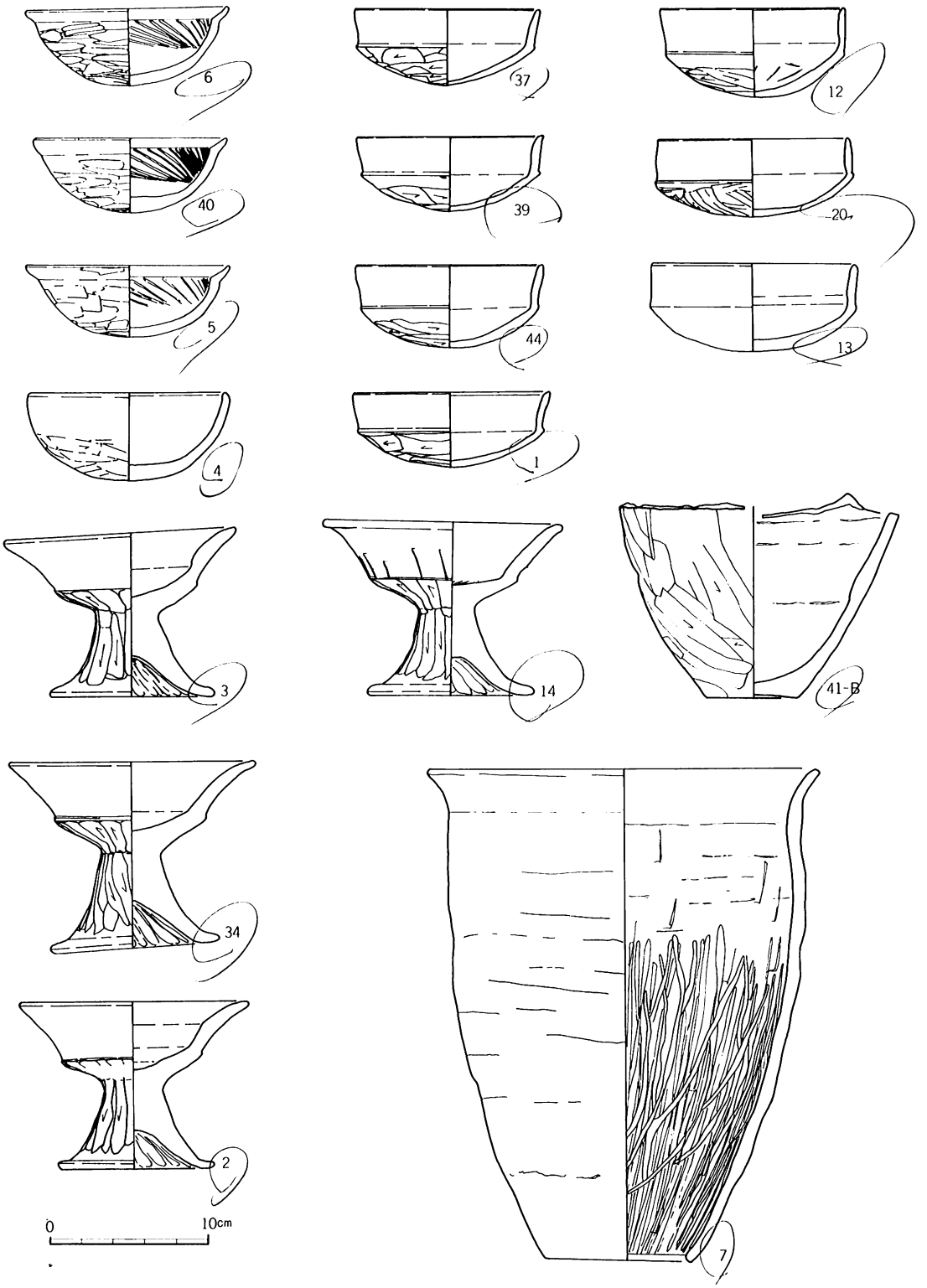
北壁に設置されているが、中央よりやや東寄りに位置するものと思われる。全長121cm、幅88cmを測り、主軸はＮ－38°－Ｅを指す。カマド、貯蔵穴付近は遺物の散布が多く、特に甕が支柱に乗ったままの状態で出土し、一方、甑があたかも右袖に立てかけられているかのように検出された。遺存状況は良好で、燃焼部から煙道部にかけては、粘土でできた天井が残っていた。袖部は基底にロームブロックを包含する暗褐色土を敷き、その上に粘土を用いて構築されている。右袖の先端部は横位の甕が構築材として用いられていた。火床面は床面よりやや低く、焚き口から40cm入った所に支柱を置く。安山岩質の円礫である。煙道部たちあがり角度は62°であった。掘り方は、壁外へ三角形状に最大50cm張り出し、火床下は５～10cm下がる。

出土遺物（第49・50図、図版11）

本址の出土遺物は、土師器25点、流れ込みの縄文土器13点、および若干の埋土遺物である。実測可能な土器は、甕・甑・坏・高坏である。甕は、口縁が緩やかに外反し、胴部が長胴化している。甑は大形で、内面は上部を除きヘラミガキが施されている。坏は、いわゆる内斜口縁を有するもの、外稜を有するもの、口縁部と底部を別ける稜線をもたず半球形を呈するものに大きく分けられる。このうち内斜口縁を有する坏は、内面に暗文をもち、底部が肥厚している。高坏はどれもよく近似しており、稜線を有する坏部が、ラッパ状に裾拡がりとなる脚部に乗っている。



第49図　第13号住居址出土遺物 (A)



第50図　第13号住居址出土遺物 (B)

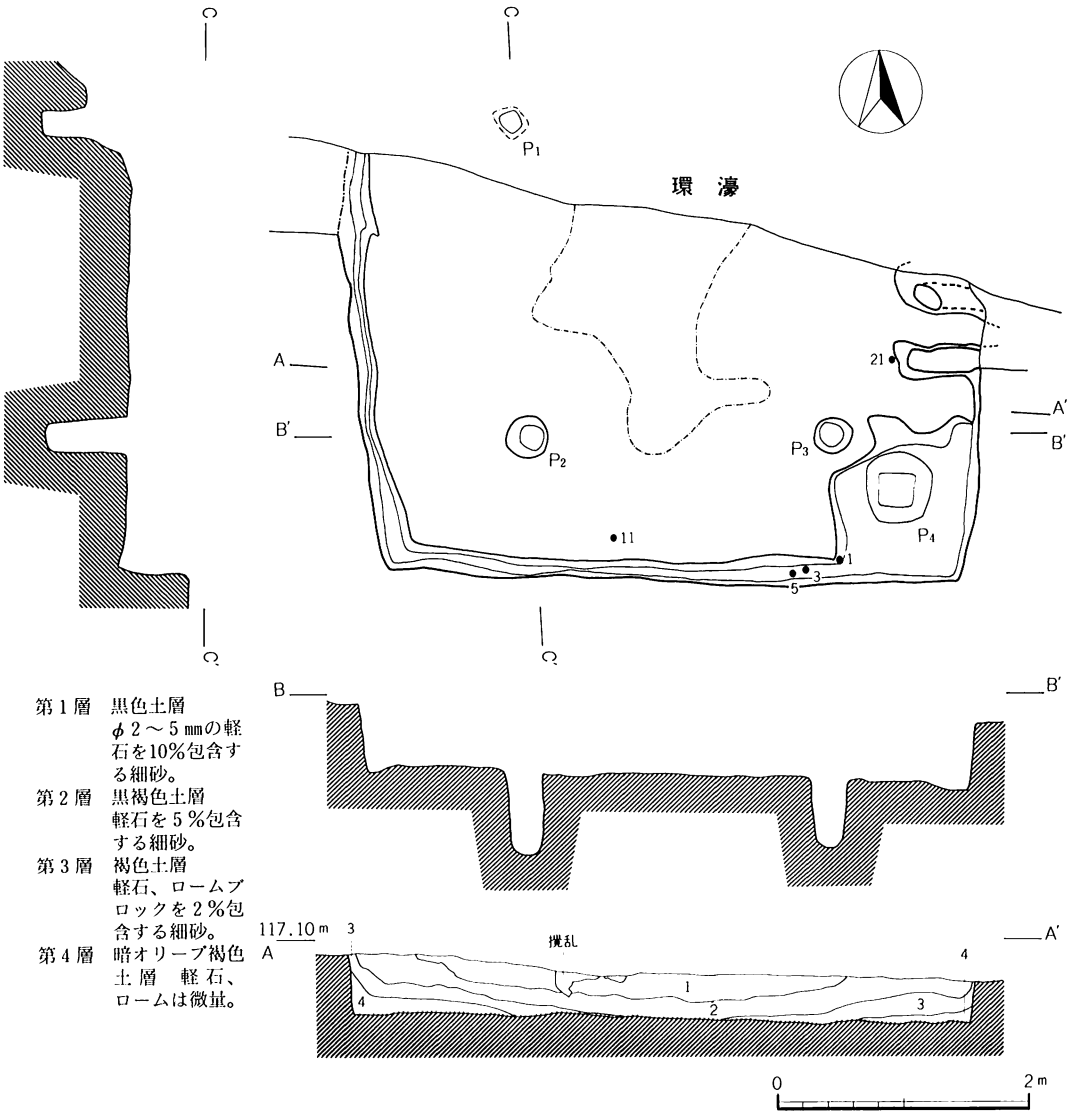
第14号住居址

遺構（第51・53図、図版６）

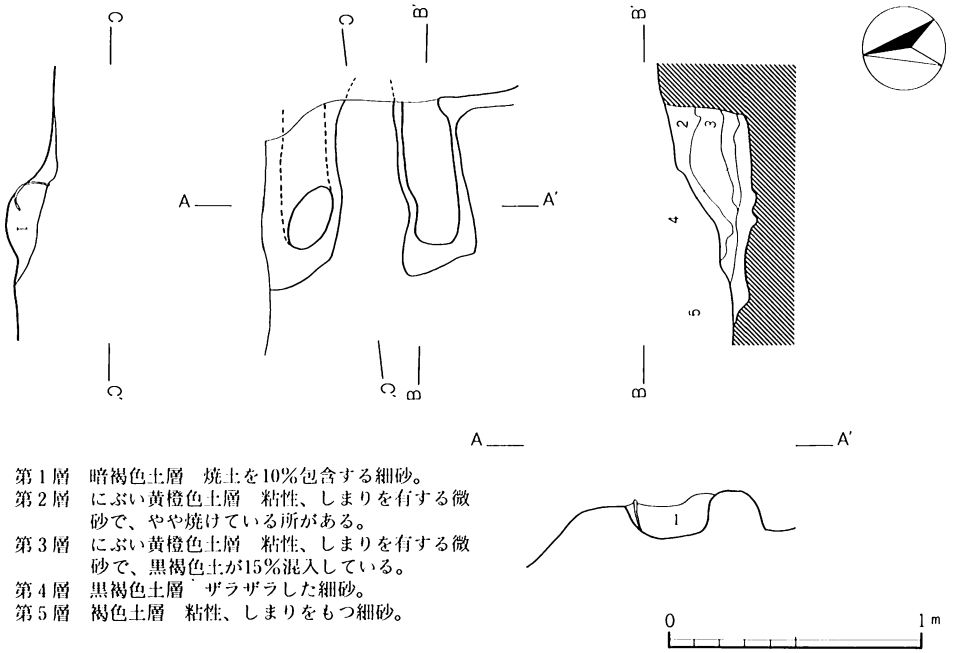
調査区の南、Ｙ・Ｚ―-6・-5グリッドに所在する。北側が環濠に切られているため全貌は摑み得なかったが、本遺跡の住居址の特徴から、ほぼ正方形を呈するものと思われる。北壁は4.5mで、調査面積は20m²である。主軸方位は推定でＮ―30°―Ｅを指す。確認面からの壁高は44cmを測り、周溝は深さ３cmでめぐっている。床面は堅くしまっており、東壁に沿

	長径cm	短径cm	深さcm
P_1	34	33	64
P_2	31	29	54
P_3	52	57	60

Ｈ―14　ピット計測表



第51図　第14号住居址



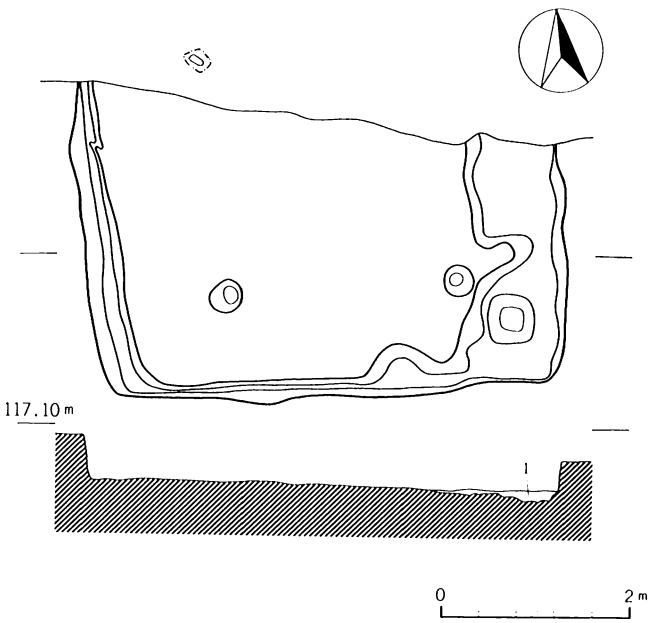
第1層　暗褐色土層　焼土を10%包含する細砂。
第2層　にぶい黄橙色土層　粘性、しまりを有する微砂で、やや焼けている所がある。
第3層　にぶい黄橙色土層　粘性、しまりを有する微砂で、黒褐色土が15%混入している。
第4層　黒褐色土層　ザラザラした細砂。
第5層　褐色土層　粘性、しまりをもつ細砂。

第52図　第14号住居址カマド

い幅1mにわたり、貼り床が施されている。ピットは、主柱穴が3個、貯蔵穴がカマドの右のテラスにそれぞれ検出された。

カマド（第52図）

東壁に設置されているが、環濠の肩が左袖の一部にかかるため残りは悪い。全長121cmを測り、主軸はN－38°－Eを指す。袖部は粘土を主体に構築されており、下部に黒褐色土、褐色土を敷いている。

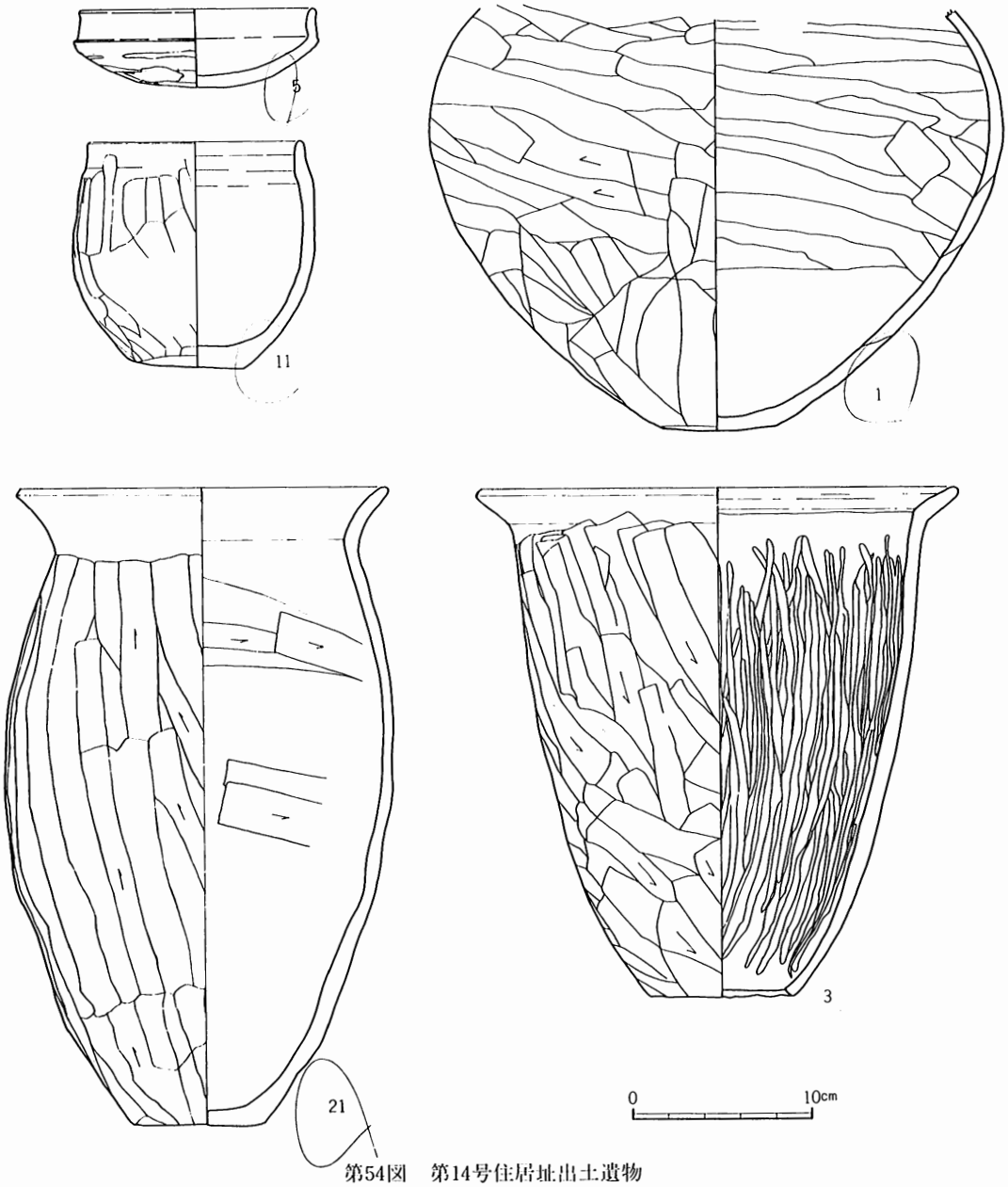


第1層　黄褐色土層　地山ロームと黒褐色土の混じり。しまっている。

第53図　第14号住居址掘り方

出土遺物（第54図、図版12）

本址の出土遺物は、土師器35点と若干の埋土遺物である。11は小形の甕で、肥厚した底部から緩やかに立ち上がる。21は長胴化した胴部をもち、ケズリは縦方向に走る。壺は口縁部が欠損している。甑は内面が黒色で、よく磨かれている。坏は外稜を有し、口縁はやや内傾している。



第54図　第14号住居址出土遺物

第15号住居址

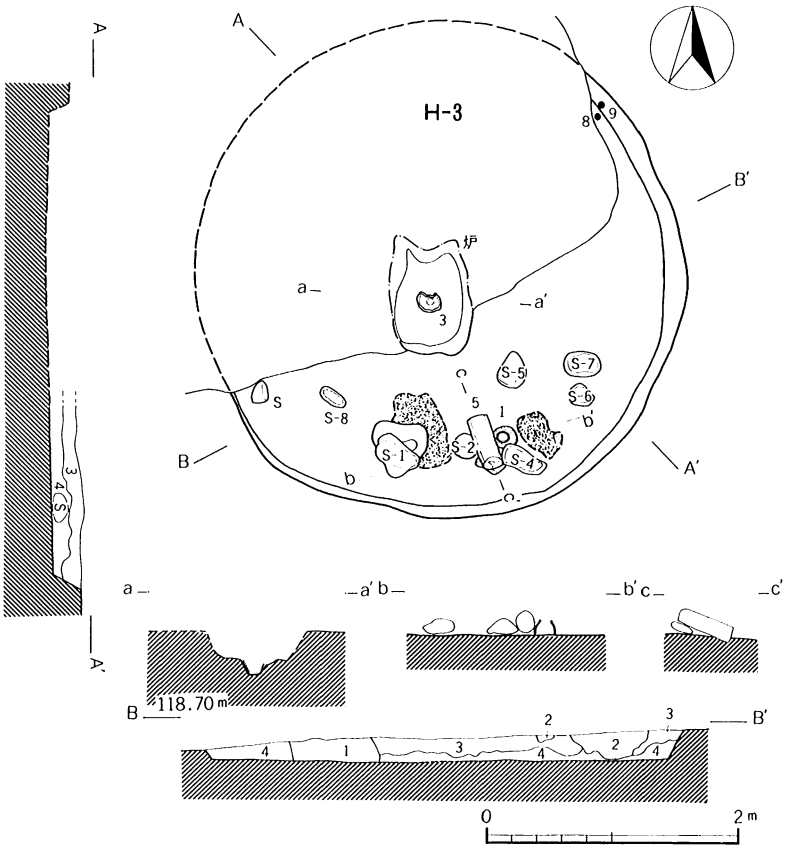
遺構（第55図、図版６）

本住居址は調査区の北端、Ｂ－０・１グリッドに所在する。北側を鬼高期住居であるＨ－３住によって切られているため、約½の部分が遺存していた。調査区全体が南へ傾斜を持つ台地上に立地している中でも、台地の中央に所在しており、やや南へ傾斜を有する面に立地している。縄文時代中期の住居址は本址だけであり、同時期の包含地も見られないことより、可能性として北

へ集落が拡大する事があげられよう。平面形は円形を呈し、径3.9mを測る。上部ローム層より上の漸移層で確認されており壁高は東側で最高27cm、西側で最小10cmである。

床面はローム面に作出されており、ほぼ平坦である。南側に炭化物粒の分布が見られ、二ケ所に集中があった。

ピットは床面を精査したが1個検出されただけである。本住居址の床面レベルが118.40mであり、重複している鬼高期住居の掘り方レベルが118.2cmであることから、20cm内外の深さのピットになることと思われる。検出されたピットは長円形で長径45.0cm、短径32.0cm、深さ30.5cmである。



第1層　黒褐色土層　細砂層。全体に炭化物が入る。やや締っている。
第2層　黒色土層　細砂層。炭化物が少量入る。
第3層　暗褐色土層　細砂層。やや締っており、ローム粒少量混入。
第4層　オリーブ褐色土層　細砂層。固く締っている。

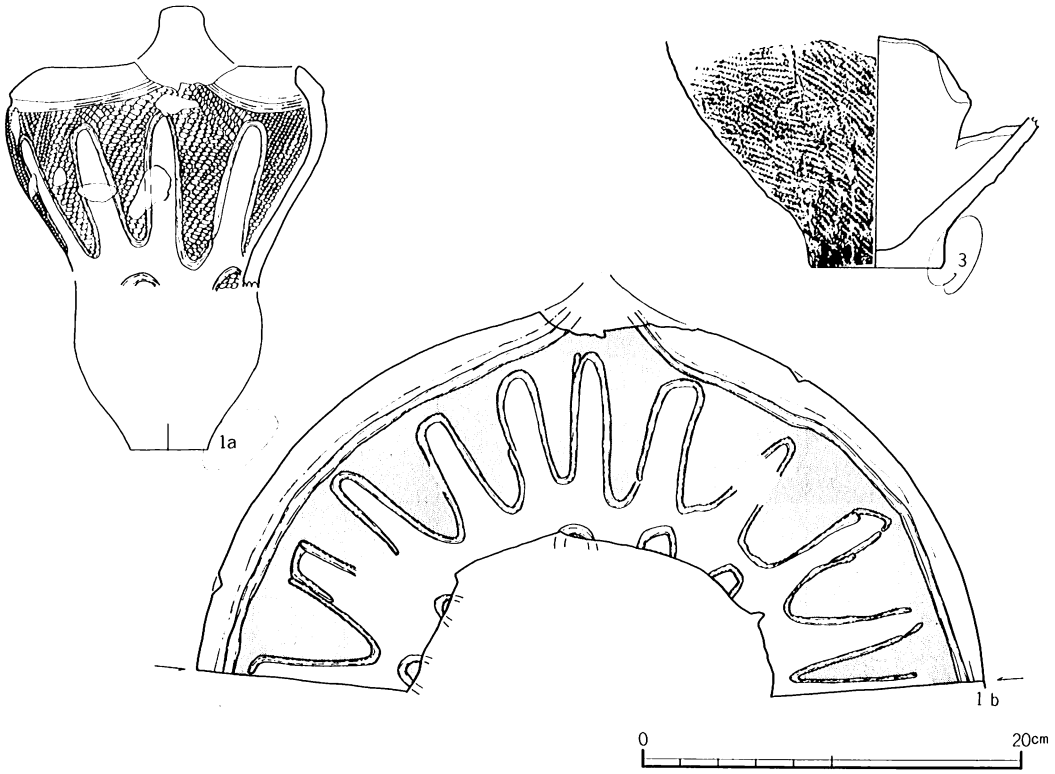
第55図　第15号住居址

炉址は鬼高期住居によって大部分が壊されており、掘り方面を検出したにすぎない。住居址のほぼ中央に位置する埋甕炉の形態をとる。掘り方の規模は長軸96cm、短軸65cm、深さ35cmと比較的大きいものである。埋設されていた土器3は掘り方の底面に接して据えられていた。

出土遺物（第56・57図、図版12）

本住居址から出土した遺物の内訳は次の通りである。土器は総数14点、このうち器形のわかる1、3の深鉢の他に袖珍土器が出土したが盗難にあった。石器、石製品は凹み石4点、蜂の巣石1点、石棒1点、軽石製品2点があげられ、他に礫6点、剝片数点がある。

本住居址の出土状態で石棒と1の深鉢が南側から出土している。石棒の出土状態は直立してい



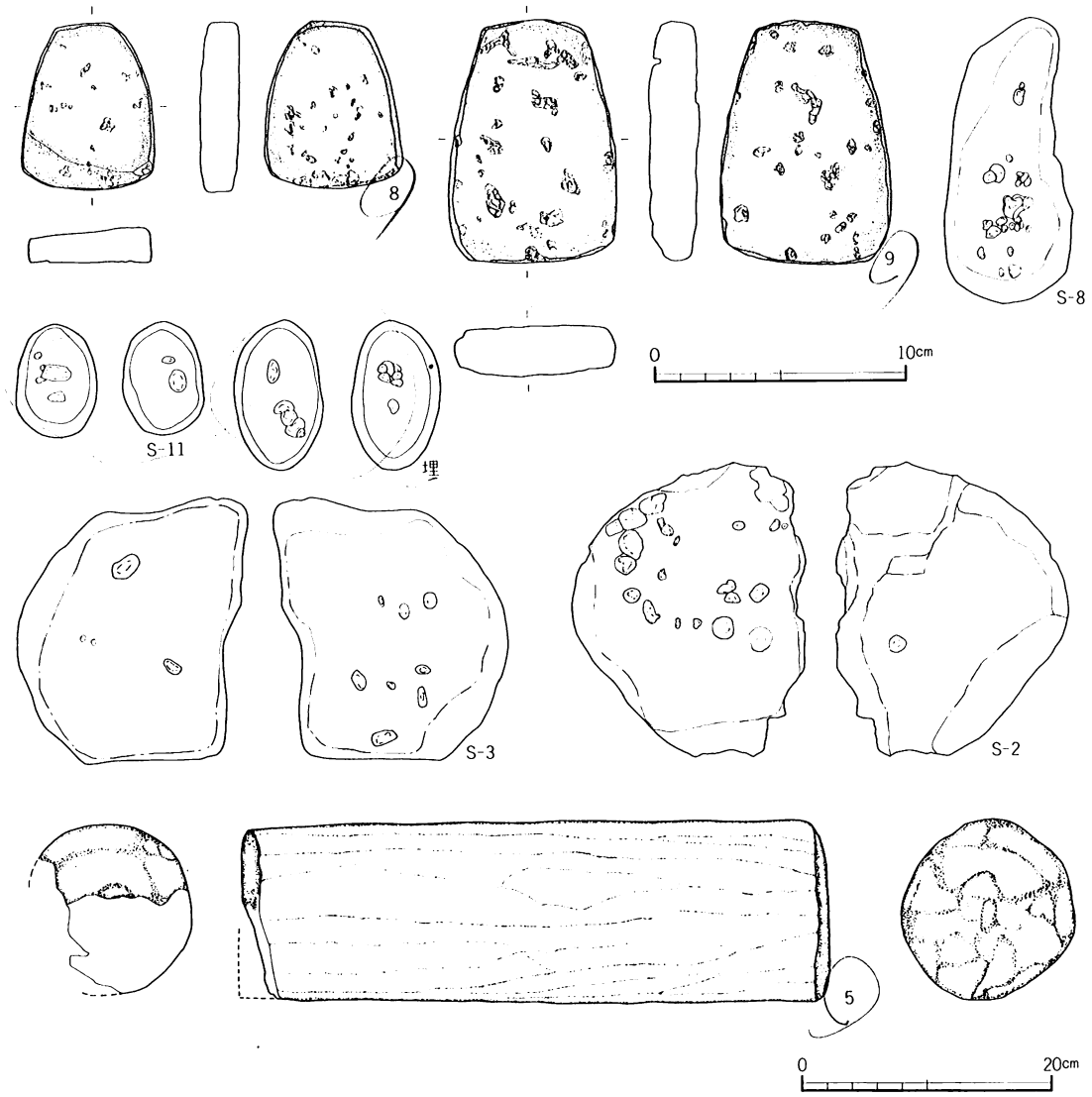
第56図　第15号住居址出土遺物 (A)

たものが、恰も倒れ傾むいて出土したと考えられ、胴下半を欠損する深鉢が伏せられた状態も関連があることを想起させる。また東壁から８、９の２個の軽石製品が、床面から15cmの高さで出土し、西壁から鉢の袖珍土器も石棒、伏甕と一連の所作と想察させうる。

１は突手が１個付され、胴中部でくびれる深鉢である。口唇部直下の内面が肥厚し稜を形成している。文様は沈線で区画を表出するものであり、口縁に平行する沈線と胴上半に連続する曲線の沈線が施される。胴下半はそれに対応して「U」字形の沈線区画が構成される。地文は縄文「RL」が区画内に施される。口縁に平行する沈線に沿って横位施文が一部に認められ羽状効果を作出している。文様構成等から見て加曽利Ｅ３式に比定できる。

３は炉に埋設された深鉢の胴下半部である。縄文「LR」が胴下半から底部にかけて施文された後に底部に丁寧なミガキが施されている。胴下半部は二次焼成を受けて器肌が荒れているが、底部はその影響がないため、良好な状態である。色調は褐色。

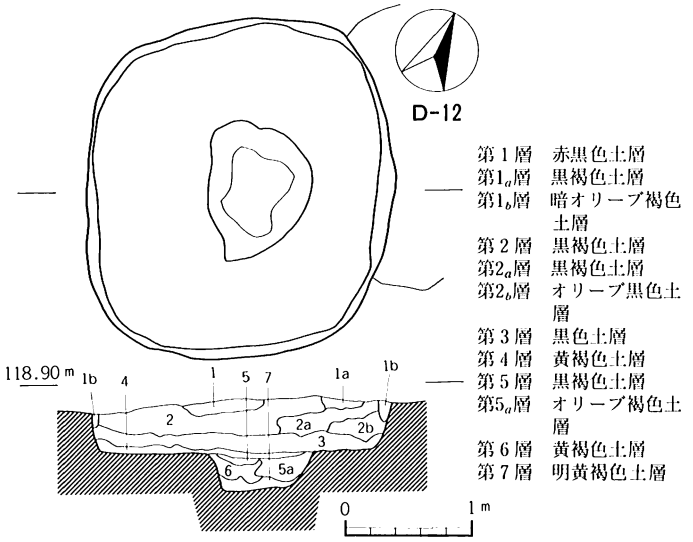
８・９はともに軽石製品である。両面及び側面とも丁寧な研磨がなされ、台形状に作出されている。同様な軽石製品としては長野県軽井沢町茂沢南石堂遺跡出土例があるが、それには両面に円形の凹みが付されており、岩偶としている。本例に関しては凹みは見られないが、形態・製作手法から見て浮子等の日常生活用具とは考えられず、岩偶ないし岩版等の「第二の道具」である可能性が強い。



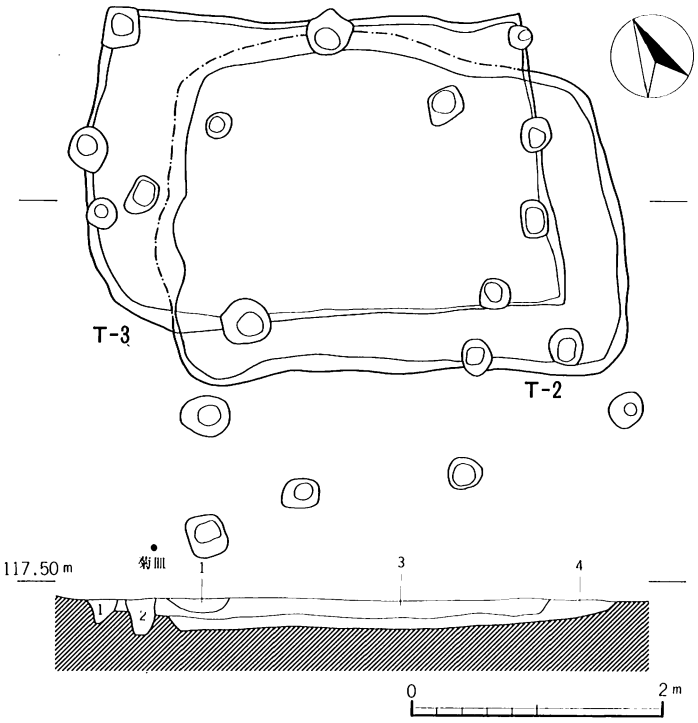
第57図　第15号住居址出土遺物 (B)

S－8、S－11、埋、S－3と4点の凹み石があげられている。まずS－8は、円礫の一面に大孔で径1cm、深さ0.5cmある。一部、加熱により破損、S－11には浅い敲打痕が両面に見られ1面には2ケ所の凹みが見られる。埋も同様に浅い凹みが1面に2ケ所ずつ両面に残されている。次のS－3は、これまでの3個と形状が異なるが片面に1ケ所、径2cmの浅い凹みがある。以上4点とも安山岩製である。S－2は蜂の巣石としたが、凹み石と明確には分離できない。片面に集中して漏斗状の凹みが多数見られる。加熱により破損している。安山岩製。5は長さ47cm、直径14.5cmの無頭石棒である。研磨は幅2cm前後の平面体を一単位としてなされ、全体としては整っている。多孔性の凝灰岩質の石材を用いている。

2. 竪穴状遺構



第58図　第1号竪穴状遺構

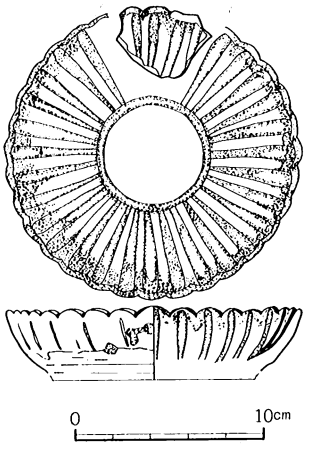


第1層　褐色土層　B軽石を含む。　第2層　黒褐色土層
第3層　暗褐色土層　しまりあり。　第4層　黄褐色土層

第59図　第2・3号竪穴状遺構

本遺跡で検出された竪穴状遺構は、合計3基である。T－1は調査区北の住居密集地、ん・A－1グリッドに所在し、D－12を切っている。プランは隅丸方形で、内部に不整形の落ち込みがある。覆土及び出土した土師器片から、本遺跡の住居址群に関連する可能性がある。

T－2・3は環濠の北、U・V－6・7グリッドに所在する。これらは重複しており、T－3の方が新しい。付近には、遺構内外からピットが19個検出されたが、どのような組合せを持つか不明である。時期も確定できない。なお、T－2の南から、菊皿の破片が出土した。



第60図　菊　皿

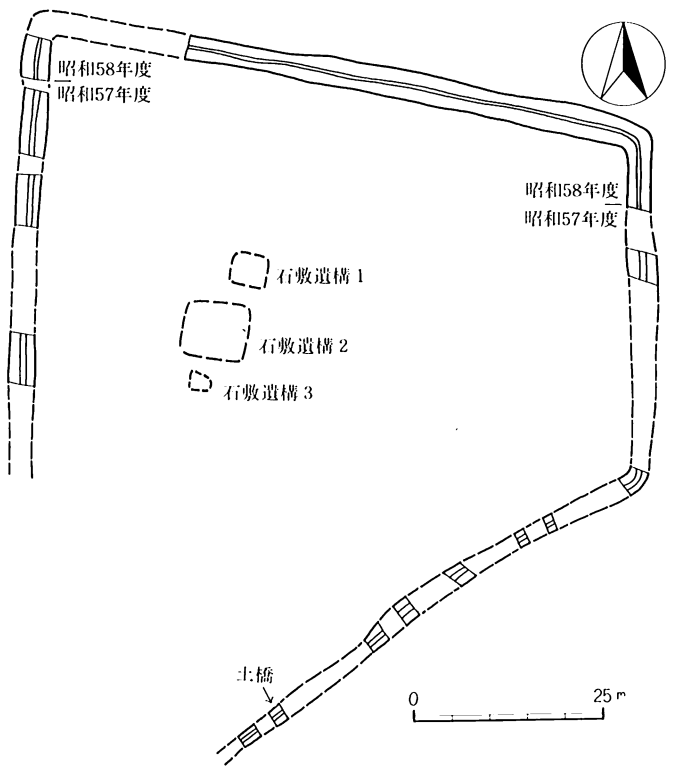
3. 環　　濠

調査区の南端部に、大規模な環濠が検出された。これは前年度の調査でも確認されており、今回の調査とあわせ、概略がほぼ明らかになった。第61図がその平面形で、図からわかるように、本年度の調査は環濠の北辺について、調査を実施したことになる。

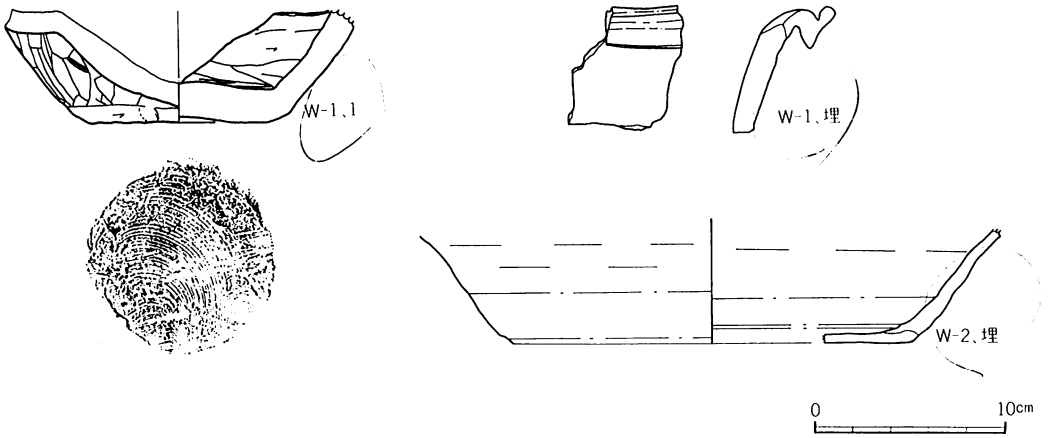
プランは、野球のホームベースを想起させるが、西辺がまっすぐ南に延びるとすれば、横転した台形となる。東辺・西辺はほぼ真北を指し、前者は46m、後者は62mを測る。北辺は東西83mで、方位は真北垂線に対し10°のブレをもつ。南辺は東辺から124°の角度で南西に屈曲し、環濠全体のプランを著しく歪めたものにしている。この南東付近が谷につらなり、落ち込んでいくことを考慮すれば、この南辺の設定は、地形に制約された帰結と推定されよう。南辺の長さは66mである。この南辺の先端付近では、昨年度の調査で土橋が確認されている。

溝の掘り方は、いわゆる薬研掘りを呈している。大きさは、上幅平均4m、下幅平均30cmで、この台地を形成する水性堆積ロームを2mも掘り込んで造られている。掘り込みの状況は場所によりやや異なるが、残存状況の良好地点を例にとれば、肩が20〜30cm崖状に張り出し、その下からきわめてシャープな斜面が露出し、下部に薬研溝が30cmほどの深さで突出している。肩の崖状の張り出しは、おそらく肩の崩落した結果と思われる。すなわち、当初の掘り込みの過程は、まず20〜30cm垂直に掘り込みを入れ、そこから傾斜をつけた面を掘り込み、最後に薬研溝を掘り込んで仕上げとしたと推定されるのである。

覆土は14層に分けられるが時期設定の根拠となりうる層はなかった。また、のろやラミナ状の堆積は全く見られず、水が流れた形跡はない。これは溝が空堀であったことを端的に物語る。事実、付近はきわめて水はけが良く、調査中何度か激しい雷雨に見舞われたが、水はほとんど溜まらなかった。



第61図　第1号溝全体図



第62図　第1・2号溝出土遺物

環濠の北辺南肩より南約3mに、環濠に沿う凹凸の激しい溝状の遺構が検出された。そのなかには、不定間隔に存するピット状の窪みが多数認められた。また凹凸面は、鍬のような工具によって掘り込まれた痕跡で、一単位が明瞭に残っているものもあった。この遺構は、以上のことから考えると環濠内に造られた柵列である可能性がきわめて高い。

出土遺物は、排土量の多いわりにはきわめて少い。北東コーナーの内側肩から出土した金井焼の壺、埋土の常滑焼あるいは渥美焼と思われる壺、その他縄文時代の土器・石器・剝片である。金井焼の壺は、いわゆる軟質陶器で、器肉が厚い。体部はヘラ研磨が施され、銀瓦状のいぶしが見られる。底部は右回りの回転糸切りで、渦が外側に寄っていることを考えれば、回転の速さは非常にゆっくりしていたと推定される。類例は、前橋市内においては、富田遺跡群の中世古墓から出土した骨蔵器があげられる。また、尾島町の長楽寺遺跡からも同様な出土例があるが、本遺跡の方が体部に丸味があり、先行する形態と思われる。時期は、13世紀後半から14世紀前半に位置づけられよう。常滑焼あるいは渥美焼と思われる壺は、にぶい赤褐色を呈し、その口縁形態から13世紀後半に比定できる。

環濠内の施設であるが、本年度の調査では、何も検出できなかった。前年度の調査においても掘立柱建物遺構等の検出はなく、わずかに石敷遺構が3基確認されただけである。この遺構は、石列で長方形に区画されており、可能性としては、古墓あるいは建物跡が想定されるが、明確にはわからない。ただ、この遺構からは、脇差の鍔をおさえる大切羽、刀身と柄を結ぶ目釘・目貫、柄巻の留め金具及び常滑焼・渥美焼の陶器の破片が出土している。大切羽等は南北朝時代頃のもので、陶器類は13世紀後半から14世紀前半と考えられる。

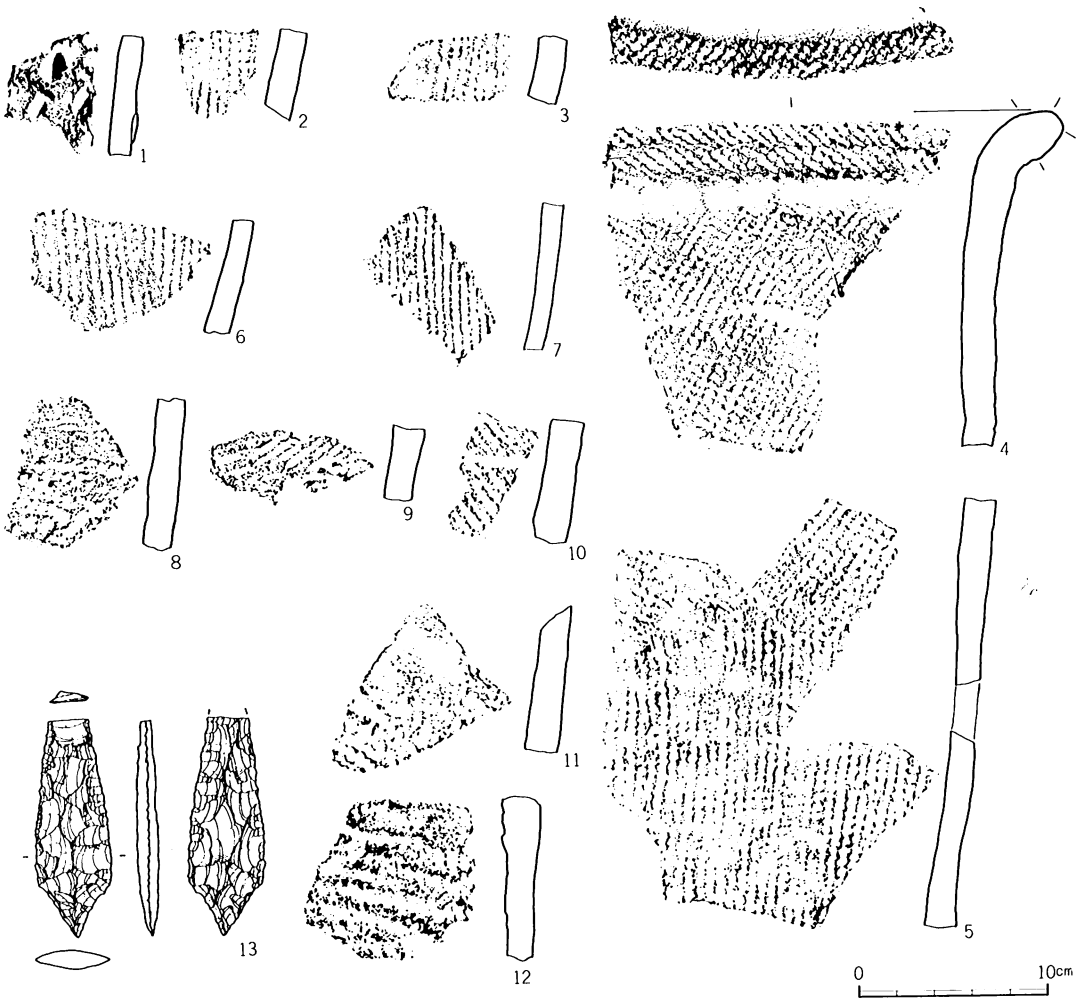
なお本環濠の東部には、もう一つ小規模な環濠がめぐっており、一部重複している。前後関係は後者の方が新しい。覆土は比較的柔かい砂質土で、出土遺物には縄文期から近世陶磁器までが含まれている。

4. 縄文包含層

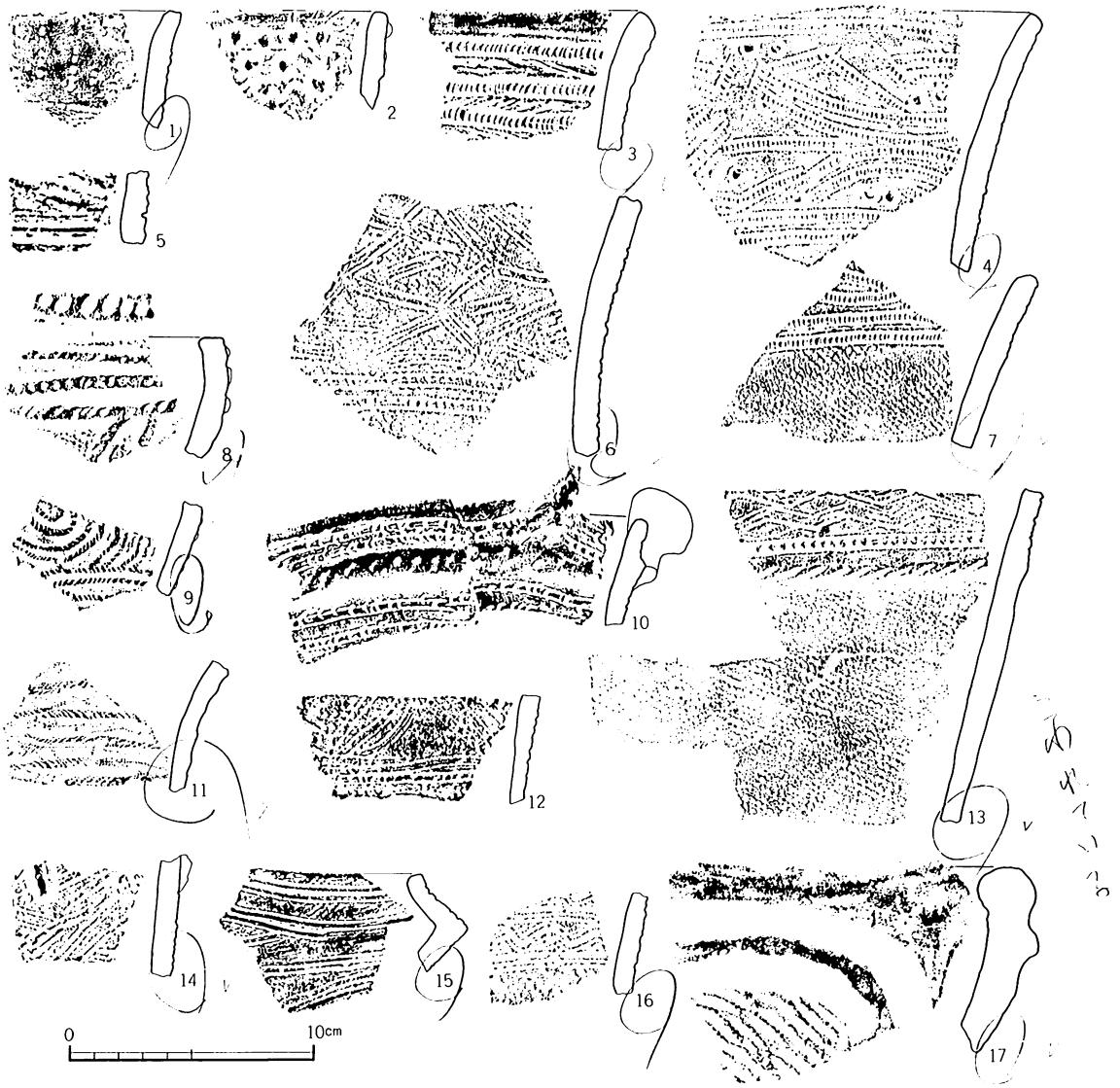
縄文時代の包含層は大きく4ケ所に分布する。総量でコンテナ2箱の土器・石器類の出土がある。概ね縄文時代前期諸磯式期にまとまるが、爪形文土器をはじめとする草創期の一群の存在も重要である。

草創期の遺物（第63図）あ～う－9・10グリッドの約50m²からまとまって出土し、これ以外に出土はない。総数約97点を数えるが、前期の混入も見られる。層位的にはほぼ1層としてとらえられ、ローム漸移層中である。

爪形文土器（1）明黄褐色を呈し、多様な鉱物量を含む。内面には炭化物の付着が見られる。文様は左下りの斜位の半月状の爪形が刺突される。爪形の右部、直線部分に粘土が盛り上がりが観察される。文様構成は刺突が上下に交互に配されている。



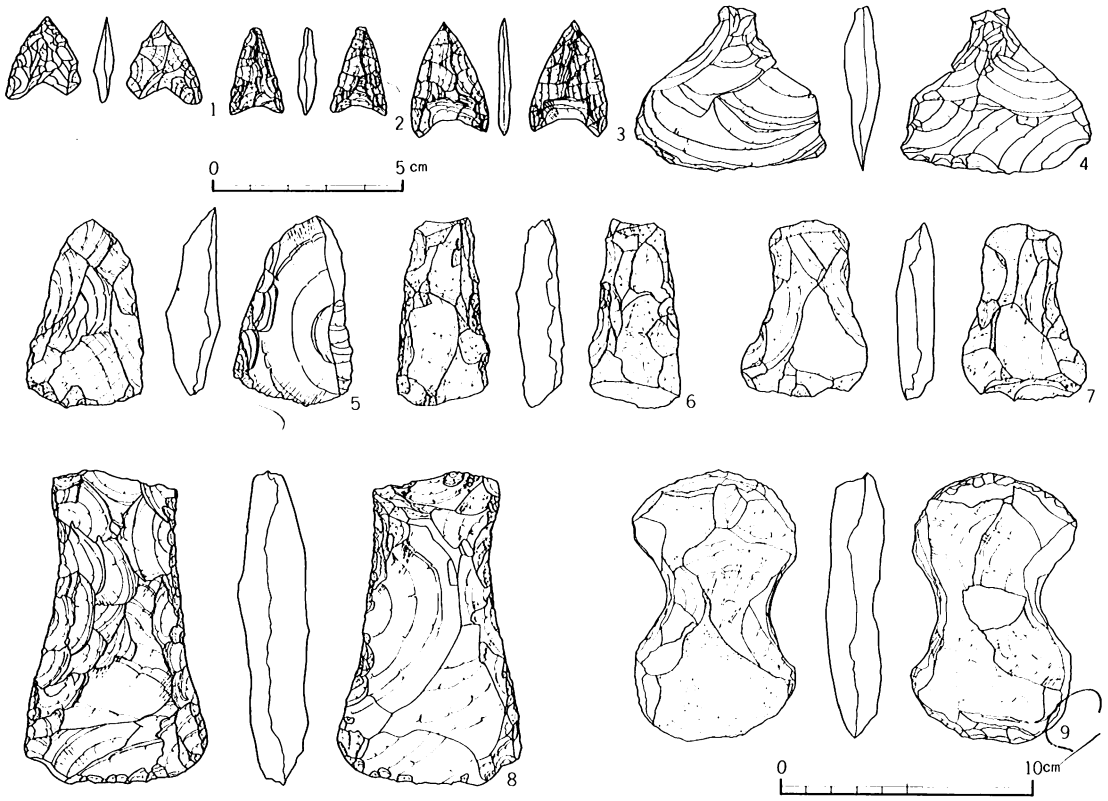
第63図　グリッド出土遺物 (A)



第64図　グリッド出土遺物 (B)

撚糸文土器（2～7・9・10）2・4・5が同一個体片であり他にも数片存在する。2・3・5は口唇部が著しく肥厚し屈曲する土器である。明黄褐色を呈し小量の鉱物粒を混入するが、内面は丁寧に研磨されている。小林（1966）による第Ⅰ文様帯には縦位「R」の撚糸文が施され、第Ⅱ文様帯に「LR」の斜縄文が見られ、次の第Ⅲ文様帯の境に指頭圧痕が顕著に認められる。第Ⅲ文様帯は、3条の縄文施文がなされ稜が形成される。まず口唇内面に「LR」の縄文、口唇部に「RL」の縄文が施され羽状縄文を構成し、更に「RL」の縄文が一条施される。3・6は胎土と「L」の撚糸文が共通する事から同一個体である。7は「R」の撚糸文、9は「L」の撚糸文が施文される。10は「L」の撚糸文を施し、「LR」の縄文による原体圧痕が認められる。

縄文施文の土器（8・11・12）8は「LR」の縄文が施される。11・12は同一個体片であり「RL」



第65図　グリッド出土遺物 (C)

縄文が粗い間隔で施文されている。これら縄文施文の土器は前期の可能性も考えられることから即断はゆるされない。

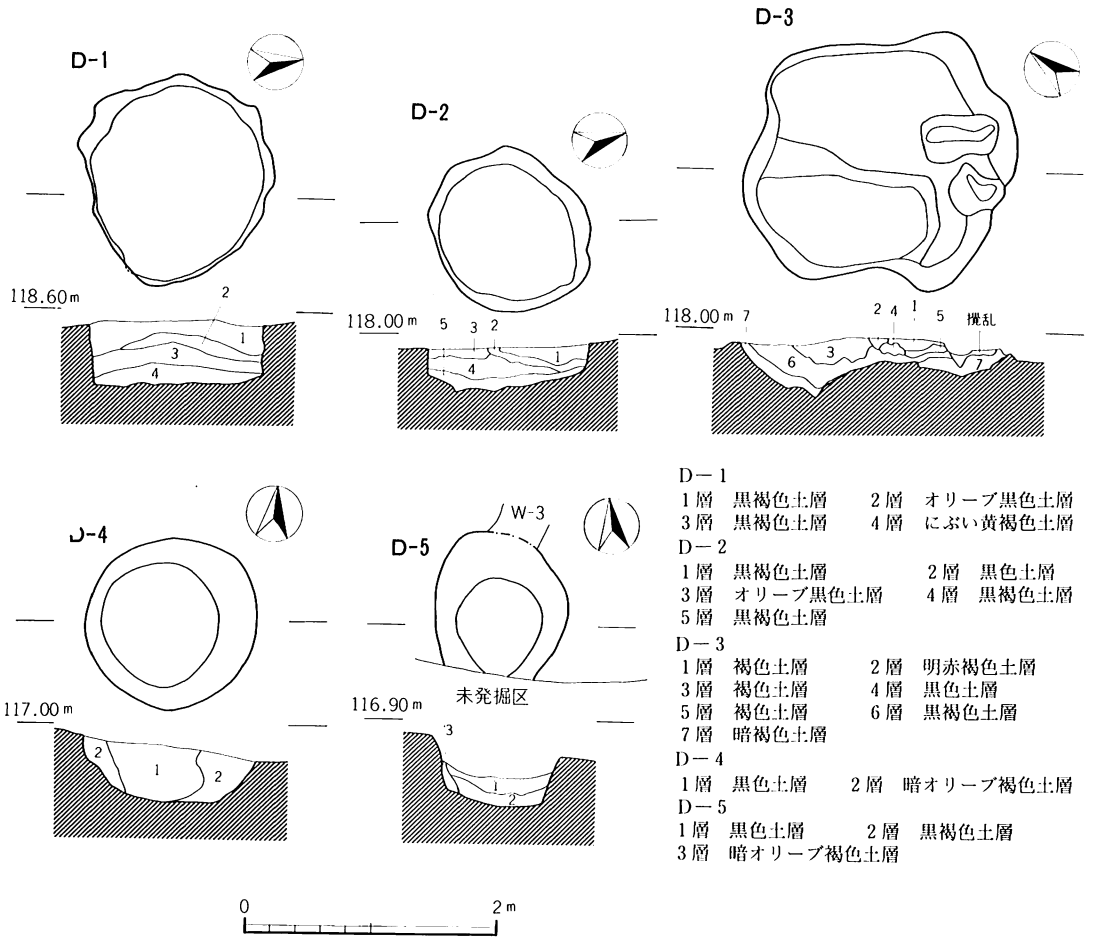
有舌尖頭器（13）先端部を欠損している。両面とも丁寧な押圧剝離によって作出されている。逆刺は明瞭に作出される。

前・中期の遺物（第64・65図）諸磯式土器が主体を占め、加曽利E式土器がわずかに認められた。包含層はD・E－4～6グリッド、G～K－(-3)～4グリッド、L～0－2～6グリッドの三地点に存在する。1・2・5は繊維を含む。1・5は同一個体片と思われる。口辺に縦方向の連続刺突を施し、斜位、横方向の刺突がなされる。2は山形の平行竹管文を施文した後、粘土瘤がほぼ交互に貼付される。3・4・6・7・10・12・13は竹管による平行、曲線や爪形文によって構成される。8・9・11は浮線文が見られ、14～16は沈線文で構成される。14は集合沈線で粘土の貼付が見られる。1・5は有尾式、2は関山2式、14が諸磯c式、17が加曽利E3式に比定でき、その他は諸磯b式期に該当しよう。

石器は石鏃（1～3）、石匙（4）、石斧（5～9）であり、2・3・4が安山岩であり、その他は頁岩である。特に9の分銅形石斧の凹れ部には着柄による磨耗痕が顕著に認められることと、5は小形の片刃石斧である。

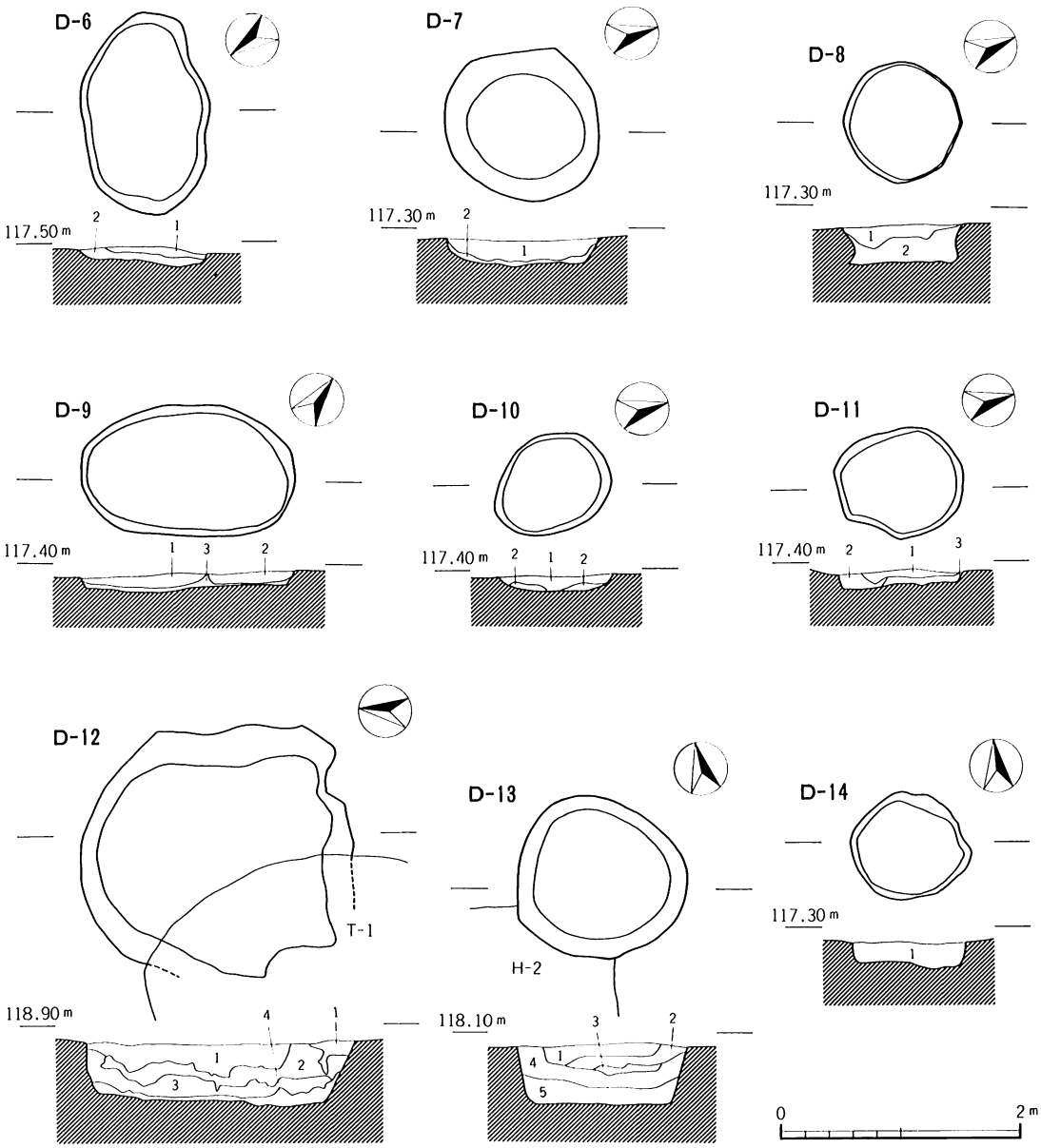
5. 土　　坑

検出された土坑は、合計15個を数える。調査区北の住居址周辺部に５基、W－１とW－２の間に６基、比較的纏まりをもって存在するが、残りは各所に点在している。形状は概ね円形か楕円形で時期の確定は難しい。D－３はH－５住の南に位置し、上部に焼土が検出された。形状は不整形で、掘り方は凹凸が激しい。D－５は、W－３によって上部を切られている。D－６は縄文包含地内に存し縄文前期諸磯ａ式土器片が出土している。D－12は、H－３住とH－９住の間に所在し、T－１により切られている。プランは楕円形で、縄文前期関山式土器片が出土している。D－13はH－２住と重複しており、住居址北東コーナーを切っている。このほかに、土坑ではないが、いわゆる落ち込みが２か所で確認されている。O－１は、T－２とW－２の中間にあり、覆土にC軽石が認められた。O－２はH－２住と重複しており、住居によって切られていた。



D－１
１層　黒褐色土層　　２層　オリーブ黒色土層
３層　黒褐色土層　　４層　にぶい黄褐色土層
D－２
１層　黒褐色土層　　２層　黒色土層
３層　オリーブ黒色土層　　４層　黒褐色土層
５層　黒褐色土層
D－３
１層　褐色土層　　２層　明赤褐色土層
３層　褐色土層　　４層　黒色土層
５層　褐色土層　　６層　黒褐色土層
７層　暗褐色土層
D－４
１層　黒色土層　　２層　暗オリーブ褐色土層
D－５
１層　黒色土層　　２層　黒褐色土層
３層　暗オリーブ褐色土層

第66図　第1～5号土　　坑



D－6
1層　褐色土層
2層　褐色土層

D－7
1層　黒色土層
2層　褐色土層

D－8
1層　黒色土層
2層　黒褐色土層

D－9
1層　黒色土層
2層　暗褐色土層
3層　褐色土層

D－10
1層　黒色土層
2層　褐色土層

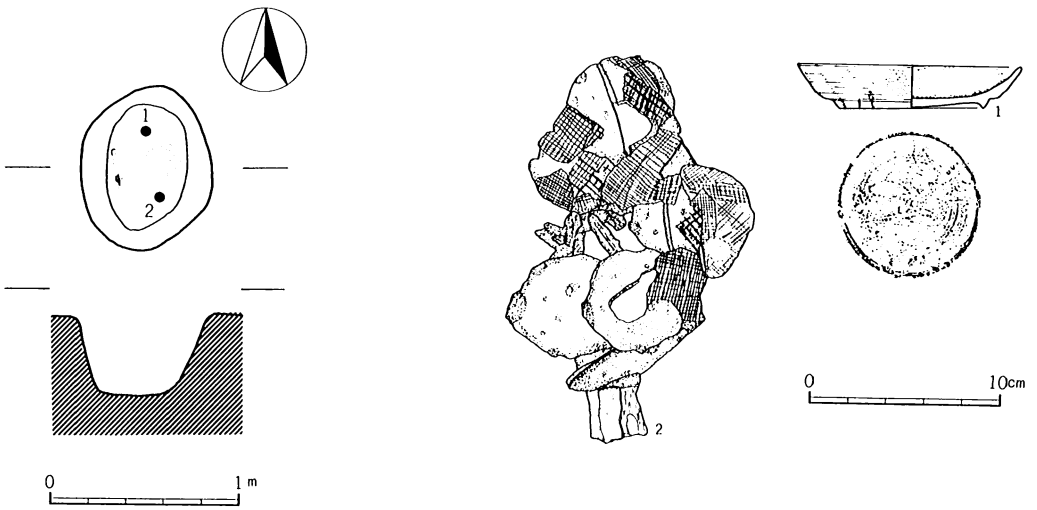
D－11
1層　黒色土層
2層　黒褐色土層
3層　褐色土層

D－12
1層　黒褐色土層
2層　暗褐色土層
3層　暗オリーブ褐色土層
4層　オリーブ褐色土層

D－13
1層　暗褐色土層
2層　黒色土層
3層　灰黄褐色土層
4層　暗褐色土層
5層　黒褐色土層

D－14
1層　黒褐色土層

第67図　第6～14号土　　坑

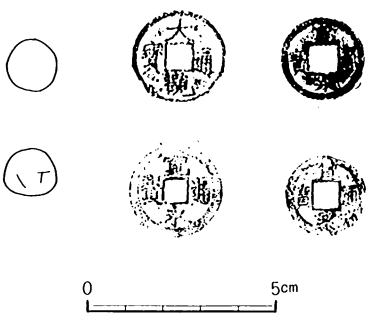


第68図　第15号土壙と出土遺物

D－15は、調査区の東南、V・W－12グリッドに所在する。調査区付近に墓地が点在したことは前述したが、これは墓地から離れた場所である。上部に礫が多数詰め込まれており、その礫を除去した段階で、人骨・鉄製品・皿が確認された。遺体は座棺で葬られていたと思われる。鉄製品はかなり錆ついていたが、上部に円形の中空部分があり、そこには細長い口が明瞭に残っていた。これにより、鈴であることが判明した。この鰐口の一部には、付着した布痕が認められた。座金物には稜があり、軸は座の中央からやや外れている。この鈴は、おそらく儀礼的なものに使用されたのだろう。皿は、志野風の美濃焼で、17世紀前半頃のものと思われる。長石釉が施され、高台は削り出しになっている。

6. 表 採 遺 物

グリッドで取り上げた縄文時代の土器・石器のほかに表採遺物として鉄砲の玉1個、古銭4個があげられる。鉄砲の玉はH－14住のすぐ南で出土した。鉛製で、おそらく火縄銃の玉として用いられたと思われる。形状はかなり歪んだ球形で、使用痕なのか一箇所扁平な面があった時代は不明である。古銭は、3個が寛永通宝で、1個が大観通宝である。大観という年号は、中国の北宗の時代に見られ、時期は1107～1110年である。これは、いわゆる宋銭である。



第69図　表採遺物

V　ま　と　め

端気遺跡群は、赤城山南斜面の末端部の舌状台地に占地する。この下に、まさに関東平野が拡がっており、裾野と平野は、比高数mの崖により截然と区分されている。今回の調査の結果、縄文時代の草創期の遺物および中期の住居址１軒、古墳時代の住居址14軒、中世の環濠１条が検出され、この台地に展開された先人の足跡を知るうえでの貴重な資料が得られた。以下各時代ごとに、若干の所見を述べてみたい。

縄　文　時　代

草創期　　爪形文土器、撚糸文土器と有舌尖頭器が同一グリッドから出土しており、層位も同一層としてとらえられた。草創期の土器編年は隆起線文、爪形文、押圧縄文、撚糸文といった見方がなされている。しかし爪形文の編年的位置は隆起線文土器と押圧縄文の間にあるが、層位的に検出された例は少ない。本遺跡出土の爪形文は横位水平で上下交互に粗く刺突されたものであり、境町三ツ木遺跡例と類似する文様構成をもつものと言える。有舌尖頭器は逆刺が顕著に見られ、身と舌部の区分が明瞭となるものであり、埼玉県西谷遺跡と形態的に共通をする。この型の有舌尖頭器は隆起線文系土器と共伴する例が多いが、西谷遺跡では採集品であるが爪形文・押圧縄文との関係が考えられる点、本遺跡出土の有舌尖頭器についても爪形文との関連を考えておきたい。

撚糸文土器は特に口縁部が肥厚、外反を示し、口縁部文様帯を明確に表出している。平根山、馬の背山、西之城貝塚でより古い井草式と認識された一群と共通する土器である。小林1966でいう JY 型に該当し、井草Ｉ式土器の範疇でおさえられるものである。

ここで、三者の出土状態であるが、有舌尖頭器と井草Ｉ式土器は、約60cmの距離に分布し、爪形文が約３m離れて、これらが同一層中の同レベルから出土している事実がある。爪形文と有舌尖頭器との共伴は考えられるが、更に井草Ｉ式段階での共伴がありうるかは残された課題である。

前期　　諸磯ｂ式土器を主体とする包含層の存在は、やや谷地形の所に土器を廃棄したものと考えられ、新里村武井・城遺跡と共通する。諸磯ｂ式も今後細分を必要としようが、有尾式土器の検出は赤城南麓域にも分布が及ぶことが確認された。特に秋池・新井1983が指摘したように胎土に多量の繊維を混入する特徴を有している。２片の出土であるため、文様構成は不明な部分が多いが平縁を呈し、口縁に沿って縦位の連続刺突文が見られ、斜位の刺突が菱形構成をとるものと思われる。下部に平行沈線を施した後に連続刺突文が入っている。ただ有尾式土器と共伴を考えられる黒浜式土器の存在は見られなかった。

石器は石鏃・石斧の他、多数の剝片が見られた。このうち、小形の片刃石斧が検出されておりこれらは富樫1976でトランシェ様石器として集成されたものと同一である。富樫によればトランシェ様石器は早期の貝殻文土器に特徴とされ、東北・北海道の一部に分布するという。しかし、

本遺跡例や小神明遺跡群IIの調査によって諸磯期の石器にも存在する事が指摘できる。

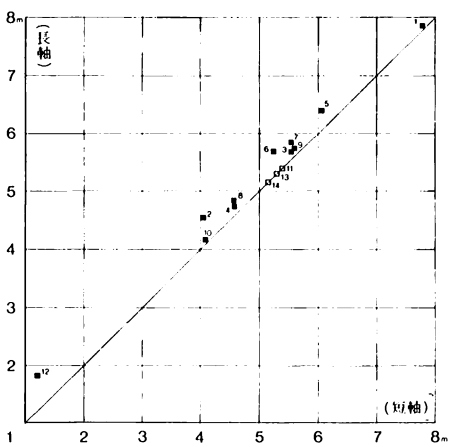
中期　第15号住居址はその出土土器から加曽利E３式期に位置づけられ、ほぼ完形の無頭石棒の屋内出土例として好資料であった。出土品には２個の軽石製品と袖珍土器があり祭祀的な意味合いを強めている。また、胴下半を欠いた深鉢が伏せた状態で出土している事は、石棒と埋甕の関係と同様な位置づけが考えられる。

古　墳　時　代

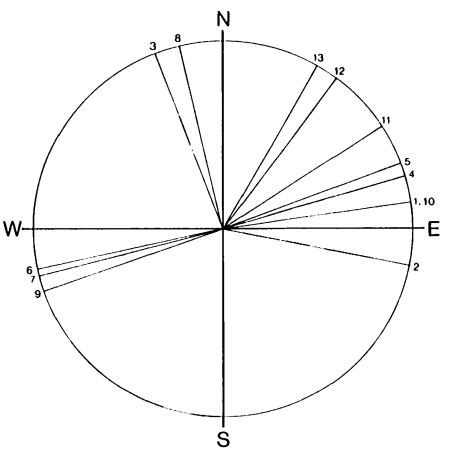
住居跡　住居群の広がりは東西は崖になっていることから、北へ延びる事が昨年の調査を含めて判明した。古墳時代の住居跡は14軒を数え、ほぼ鬼高Ｉ期後半の集落といえる。これらの住居址は重複関係を有することや近接する住居の存在から一時期の集落構成と考えられない。また、須恵器や玉を有する大形住居や須恵器と手捏を併せて持つ住居址の存在や、大形住居の立地にも集落の特異性が見られた。

住居址は基本的に正方形、隅円正方形の平面形を呈しているが、Ｈ－12住１軒だけが非常に小形の長方形プランであった。全般的に20～30m²の床面積であるがＨ－１住は１辺が８m近い大形住居であり、出土遺物、他の住居から離れて位置する等、特異な存在であった。床面の深さもＨ－１住は深い掘り込みを有していた。

住居の主軸は、大きく４方向分けられた。Ｈ－３・８住、Ｈ－６・７・９住の指向性は他の要素においても共通性が見い出せる事から、時期差の表われと看取できる。主軸は地形的な制約がない場合、集落配置計画に沿ったものと考えられる。しかし、住居毎の居住空間利用や家と家を結んでいる道を考える上では、主軸そのものより入り口やカマドの付設位置が重要であろう。本集落は自然環境を考慮した場合、入り口はまず南壁に設置される。事実、４軒の住居址から南壁に高まりやピットが見られ、床面の踏み固め部分も南壁に接するのが９軒に見られる。このことから入り口は南といえそうである。カマドの位置に左右される事はなく、ほぼ南壁に入り口が設置されるものである。また住居の間取りに関連するといわれている間仕切溝も５軒から検出され、



第70図　住居址の規模



第71図　住居址の主軸

いずれも一辺5.5mを超える大きな住居址に存在している。間仕切溝は四柱を結んだ外側に作出され、住居毎に設置位置は異なっている。このことは、竪穴毎に空間利用の仕方が異なっていたことと解釈されよう。

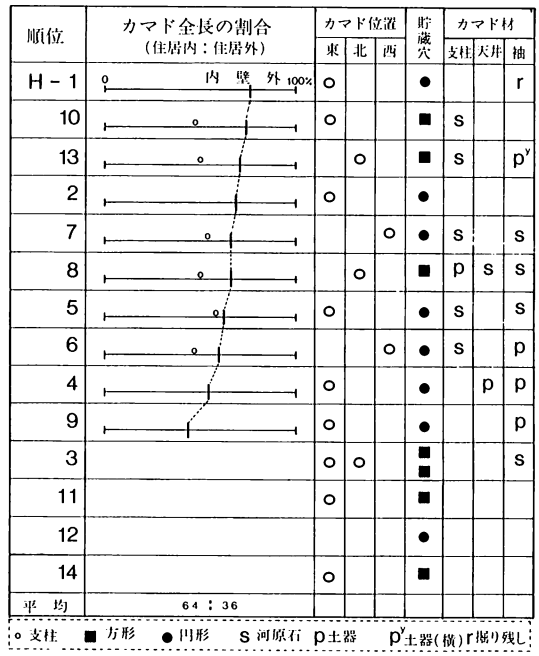
住居の掘り方は大きく四分類できたが、掘り方と間仕切溝の重複が見られない。掘り方のほとんどが南壁に沿って施されるためなのか、入り口部であるがためなのか釈然としない。カマドと貯蔵穴の位置については関連が見られるが、カマドの位置や構造と貯蔵穴形態においても関連が見られた。カマドの壁外への突出は新らしくなるにつれ進行するが、それに符合して構築材に長甕が用いられると同時に、貯蔵穴形態も方から円形へと変化をする事が第73図に示してある。また北カマドには方、西カマドには円、東カマドには円、方形の貯蔵穴が見られる。今後、広範囲に資料を分析して行けば各時期の変遷がとらえられる事と思われる。

形態	特徴	住居址
	方形周溝状	H－3
	「L」字状	H－1 H－5 H－8 H－13 H－14
	一壁に沿う	H－2 H－4 H－6 H－9
		H－7 H－10 H－11 H－12

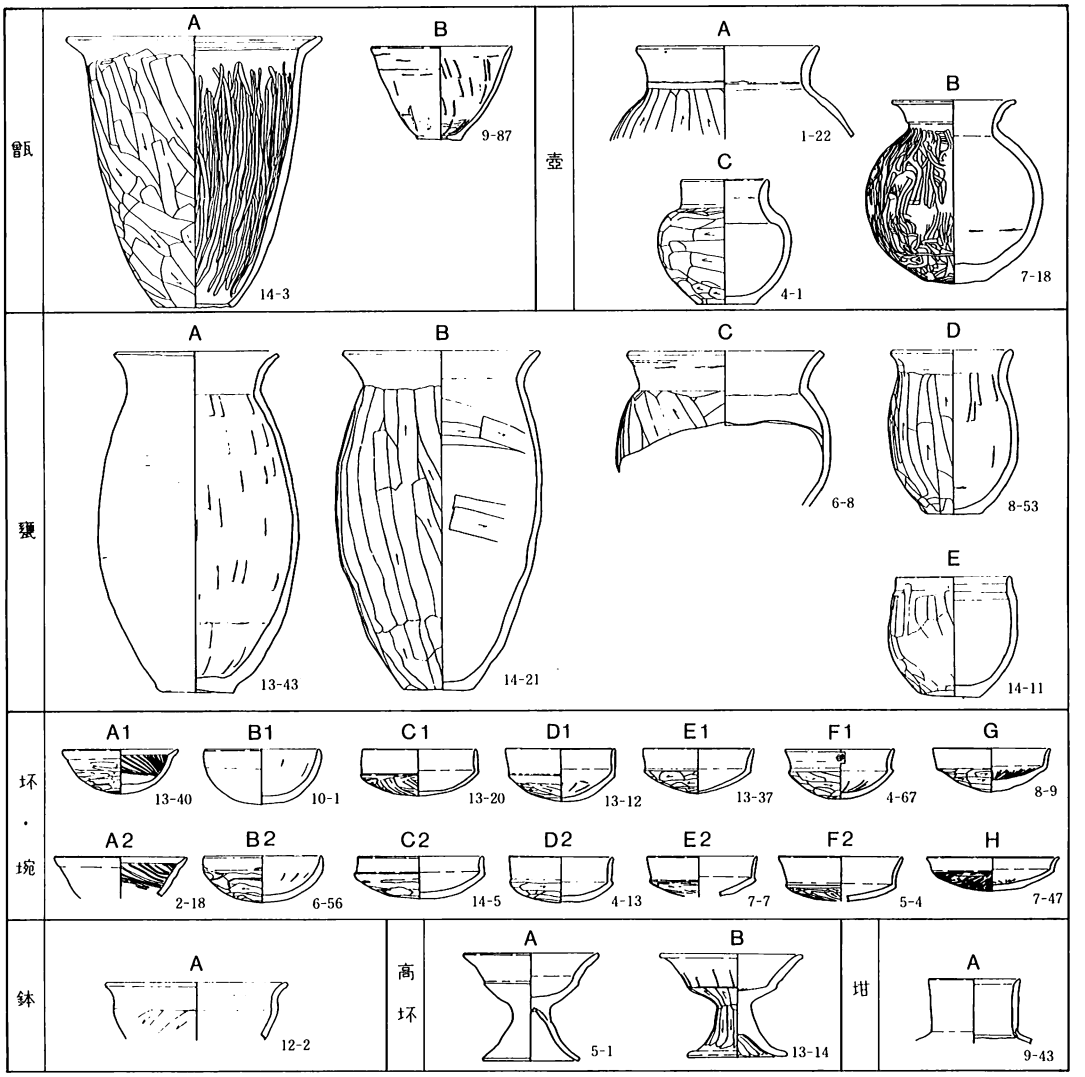
第72図　掘り方の分類

出土遺物　　端気遺跡群出土の遺物は、おおよそ鬼高Ⅰ式期後半のものである。住居址覆土にFA 層が存在しない事から少なくとも6世紀初頭以降といえる。

14軒の出土遺物のうち図示しえたものが105点を数える。これらを器形別に見ると甑5（A3、B1、甕の転用1）、壺5（A2、B1、C1、不明1）甕22（A6、B5、C1、D1、E1、不明8）、坏•椀47（A6、B8、C2、D5、E17、F7、G1、H1）、鉢1、高坏9（A3、B5、不明1）、坩1、手捏4、須恵器11である。甕と坏、椀、甑の器形変化を基にして、重複関係、カマドと貯蔵穴の関係を分析した結果、大きく2時期にⅠ期・H－1、3、8、10、13号住居址が先行し、その後Ⅱ期・H－9号住居址、H－2、4、5、6、7、11、14号住居址の変遷が辿れる。Ⅰ期の特徴は、北カマドを主として用い、その構築材には、ローム掘り残しや河原石や長甕を横にして袖に用いている。支柱は土器を用いるのは前代からの系譜であるが、主体が河原石へ移行しつつある。貯蔵穴は方形の形態が前代からの系譜をみせている。甕は、竈の普及から時間的経過を認められ、長胴化が完成している。ただ甑にはやや丸味が残っている（甑



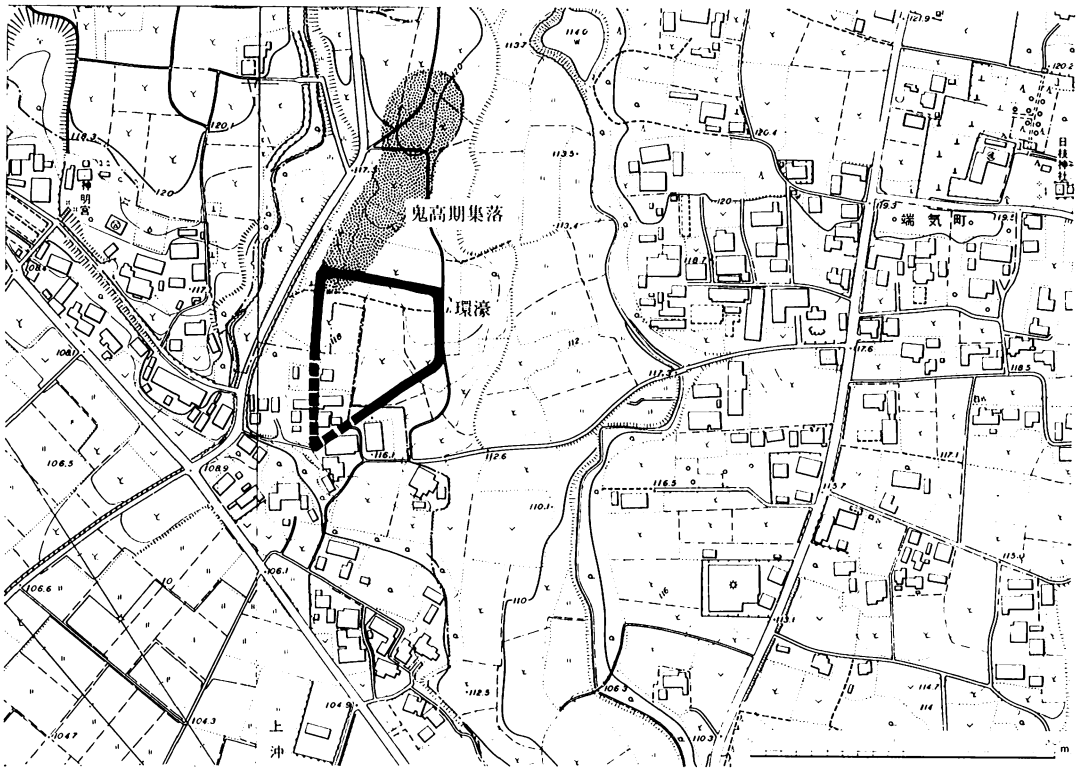
第73図　カマドの構造と貯蔵穴



第74図　土師器の器形分類　　縮尺　1/8

A、13—7)。坏類は内斜口辺坏の消滅段階といえ、体部の浅い作りとなる（A1)。須恵器蓋坏の坏身、蓋を模倣したものが圧倒数を占める（C1、D1、E1)。まだB1の椀は器高の高い作りである。須恵器も10個体見られ陶邑編年の MT 15からTK 10にかけての型式的特徴を有する。

II期は細分がさらに可能であると思われ、H—9号住がやや古い様相を持っている。カマドは東あるいは西に設置される。カマドの袖材や構架材に長甕が多用され、壁外へも一段と突出する。貯蔵穴の形態は方から円への変化が認められる。土器は甑の胴部の長胴化が進む(甑A、14—3)。内斜口辺の坏（A2）はほとんど消滅し、須恵器模倣坏は体部が浅いものとなってくる（C2、D2、E2、F2、H)。以上の様相からI期の住居群を6世紀前半〜中葉、鬼高I式後半に位置づけられる。II期を6世紀中葉、鬼高I式終末に内斜口辺坏の消滅、須恵器模倣坏、甑の胴の直線化から位置づけられる。



第75図　環濠と鬼高期集落の立地

中　　世

本遺跡群の環濠は、２回にわたる調査の結果、南西隅の未調査部分を除きほぼ概略が明らかになった。まず環濠の立地する地形から考えてみたい。環濠の東辺より東120mに「西川」が蛇行しながら南流しており、「西川」の東は比高７～８mの断崖となっている。端気の集落はその上の台地上に形成され、付近の小字名は北から「上曲輪」「中曲輪」「下曲輪」と言う。仁治４（1243）年の銘が刻まれた鉄造阿弥陀如来像を本尊とする善勝寺は、この台地上に存する。「西川」はもちろんこの集落から見た呼称である。「西川」の西は大きな谷地になっており、環濠と川の間には段状の地形が見られる。環濠の西に視線を転じると、50m先に「ヤツ川」が南流し谷を形成している。「ヤツ川」と環濠の間には道路が縦に走り、道路と台地との境は比高数mの段崖となっている。つまり環濠は、南は広瀬川低地帯と崖で画され、一方東西両方向は赤城南麓を南流する河川がつくる開析谷と崖で画されている、舌状台地に占地しているのである。ちなみに環濠所在地の小字名は、「着帳」「根際」という。このように三方崖に囲まれた地形は、防禦を旨とする館の設置にきわめて重大な役割を担ったであろう。ましてこの地は、足下に拡がる平坦地を俯瞰できる格好の場なのである。

環濠のプランは未調査部分があるため全体性を欠くが、西辺・南辺をそのまま延長した台形と

考えるのがもっとも妥当と思われる。しかし、それにしても南辺の傾き具合は大きい。このような南辺の大きな傾斜は、おそらく南東から入り込んでいる谷を避けるために行われたと思われる。なお、この南辺のほぼ中央に掘り残しの土橋が確認されている。規模から見て、入口1つとは考えにくく、おそらくこのほかにはね橋等が架けられていたと推測される。

溝の掘り方はいわゆる薬研堀で、きわめて精巧に掘られていた。覆土の観察では水の流れた形跡はなく、空堀である。覆土中の遺物はかなり少なく、これは環濠が比較的短時日に埋まったことを物語っている。東辺は埋土後道となったらしく、現代の道路と完全に重複していた。

北辺の南では柵列が確認された。検出範囲は狭かったが、環濠内全体にめぐらされていた可能性も考えられる。

以上環濠の特徴について述べてみたが、環濠の内部については、館らしい遺構は検出されていない。前年度の調査で、わずかに石敷遺構3基が検出されただけである。石敷遺構の性格づけは明確ではないが、この遺構から大切羽などの刀の付属品と常滑焼、渥美焼などが出土している。大切羽などは南北朝時代に、常滑焼は13世紀後半から14世紀前半に位置づけられる。環濠からの出土遺物は、常滑系の陶器1点と金井焼1点であるが、時期は13世紀末から14世紀前半に比定される。両者の出土遺物の時期的符合は、石敷遺構が環濠内の施設であることを端的に物語る。そして、両者の時期は遺物から南北朝時代頃に位置づけられよう。

主要参考文献

秋池　武・新井順二　1983　「群馬県における神ノ木・有尾式土器」　信濃第35巻4号　信濃史学会

上野佳也　1983　『茂沢南石堂遺跡』　長野県軽井沢町教育委員会

内田憲治　1981　『武井・城遺跡』　群馬県新里村教育委員会

大江正行　1978　『長楽寺遺跡』　群馬県尾島町教育委員会

岡本　勇　1959　「三浦郡葉山町馬の背山遺跡」　横須賀市博物館研究報告（人文科学）第3号

木部日出夫　1980　「富田遺跡群」『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』　群馬県前橋市教育委員会

小林達雄　1966　「縄文早期前半に関する問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告II』　多摩ニュータウン遺跡調査会

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ

富樫泰時　1976　「トランジェ様石器について」『東北考古学の諸問題』　東出版寧楽社

中束耕志・坂爪久純　1983　「神谷遺跡の爪形紋土器と周辺遺跡」　群馬考古通信第8号　群馬県考古学談話会

中村　浩　1981　『和泉陶邑窯の研究』　柏書房

前橋市史編さん委員会　1971　『前橋市史　第1巻』　群馬県前橋市

前原照子　1983　『小神明遺跡群Ⅰ』　群馬県前橋市教育委員会

松村親樹　1983　『端気遺跡群Ⅰ』　群馬県前橋市教育委員会

山崎　一　1978　『群馬県古城塁址の研究　上巻』　群馬県文化事業振興会

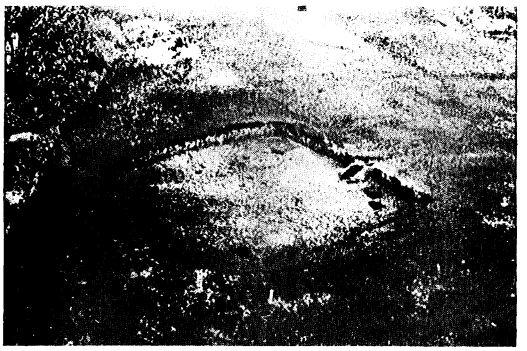
山本暉久　1983　「石棒」『縄文文化の研究　9』　雄山閣

図版 1

住居址全景(北東から)

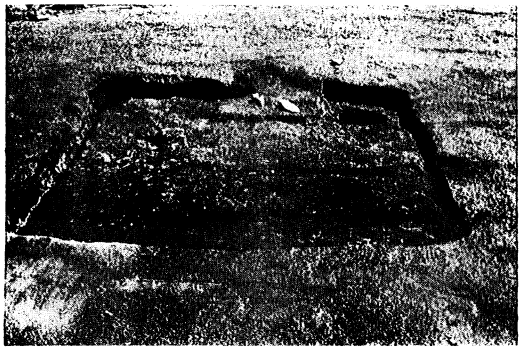
W－1号溝(東から)

図版 2



第 1 号住居址（南から）

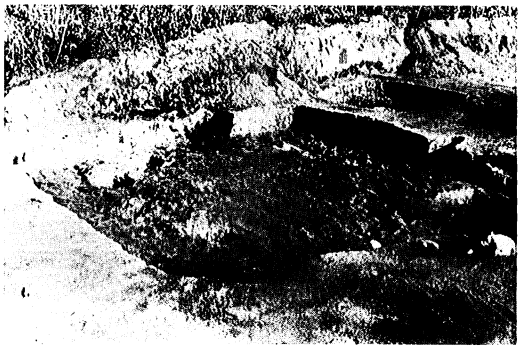
第 1 号住居址掘り方（南から）



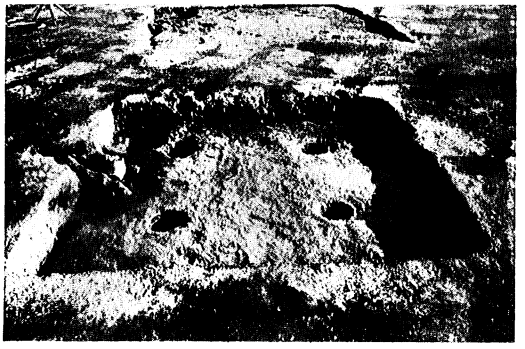
第 2 号住居址（西から）

第 2 号住居址掘り方（南から）

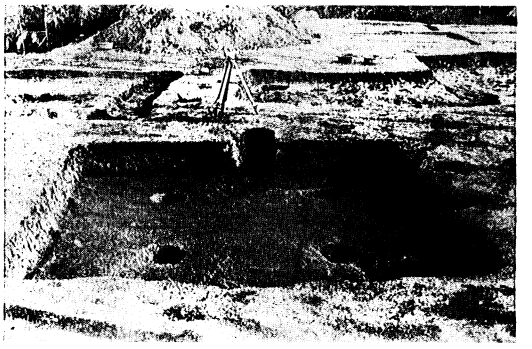
第 3 号住居址（南から）



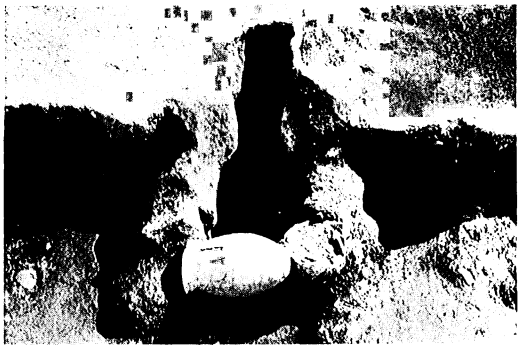
第 3 号住居址掘り方（南西から）



第 4 号住居址（南から）

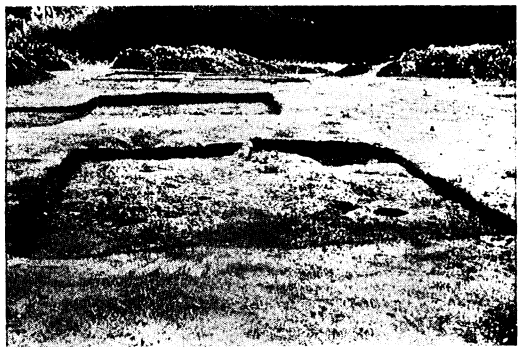


第 4 号住居址掘り方（西から）

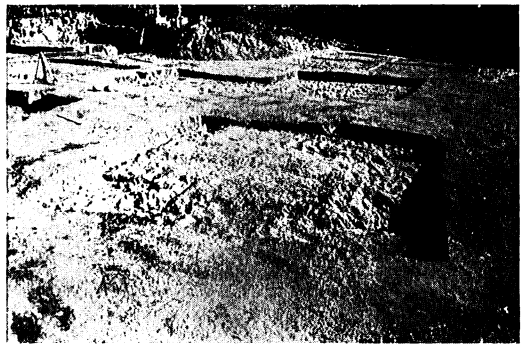


第 4 号住居址カマド（西から）

第 4 号住居址カマド掘り方（西から）



第 5 号住居址（西から）



第 5 号住居址掘り方（西から）

第 6 号住居址（東から）

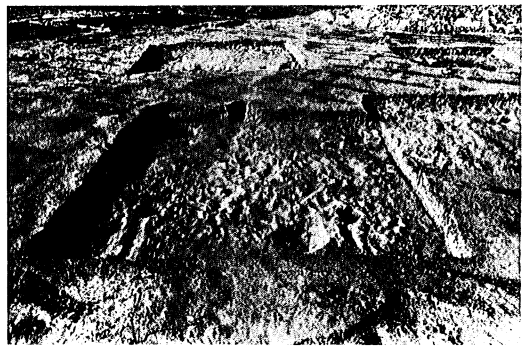
第 6 号住居址掘り方（東から）

第 6 号住居址カマド（東から）

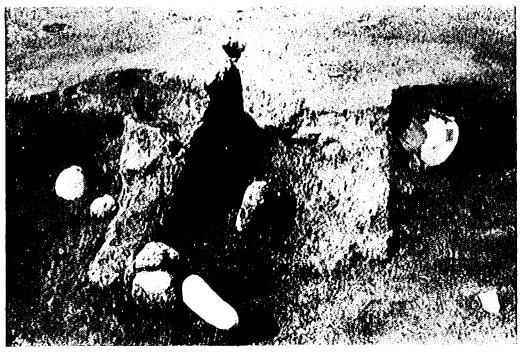
第 6 号住居址カマド掘り方（東南から）

図版 4

第 7 号住居址（東から）

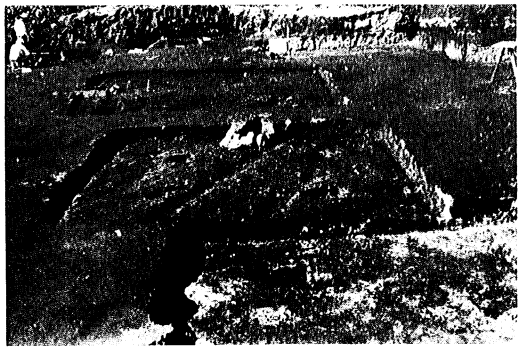


第 7 号住居址掘り方（東から）

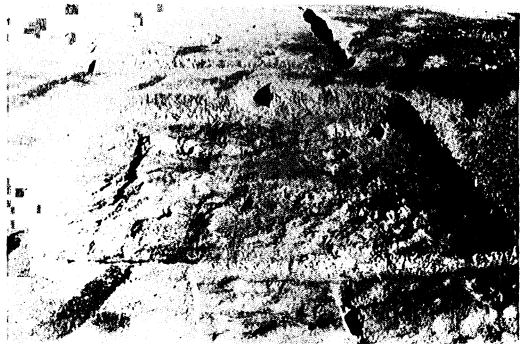


第 7 号住居址カマド（東から）

第 7 号住居址遺物出土状態（東から）



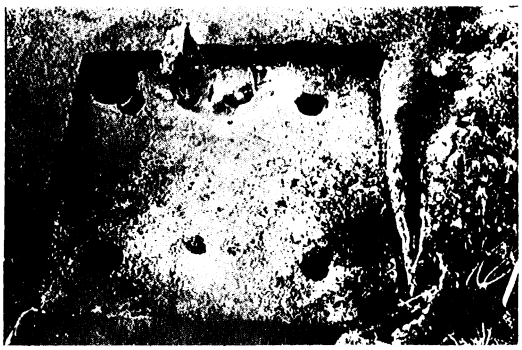
第 8 号住居址（南から）



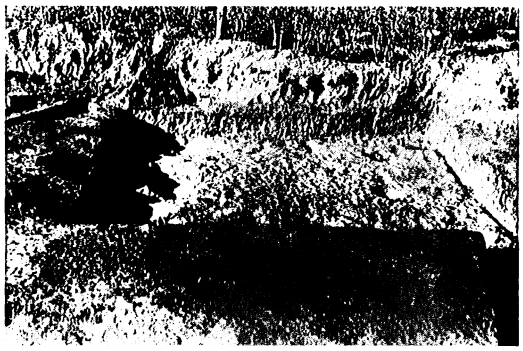
第 8 号住居址掘り方（南から）

第 8 号住居址カマド（南から）

第 8 号住居址カマド掘り方（南から）



第 9 号住居址（東から）



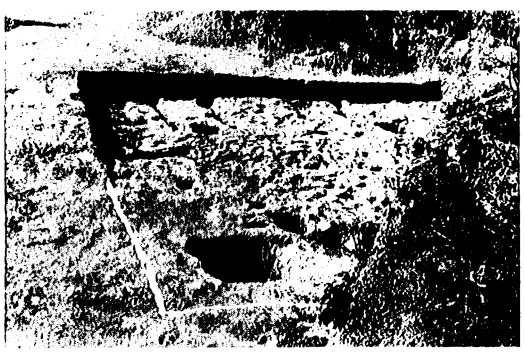
第 9 号住居址掘り方（南から）

第 9 号住居址カマド（南東から）

第 9 号住居址カマド掘り方（東から）

第10号住居址（西から）

第10号住居址掘り方（西から）

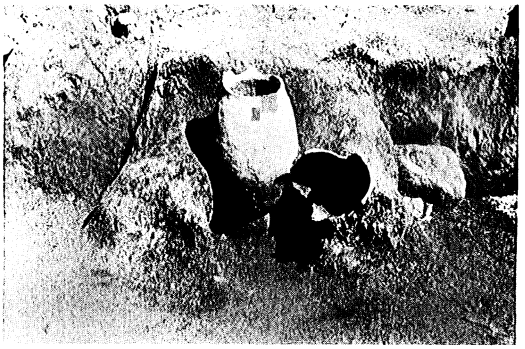


第11号住居址（東から）

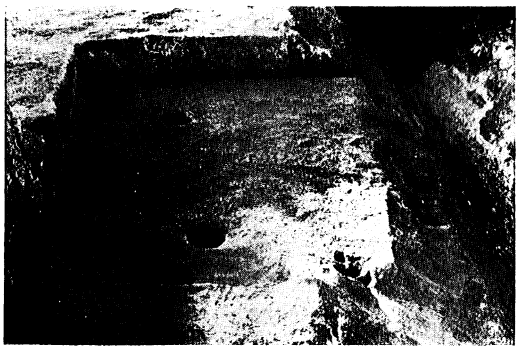
第12号住居址（西から）

図版 6

第13号住居址掘り方（南から）



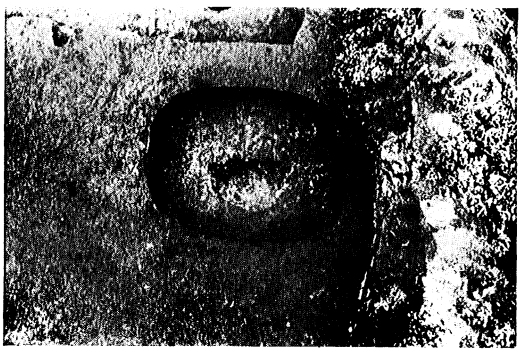
第13号住居址カマド（南から）



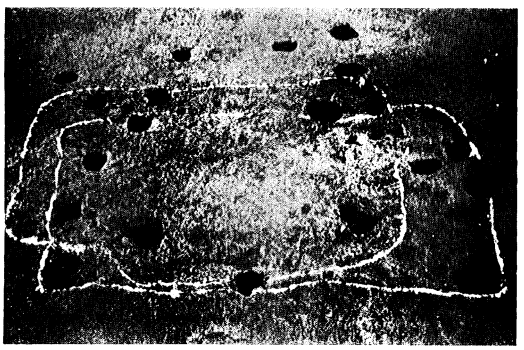
第14号住居址（東から）

第15号住居址（北から）

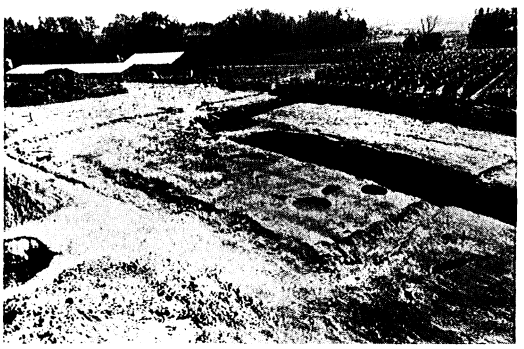
第15号住居址遺物出土状態（東から）



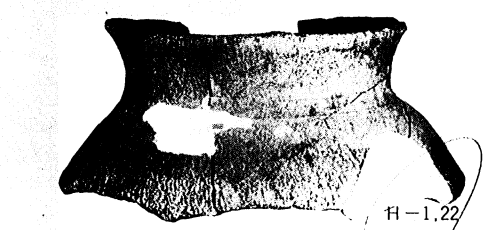
T－1（東から）

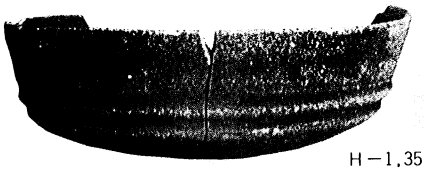


T－2, 3（南から）



W－2（北から）


H－1, 22

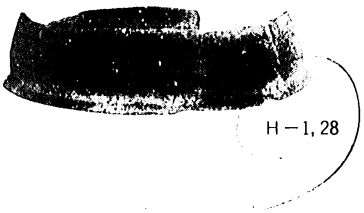

H－1, 35

H－1, 27

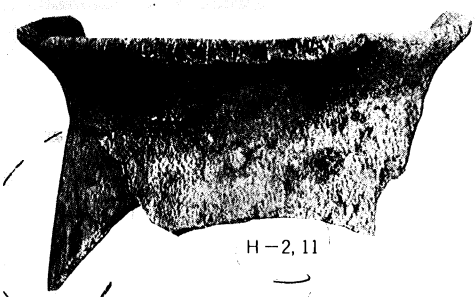
H－1, 1

H－1, 6

H－1, 40


H－1, 28

H－1, 51


H－2, 11

H－2, 22

H－2, 36

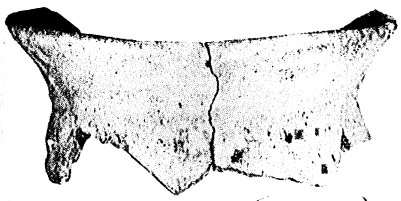
H－3, 1

H－3, 30

H－3, 92

H－3, 148

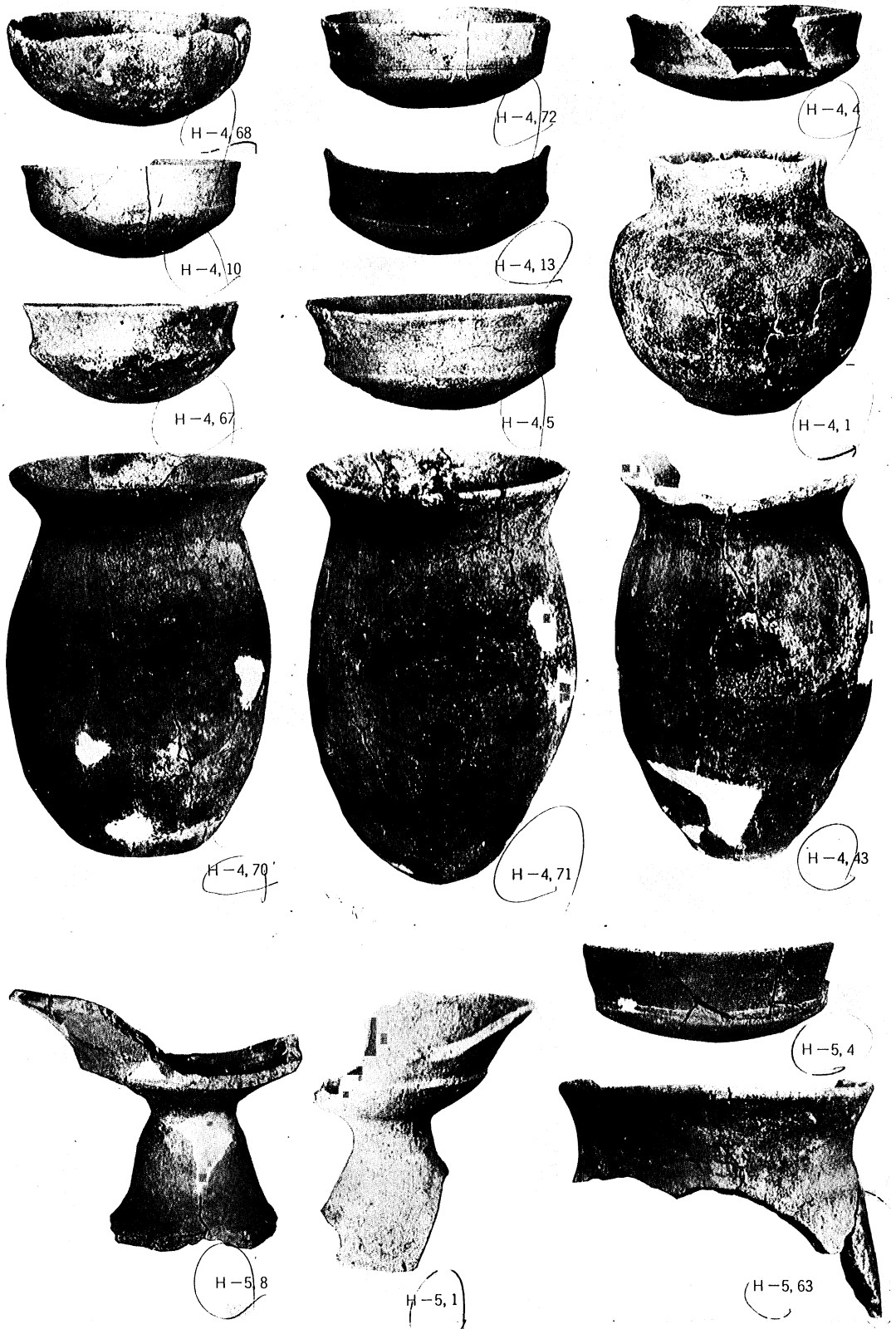
H－3, 45

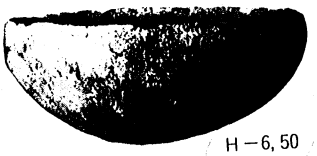

H－3, 151

H－3, 4

H－3, 126

図版 8


H－4, 68
H－4, 72
H－4, 4
H－4, 10
H－4, 13
H－4, 67
H－4, 5
H－4, 1
H－4, 70
H－4, 71
H－4, 43
H－5, 8
H－5, 1
H－5, 4
H－5, 63


H－6, 50

H－6, 37

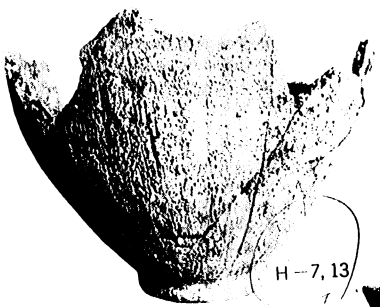
H－6, 56

H－6, 1

H－6, 44

H－6, 8

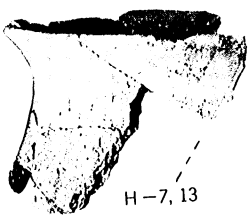
H－6, 33

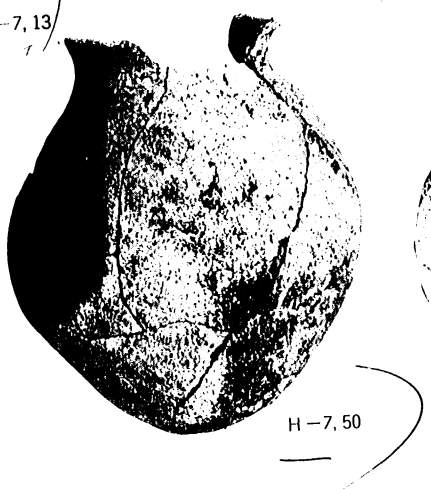

H－7, 13

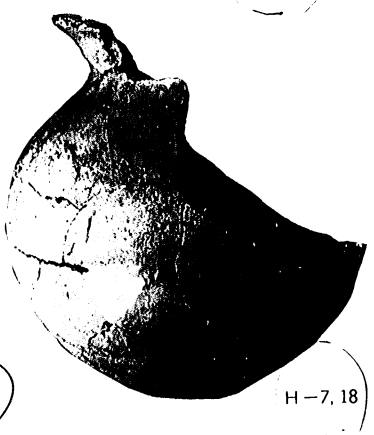
H－7, 37

H－7, 3

H－7, 47


H－7, 13

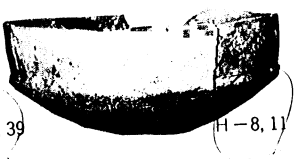

H－7, 50


H－7, 18

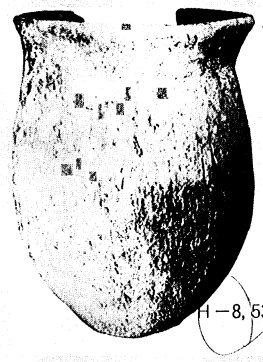
H－8, 46

H－8, 9

H－8, 39

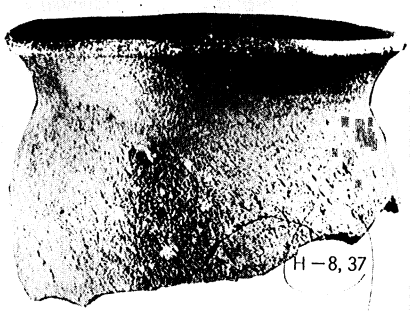

H－8, 11

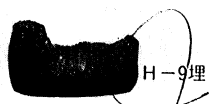
図版10

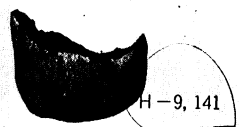

H－8, 53

H－8, 53

H－8, 36


H－8, 37

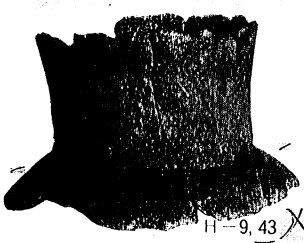

H－9理

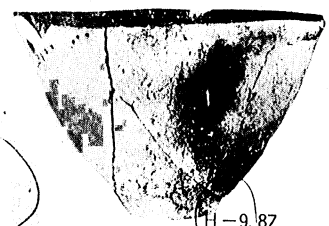

H－9, 141

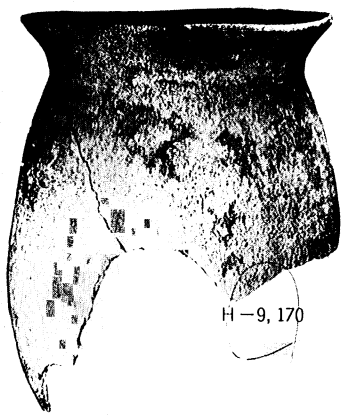
H－9, 107

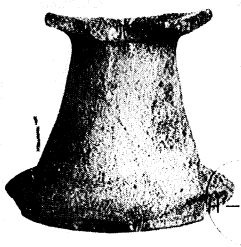
H－9, 47

H－9, 1


H－9, 43


H－9, 87

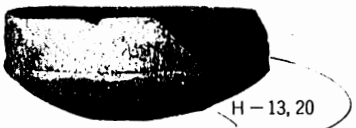

H－9, 170


H－10, 18

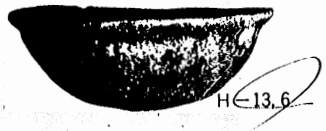
H－10, 1

H－10, 20

H－13, 4

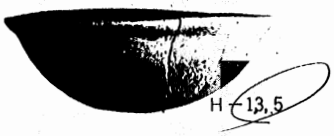

H－13, 20

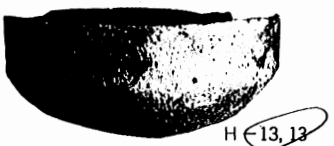
H－13, 12

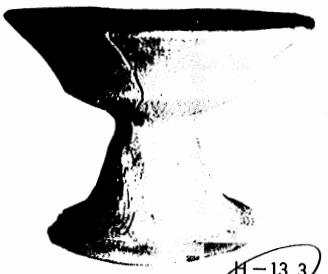

H－13, 6

H－13, 37

H－13, 1


H－13, 5


H－13, 13


H－13, 3

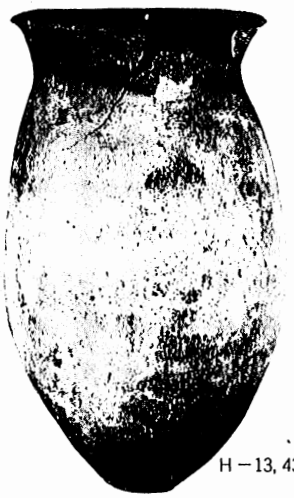
H－13, 40

H－13, 2

H－13, 34

H－13, 14

H－13, 41


H－13, 43

H－13, 7

図版12

H－11, 35

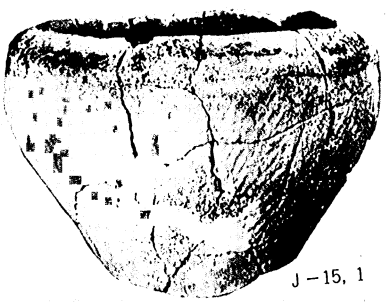
H－14, 5

H－14, 11

H－11, 10

H－14, 21

H－14, 3


J－15, 1

J－15, 3

第63図13

第63図 1

J－15, S－11

J－15, 埋

J－15, 8

J－15, 9

J－15, 5

第65図 3

同 1

同 2

端 気 遺 跡 群 II

昭和59年3月26日　印刷
昭和59年3月31日　発行

発行　前 橋 市 教 育 委 員 会
前橋市大手町二丁目12―1

印刷　朝日印刷工業株式会社
前 橋 市 元 総 社 町 67

42

端気遺跡群 II

土　器　観　察　表

前橋市教育委員会

番号	器形	寸法	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
1 H－22	壺	19.4 － －	胴上部は下から上へのヘラケズリのち頸部ヨコナデ。口縁部はヨコナデ。	口縁部はヨコヘラナデのちヨコナデ。胴部ナデ。	①浅黄橙色②良好③⅔④石英、紫蘇輝石、軽石を含み粗⑤内面口唇部に黒斑、外面胴部に若干の煤
1 H－28 これかれている	蓋－須恵器	13.7 －	時計まわりのロクロによる。水挽きののち、天井部を稜近くまでヘラケズリする。口縁端部が外に開く。	ヨコナデ。口縁端部に内傾する段を有する。	①青灰色②極めて良好③½④石英、チャートを含み密⑤口辺部外面に自然釉、重ね焼きのため口辺端部に須恵器片が融着
1 H－1	蓋－須恵器	16.0 5.7	逆時計まわりのロクロによる。水挽きののち天井部⅔を中央から外への回転ヘラケズリ（7回転）。稜は丸い。天井部にヘラ記号。	ヨコナデ。	①外面オリーブ黒色、内面にぶい黄橙色②やや不良③天井部ほぼ完存、口辺部⅓④石英、チャートを含み密
1 H－6	蓋－須恵器	15.8 5.1	逆時計まわりのロクロによる。水挽きののち天井部を中央から½の範囲で回転ヘラケズリ。	ヨコナデ。口縁端部に内傾する段を有する。	①外面黄灰色、内面青灰色②良好③¼④軽石、石英チャートを含みやや粗。
1H－埋1	蓋－須恵器	14.3 －	逆時計まわりのロクロによる。水挽きののち天井部を稜から¼を残し回転ヘラケズリ。	ヨコナデ。口縁端部に内傾する段を有する。	①外面灰オリーブ色、内面浅黄橙色②不良③口辺部⅓天井部若干④石英、チャート、酸化鉄を含みやや粗
1 H－27	坏－須恵器	12.2 4.8	時計まわりのロクロによる。水挽きののち体部を中央から½の範囲で回転ヘラケズリ。	ヨコナデ。	①青灰色②極めて良好③⅓④石英、チャートを含み密⑤底部に窯体が付着
1 H－40	坏－須恵器	12.3 5.2	時計まわりのロクロによる。水挽きののち体部を中央から⅗の範囲で回転ヘラケズリ。	ヨコナデ。	①灰色②極めて良好③⅖④密⑤重ね焼きのため受部に蓋片が融着、体部全体に自然釉がかかる。
1H－埋2	壺－須恵器		水挽きののち肩部に四本前後を単位とする波状文を施す。	ヨコナデ。	①青灰色②良好③⅛④チャート、軽石を含みやや粗
1 H－35	高坏 －須恵器	18.0 － －	逆時計まわりのロクロによる。水挽きののち底部を中心から⅔の範囲にわたり回転ヘラケズリ、中央部に脚部接合のためヘラで刻み目を同心円状に入れる。脚の透しは三方に開く。	ヨコナデ。	①灰色②やや不良③⅕④軽石、石英を含みやや粗
1 H－7	高坏 －須恵器		ロクロによるヨコナデののち五つを単位とする長方形の透し穴を千鳥状に上下二段に穿つ。上下の透し穴の間には二条の凹線がめぐる。	ヨコナデ。	①青灰色②極めて良好③⅕④石英、軽石、チャートを含みやや粗⑤透しは下段2上段1を確認した。

番号	器形	寸法	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
2H－36	坏	12.6 －	体部はナデのち右から左へのヘラケズリ、口縁部は体部との境の稜をヘラナデで作り出した（ために稜が二重になっている部分がある）のちヨコナデ。	ヨコナデ。	①明赤褐色②良好③⅓④酸化鉄、紫蘚輝石を含み密⑤外面に黒斑および煤、内面に煤が付着
2H－18 こわれている	坏	14.0 －	体部はナデ。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデのち体部上位に左上りの暗文が施される。	①明赤褐色②良好③¼④チャート、軽石、石英を含み密
2H－11	甕	19.6 － －	胴部は下から上へのヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	胴部ナデ、口縁部ヨコナデ。	①浅黄橙色②良好③½④石英、紫蘚輝石、軽石を含み粗⑤外面に煤付着
2H－22	甕	－ － 7.4	胴部中位の下から上へのヘラケズリのち下位を下端にヘラ痕をのこす下から上へのヘラケズリ。底面は単方向のヘラケズリ。	胴部下位をユビナデ、中位をヨコヘラナデ。	①外面赤橙色、内面にぶい橙色②良好③⅔④軽石、紫蘚輝石、石英を含み粗 ⑤外面に煤、内面胴中位に炭化物が付着
3H－30	坏	11.8 －	体部はナデのち右上りのヘラケズリ口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①外面橙色、内面浅黄橙色②良好③¼④石英、紫蘚輝石を含み密
3H－92	坏	12.1 －	体部はヘラケズリのち稜付近を除き右から左への単方向のヘラケズリその後ナデ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①赤橙色②良好③½④酸化鉄、紫蘚輝石を含み密⑤外面体部に黒斑
3H－148	坏	15.4 －	体部は右から左へのヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①赤橙色②良好③⅓④石英を含み密
3H－45	坏	12.8 5.0	体部はナデのち中位以下をヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデのち体部上半に左上りの暗文を施す。	①橙色②良好③¾④石英、紫蘚輝石を含み密⑤外面体部に黒斑、内外面に煤付着
3H－126	坏	11.3 5.0	体部はナデのち主として左から右へのヘラケズリのちナデ。口縁部へはヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③3/7④紫蘚輝石を含み密⑤外面体部に黒斑および煤が付着
3H－4	高坏	－ － 9.6	脚部下位をヨコナデのち中位以上を上から下へのヘラケズリ。	脚部ヨコナデ。坏底部はナデ。脚部を坏部は枘を用いて接合する。	①橙色②良好③8/9④石英、紫蘚輝石、軽石を含み、やや粗⑤内外面に煤が付着
3H－1	手捏	6.5 6.0 5.2 5.0	手捏。体部は中位～下位にユビナデを施す。底面はナデ。	手捏。右から左へのヘラナデのちナデ。	①浅黄橙色②良好③5/6④石英、紫蘚輝石を含みやや粗⑤口唇部は一部をのこし欠けている、その上面は傾くも一平面上にあり、故意にそうさせたものかもしれない

破片一部不足

こわれている

こわれている

胸部のとこに一部破片がのっている（実測図（写真にはない））

番号	器形	寸法	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
3H−151	甕	18.0 18.4 — —	胴部は下から上へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデで仕上げるが接合痕が二段認められる。	右から左へのヘラナデのちヨコナデ。	①浅黄橙色②良好③⅔④酸化鉄、石英、紫蘚輝石、軽石を含み粗⑤内面および外面口辺部に煤が付着
3H−197	坏−須恵器	9.8 —	時計まわりのロクロによる。水挽きのち体部を⅔の範囲で回転ヘラケズリ。	ヨコナデ。口唇部には内傾する段をもつ。	①灰色②不良③⅓④チャートを含みやや粗
4H−68	坏	11.9 5.2	体部は右から左へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデのち口唇部直下から体部上半にかけて右上りのヘラミガキ。	①赤橙色②良好③1/1④酸化鉄、石英、紫蘚輝石を含み密⑤内外面に煤付着
4H−10	坏	11.8 5.1	体部は上位を左から右へのヘラケズリのち下位を単方向のヘラケズリのちナデ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③8/9④精良⑤外面体部に黒斑
4H−13	坏	11.0 4.8	体部は左から右へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③⅔④石英、軽石、紫蘚輝石を含みやや粗⑤外面体部に黒斑
4H−72	坏	12.0 12.5 4.7	体部は左から右へのヘラケズリのち単方向のヘラケズリのちナデ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①赤橙色②良好③8/9④精良⑤外面に煤付着
4H−4	坏	12.7 4.8	体部は下位を単方向ヘラケズリのち上位を右から左へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③4/5④軽石、石英を含み密⑤外面底部に黒斑、内外面に煤付着
4H−75	坏	12.5 4.6	風化のため不明。	風化のため不明。	①橙色②良好③⅔④軽石、石英、紫蘚輝石を含み密⑤外面に煤が付着
4H−5	坏	13.6 5.4	体部は左から右へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	体部はヘラナデのち全体をヨコナデ。口唇部の平坦面には沈線様のものが入る。	①赤橙色②良好③1/1④軽石、石英、紫蘚輝石を含み密⑤外面体部に黒斑
4H−67	坏	11.8 5.2	体部は左から右へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	体部ヨコヘラナデのち全体をヨコナデ。口縁部に内側からの穿孔を1ケ所施す。	①赤橙色②良好③1/1④石英、軽石、紫蘚輝石を含み密⑤外面体部に黒斑、体部に煤が付着
4H−43	甑	18.0 27.9 7.6	16.0 寸法が違う 胴部は中位以上を下から上へのヘラケズリのち下位を左上から右下へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。焼成後、外方より底部を抜く。	胴部は右から左へのヘラナデのち横方向のナデ。下位に接合痕を残す。口縁部はヨコナデ。	①にぶい黄橙色②良好③⅔④石英、軽石、紫蘚輝石、を含みやや粗⑤外面全体と内面口辺部に煤が付着
4H−70	甕	18.8 — —	胴部は中位以上を下から上へのヘラケズリのち下位を左上から右下へのヘラケズリ。口縁部は右から左へのヘラナデのちヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデ。口縁部はヨコナデ。頸部の稜直下に接合痕が残る。	①浅黄橙色②良好③5/6④紫蘚輝石、軽石、石英を含みやや粗⑤外面胴部に煤が付着

ゆがめている

こゆがめている

こゆがめている

番号	器形	寸法	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
4H－1	壺	9.4 13.1 7.0	底面はナデ。胴部は主に右から左へのヘラケズリのちナデ。口縁部はヨコナデ。	胴部はナデ。口縁部ヨコナデ。頸部に接合痕を残す。	①にぶい橙色②やや不良③1/4④軽石、石英、紫蘇輝石を含みやや粗⑤外面は底面から口唇部まで全体に煤が、内面もほぼ全体に炭化物が付着
4H－71	甕	20.0 33.6 5.8	胴部は中位以上の下から上へのヘラケズリのち下位を左上から右下へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデで仕上げるが接合痕が二段残る。底面は単方向のヘラケズリ。	胴部は右から左へのヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。	①にぶい黄橙色②良好③1/4④紫蘇輝石、軽石を含み粗⑤外面に煤付着
4H－8	甕	－ － 6.5	胴部は下から上へのヘラケズリのち主として左から右へのヘラケズリ。底面には木葉痕を残す。	右から左へのヘラナデのちナデ。接合痕を残す。	①にぶい黄橙色②良好③1/2④石英、紫蘇輝石、軽石を含み粗⑤外面全体に煤、内面に炭化物付着
4H－76	甕	－ － 4.8	胴部は下位を右から左へのヘラケズリ、中位を下から上へのヘラケズリ。底面は単方向のヘラケズリ。	右から左へのヘラナデのちナデ。接合痕を残す。	①にぶい橙色②良好③2/3④石英、紫蘇輝石を含み粗
5H－4	坏	13.2 4.7	体部はヘラケズリのちナデ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③1/3④精良
5H－1	高坏	14.6 11.4 10.2	風化のため不明、脚部下端は面取りされる。	風化のため不明。	①橙色②やや不良③2/5④精良⑤外面坏部に黒斑
5H－75	高坏	－ － 12.5	脚柱部のナデ、脚裾部のヨコナデのちやや粗めに幅広の縦方向のヘラミガキを脚柱部に施す。	脚部はヨコナデ。坏部はヘラミガキ。	①浅黄橙色②良好③1/4④紫蘇輝石、チャート、酸化鉄を含み密
5H－8	高坏	18.0 － －	脚部はナデのち下半をヨコナデ、坏部との接合部にはユビナデ痕を残す。坏部はヨコナデ。坏部口唇は面取りされる。	脚裾部はヨコナデ、脚柱部は右から左へのヘラケズリ。坏部はヨコナデ。	①橙色②良好③坏部1/3、脚部5/6④紫蘇輝石、チャート、石英を含み密
5H－63	甕	18.2 － －	口縁部のヨコナデのち胴部を下から上へのヘラケズリ。	胴部はナデ。口縁部はヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③2/3④紫蘇輝石、石英、軽石を含み粗⑤外面に煤付着
6H－37	坏	10.8 4.8	体部は単方向のヘラケズリのち横方向の粗いヘラナデ。口縁部はヨコナデ。体部と口縁部の境に接合痕を残す。	体部は横方向のヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。	①浅黄橙色②良好③3/4④紫蘇輝石、軽石、石英を含み密
6H－50	坏	12.5 5.4	体部はヘラケズリのち横方向の粗いヘラナデ。口縁部はヨコナデ。体部と口縁部の境に接合痕を残す。	体部は左から右へのヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③完存④紫蘇輝石、軽石、石英を含み密⑤外面体部に黒斑

番号	器形	寸法	外面調調	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
6 H－56	坏	12.4 5.0	体部は単方向のヘラケズリのち横方向の粗いヘラナデ。口縁部はヨコナデ。体部と口縁部の境に接合痕を残す。	体部は右から左へのヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。	①浅黄橙色②良好③½④紫蘚輝石、石英を含み密⑤外面体部に黒斑
6 H－1	坏	12.4 4.6	体部は左から右へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	体部は右から左へのヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。	①橙色②良好③⅔④紫蘚輝石、石英、チャートを含みやや粗
6 H－8	壺	20.8 － －	胴部は右下から左上へのヘラケズリのちナデ。口縁部はヨコナデで仕上げるがその中位に接合痕を残す。口唇部は面取りされる。	胴部は横方向のヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。	①浅黄橙色②良好③½④紫蘚輝石、軽石、石英を含みやや粗⑤外面に黒斑、煤が付着
6 H－33	甕	19.4 － －	胴部はナデ。口縁部はヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。胴部に接合痕を残す。	①にぶい橙色②良好③⅓④軽石、石英、紫蘚輝石を含み粗⑤外面に煤が付着
6 H－44	甕	18.8 － －	胴部は下から上へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③¾④軽石、石英、紫蘚輝石を含み粗⑤外面に煤が付着
7 H－10	坏	12.7 －	体部は上から下へのヘラケズリのちナデ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③⅕④紫蘚輝石を含み精良
7 H－3	坏	12.4 4.6	体部は下半を単方向のヘラケズリのち上半を右から左へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。口唇部に面をもつ。	①橙色②良好③1/1④紫蘚輝石、チャートを含み精良⑤外面体部に黒斑
7 H－37	坏	12.8 5.3	体部は上位を右から左へのヨコヘラケズリ、中位以下を不定方向のヘラケズリのち単方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③⅞④紫蘚輝石、石英を含みやや粗⑤体部に薄い黒斑
7 H－7	坏	11.8	体部はヘラケズリのちヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	体部は右から左へのヘラナデのちヨコナデ、口縁部はヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③¼④紫蘚輝石を含み精良
7 H－5	坏	12.4 4.3	体部は上位を左から右へのヘラケズリのち全体をナデ。口縁部はヨコナデ。	体部は横方向のヘラナデのちヨコナデ。口縁部はヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③体部½、口縁部⅛④酸化鉄を含み精良
7 H－47	坏	14.0 3.6	体部は右から左へのヘラケズリのち下半に単方向の、そののち上半に横方向のやや粗いヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。	体部は右から左へのヘラナデのちヨコナデ。口縁部はヨコナデ。口唇部に面をもつがその中央が浅く凹み、沈線様を呈する。	①橙色②良好③⅔④紫蘚輝石、軽石を含み精良⑤内外面に煤が付着
7 H－18	壺	13.0 19.3 6.6	底面は密なヘラミガキ。胴部はナデのち上中下位三段に主として縦方向のヘラミガキを施すが中位のものが最も密で、下位のものが粗である。有段の口縁部はヨコナデ。	胴部は下位を横方向のヘラミガキ。中位以上を横方向のナデで仕上げ、接合痕を残す。口縁部はヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③胴部¾、口縁部¼ ④紫蘚輝石、軽石を含み密⑤外面胴部下半に黒斑

番号	器形	寸法	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
7 H－13	甕	17.5 — —	胴部は上位を下から上へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は横方向のナデ。口縁部はヨコナデ。	①浅黄橙色②良好③1/2④石英、軽石を含み粗⑤外面に煤が付着
7 H－13	甕	— — 7.4	底面はナデ。胴部は上から下へのヘラケズリ。	右下から左上へのヘラナデのうちナデ。接合痕を残す。	①浅黄橙色②良好③底部完存、胴部2/3④石英、軽石を含み粗⑤底部から胴部下半にかけて黒斑
7 H－50	甕	16.8 15.8 33.2 6.8	底部は磨滅のため不明。胴部は右下から左上へのヘラケズリのち縦方向のヘラミガキ。頸部を横方向のヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。	胴部は横方向のナデ、下位に接合痕を残す。頸部は左から右のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	①浅黄橙色②良好③底部完存、胴部2/3、口縁部1/4④軽石、石英、紫蘇輝石を含み粗⑤外面胴部に大黒斑煤が付着、内面にも煤付着
8 H－9	坏	12.4 4.7	体部は上位を左から右へのヘラケズリ、中位以下を単方向のヘラケズリのち全体をナデ。口縁部はヨコナデ、口唇部を面取りする。	体部はヨコナデのち縦方向のヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。	①赤橙色②良好③2/5④石英、紫蘇輝石、軽石を含み密⑤外面口縁部から内面体部上半にかけて黒斑
8 H－39	坏	11.7 5.1	体部は上位を右から左へのヘラケズリ、中位以下を単方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③1/1④紫蘇輝石、軽石、石英を含み密
8 H－11	坏	12.2 5.1	体部は右から左へのヘラケズリのち単方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。口唇部に面取りがなされ、その中央が凹み、沈線状を呈す。	①橙色②良好③1/1④軽石、石英を含み密⑤外面に煤が付着
8 H－53	甕	12.8 17.2 6.2	底部はヘラケズリ。胴部は下から上へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデのちナデ、接合痕を残す。口縁部はヨコナデ。	①淡赤橙色②良好③口縁部3/4、胴部以下1/1④軽石、チャート、紫蘇輝石を含み粗⑤外面に煤が付着、内面も黒化している。
8 H－46	手捏	4.2 4.4 3.6	底部はナデ。体部はユビナデ。	右下から左上へのユビナデ。	①にぶい黄橙色②良好③完存④紫蘇輝石、軽石を含みやや粗⑤外面に煤が付着
8 H－37	甕	18.5 — —	胴部は右下から左上へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。	①黄橙色②良好③1/1④軽石、石英を含み粗⑤外面に煤が付着
8 H－1	甑	25.0 15.6 32.4 9.4 9.0	胴部は上半を下から上へのヘラケズリのち下半を左上から右下へのヘラケズリ。底面をヘラケズリで面取りする。口縁部はヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。	①浅黄橙色②良好③完存④石英、軽石、紫蘇輝石を含み粗⑤外面に黒斑、煤が付着
8 H－36	甕	18.3 30.3 5.3	底面はナデ。胴部は中位以上を下から上へのヘラケズリのち下位を左上から右下のヘラケズリ、さらに下端を左から右へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデのちナデ、下位に接合痕を残す。口縁部はヨコナデ。	①黄橙色②良好③口縁部および底部完存、胴部1/2④石英、軽石を含み粗⑤外面に煤が付着、胴部上位に外面からの穿孔

写真は107

番号	器形	寸法	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
9H-109	坏	12.8 4.8	体部は横方向のヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	全体をヨコナデのち体部上半に右傾する暗文を施す。	①橙色②良好③3/4④紫蘚輝石、石英を含み密
9H-47	坏	11.8 5.4	体部は下位を横方向のヘラケズリのち全体をヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	体部を右から左へのヘラミガキのち全体をヨコナデ。「X」状の線刻を施す。	①にぶい橙色②良好③2/5④紫蘚輝石を含み密⑤外面に黒斑
9H-143	坏	12.8 —	体部はヘラケズリのちナデ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②やや不良③1/5④紫蘚輝石を含み精良⑤外面体部に黒斑
9H-43	坩	9.7 — —	風化のため不明。	風化のため不明。口唇部に面取りがなされる。	①橙色②良好③口縁部7/8、胴部1/3④酸化鉄を含み精良
9H-87	甑	15.0 9.8 4.6	底面はナデでその中央に径14mmの円孔を穿つ。体部はナデのち部分的に粗い縦方向のヘラミガキ。上位に接合痕を残す。口縁部はヨコナデ。	右から左へのヘラナデのちヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③1/1④軽石、輝石を含みやや粗⑤外面に黒斑、内外面に煤が付着
9H-141	手捏	4.4 3.8 3.4	底面はナデ。体部はユビナデ。	右下から左上へのユビナデ。	①黒褐色②良好③2/3④石英、紫蘚輝石を含みやや粗⑤内外面が黒化
9H-埋	手捏	— — 4.8	底面はナデ。体部はユビナデ。	右下から左上へのユビナデ。	①にぶい黄橙色②良好③2/3④紫蘚輝石、軽石を含みやや粗⑤内外が黒化
9H-1	高坏 須恵器	10.4 — —	坏部はヨコナデのち下位を回転ヘラケズリ、中位に2条の沈線、その下に左傾する列点文が浅く施される。	ヨコナデ。	①灰色②やや不良③1/3④紫蘚輝石、軽石を含みやや粗
9H-170	甕	19.6 — —	胴部は下から上へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデのちナデ。口縁部はヨコナデ。	①浅黄橙色②良好③口縁部完存、胴部2/3④軽石、石英、紫蘚輝石を含み粗⑤外面に煤が付着
10H-20	坏	12.6 —	体部はヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。	①橙色②良好③紫蘚輝石、石英を含み密④1/4⑤外面体部に黒斑
10H-1	坏	12.0 5.8	体部はナデ。口縁部はヨコナデ。	右から左へのヘラナデのちヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③完存④紫蘚輝石、軽石を含みやや粗⑤外面に煤が付着
10H-18	高坏	— — 9.1	脚部は脚柱部を縦方向のヘラケズリまたはヘラナデのち全体をヨコナデ。坏部はナデ。	脚部は、脚裾部をヨコナデ、脚柱部を右から左へのヘラケズリ。坏部はナデ。	①橙色②極めて良好③脚部1/1、坏部1/2④精良⑤脚裾部内外面に煤が付着

あやまっている

番号	器形	寸法	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
11H－38	坏	1 2.4 4.8	体部はナデのち主に横方向の粗いヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	体部を右から左へのヘラナデのち全体をヨコナデのち「X」状の線刻を施す。	①橙色②良好③1/2④紫蘇輝石、石英を含み密
11H－10	甕	2 0.4 3 5.0 5.3	底面はナデ。胴部は中位以下を下から上へのヘラケズリのち下位を左上から右下へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデのちナデ、下位に接合痕を残す。口縁部はヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③7/8④石英、紫蘇輝石を含み粗⑤外面胴部に煤が付着
12H－2	鉢	1 9.2 — —	体部は右から左へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	風化のため不明。	①にぶい橙色②良好③1/4④石英、軽石を含み粗
13H－41	甕	1 8.4 3 2.9 5.1	底面はヘラケズリ。胴部は中位以上を下から上へのヘラケズリのち下位を左上から右下へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデで接合痕を残す。	下位の接合痕以下は右から左へのヘラナデ。接合痕以上の胴部は右から左へのヘラナデのち左下から右上へのナデ。口縁部はヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③1/1④軽石、石英、紫蘇輝石を含み粗⑤外面に煤が付着
13H－43	甕	3 7.4 3 6.0 7.6	底面はナデ。凹凸を有し巻上げの際の粘土紐の単位が明瞭な胴部はナデ。口縁部はヨコナデ、口唇部を面取りする。	胴部は右から左へのヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③1/1④紫蘇輝石、軽石を含み粗⑤外面に黒斑
13H－6	坏	1 2.9 4.8	体部は横方向のヘラケズリのち粗いヨコヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。	体部はヘラナデのちヨコナデのち上半を右傾するヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。	①橙色②良好③完存④紫蘇輝石、石英を含み密⑤内外面に黒斑、煤が付着
13H－40	坏	1 2.2 4.8	体部はナデのち横方向のヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデのち体部上半を右傾するヘラミガキ。	①橙色②良好③完存④石英、紫蘇輝石を含み密
13H－5	坏	1 2.9 4.5	体部はナデのち右から左へのヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデのち体部上半を右傾するヘラミガキ。	①橙色②良好③完存④石英紫蘇輝石を含み密⑤外面体部に黒斑、内外面に煤が付着
13H－4	坏	1 2.7 5.5	体部はナデのち横方向のヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	右から左へのヘラナデのちヨコナデ。	①にぶい橙色②良好③4/5④紫蘇輝石、軽石を含みやや粗
13H－37	坏	1 1.8 4.8	体部は右から左へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。口唇部に内傾する面をつくり出す。	①橙色②良好③8/9④チャートを含み密
13H－39	坏	1 1.8 4.8	体部はナデのち下半をおよそ単方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	体部を横方向のヘラナデのち全体をヨコナデ。口唇部に内傾する面をつくり出す。	①にぶい橙色②良好③1/3④石英、紫蘇輝石を含みやや粗⑤内外面に煤が付着
13H－14	坏	1 1.9 5.3	体部はナデのち下半をおよそ単方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	体部を横方向のヘラナデのち全体をヨコナデ。口唇部に内傾する面をつくり出す。	①にぶい橙色②良好③口縁部1/5、体部2/3④石英、紫蘇輝石、酸化鉄を含みやや粗⑤内外面に煤が付着

番号	器形	寸法	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
13H－1	坏	12.5 4.8	体部はおよそ右から左へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデ。口唇部に内傾する面をつくり出す。	①橙色②良好③完存④チャートを含み密⑤外面体部に黒斑、内外面に煤が付着
13H－12	坏	11.7 5.6	体部はナデのち下半を横方向のヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	体部はおもに横方向のヘラナデのち全体をヨコナデ。口唇部に内傾する面をつくり出す。	①暗赤褐色②良好③口縁部1/2、体部1/1④石英を含みやや粗⑤内外面に煤が付着
13H－20	坏	12.2 5.0	体部はヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	体部を右から左へのヘラナデのち全体をヨコナデ。	①橙色②良好③4/5④紫蘇輝石を含み精良
13H－13	坏	13.0 5.6	風化のため不明。	風化のため不明。	①橙色②良好③1/1④酸化鉄を含み精良
13H－3	高坏	14.7 10.3 10.4	脚裾部はヨコナデ。脚柱部を上から下へのヘラケズリのち坏底部を下から上へのヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	脚部は左上から右下へのユビナデ。坏部はヨコナデ。	①橙色②やや不良③完存④精良⑤内面坏部に煤が付着
13H－34	高坏	15.6 11.8 9.9	脚裾部はヨコナデ、脚柱部は上から下へのヘラケズリ。坏底部は下から上へのヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。	脚部は左上から右下へのユビナデ。坏部はヨコナデ。	①橙色②極めて良好③完存④精良⑤外面口縁部に黒斑
13H－2	高坏	15.6 10.6 9.9	脚裾部はヨコナデ。脚柱部は坏底部下端からの上から下へのヘラケズリ。坏底部は下から上へのヘラナデ。口縁部は左から右へのヘラナデのちヨコナデ。	脚部は左上から右下へのユビナデ。坏部はヨコナデ。	①橙色②極めて良好③完存④精良
13H－14	高坏	15.1 10.9 10.5	脚裾部はヨコナデ。脚柱部を上から下へのヘラケズリのち坏底部を下から上へのヘラナデ。口縁部は左から右へのヘラナデのちヨコナデ。	脚部は左上から右下へのユビナデ。脚部は脚底部を右から左へのヘラナデのち全体をヨコナデ。	①橙色②極めて良好③坏部1/1、脚部完存④精良
13H－41 B	甕	－ － 5.7	中央が凹む底面はナデ。胴部は左上から右下へのヘラケズリ。	右から左へのヘラナデ、接合痕を残す。	①にぶい橙色②良好③2/3④チャート、石英を含み精良⑤外面に煤が付着
13H－7	甑	24.6 31.0 9.1	凹凸を有し巻上げの際の粘土紐の単位が明瞭な胴部はナデ。底面はヘラナデにより面取りされる。口縁部はヨコナデ。口唇部を面取り。	胴部は右から左へのヘラナデ、下端を左から右へのヘラケズリのち中位以下を縦方向のヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。	①橙色②良好③完存④紫蘇輝石、軽石を含み粗
14H－5	坏	13.4 4.4	体部はナデのち中位を中心に粗い横方向のヘラナデ。口縁部はヨコナデ。	ヨコナデのち体部に縦方向の粗いヘラミガキ。	①にぶい橙色②良好③1/1④石英、軽石、紫蘇輝石を含みやや粗

こわれている

番号	器形	寸法	外面調整	内面調整	①色調②焼成③残存④胎土⑤備考
14H－11	甕	12.2 12.6 6.4	底面はナデ。胴部は上半を下から上へのヘラケズリ、下半を左上から右下へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は下位をナデ、中位以上を右下から左上への擦痕を残すナデで仕上げるが、接合痕が残る。口縁部はヨコナデ。	①暗赤褐色②やや不良③5/6④石英、輕石、砂粒を含み粗⑤外面に煤が付着し、内面も黒化する
14H－1	壺	— — 6.3	風化のため不明だが、胴部に右から左へのヘラケズリが認められる。	横方向のナデ。	①橙色②良好③1/3④輕石紫蘚輝石、石英を含みやや粗⑤外面に大黒斑
14H－21	甕	20.9 35.7 7.4	底面はナデ。胴部は下から上へのヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。	胴部は右から左へのヘラナデのちナデ。下位に接合痕を残す。	①にぶい橙色②良好③1/1④チャートを含み粗⑤外面胴部下半に多く煤が付着
14H－3	甑	27.0 28.6 7.8	胴部は上半の上から下へのヘラケズリのち下半の左上から右下へのヘラケズリ。底面はヘラケズリにより内傾する面をなす。口縁部はヨコナデ。	胴部はナデのち縦方向のヘラミガキのち下位のみ横方向のヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。	①外面橙色、内面黒色②良好③1/2④輕石、長石を含み粗⑤外面に煤が付着

ある程度復元できる

9.5